

# 教会学校教案誌

2011.4.5.6月号



No.41

日本キリスト改革派教会  
中部中会日曜学校委員会

# 2011年度カリキュラム (2011年4～6月分)

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
4月3日 進級式	悪霊を追い出すメシア	マタイ8:28－34	詩編27:1
	悪霊を追い出し、人を解き放つお方、救い主メシアの前にひれ伏そう		
4月10日	罪を赦すメシア	マタイ9:1－8	マタイ9:6
	罪を赦す権威を持つお方をこそ、わたしたちの神、救い主メシアとして仰ごう		
4月17日 受難週	十字架のキリスト	マタイ27:45－56	マタイ27:54
	わたしたちのために神に見捨てられて死なれた救い主キリストに感謝しよう		
4月24日 復活祭	キリストの復活	マタイ28:1－10	マタイ28:5－6
	主イエスはよみがえられた。罪と死に打ち勝って復活された主イエスを喜ぼう		
5月1日	ギデオンの召命	士師6章	士師6:16
	偶像と戦うために召し出されたギデオン。わたしたちを召し出す神に仕えよう		
5月8日 母の日	ギデオンの精鋭	士師7章	ルカ12:32
	数ではなく人間の力でもない。神が勝利を与えてくださることを知ろう		
5月15日	ささげられるサムソン	士師13章	士師13:7
	神にささげられたサムソン。わたしたちも神にささげられた者として歩もう		
5月22日	サムソンの祈り	士師16章	士師15:18
	神に立ち帰って祈るサムソンを神が用いられた。わたしたちも祈って仕えよう		
5月29日	ナオミとルツ	ルツ1章	出エジプト20:5－6
	神は夫と息子を失ったナオミにルツを与えられた。信仰の絆の深さを喜ぼう		
6月5日	ルツとボアズ	ルツ2章(～4章)	詩編17:7－8
	神は信仰者として生きる異邦の女ルツを憐れまれた。神の憐れみに生きよう		
6月12日 聖霊降臨祭 花の日	聖霊の降臨	ヨエル3章	使徒2:4
	聖霊降臨の約束。聖霊に満たされ、教会に結ばれ、神の幻に生きていこう		
6月19日 父の日	サムエルの召命	サムエル上3章	サムエル上3:10
	名前を呼ぶ神に答えるサムエル。わたしたちも神の呼びかけに答えて歩もう		
6月26日	サウルの召命	サムエル上9・10章	サムエル9:16
	神が王を選び油を注いで立てられる。油注がれたまことの王の前にひれ伏そう		

も く じ

2011年4・5・6月カリキュラム

まえがき	相馬伸郎	4
巻頭説教	芦田高之	5
日曜学校・教会学校訪問		
金沢伝道所教会学校の紹介	漆崎英之、漆崎春美	9
本誌の基本方針		
教会（日曜）学校像について	相馬伸郎	13
副読本のご案内		17
自由募金のお願い		18

聖書研究・説教展開例・分級展開例

4月 3日	20
4月10日	27
4月17日	34
4月24日	41
5月 1日	48
5月 8日	55
5月15日	62
5月22日	69
5月29日	76
6月 5日	83
6月12日	90
6月19日	98
6月26日	106

2011年7・8・9月カリキュラム	113
2011年度年間カリキュラム	114
執筆者よりひとこと・あとがき	116

---

# まえがき

相馬伸郎（本紙編集長）

---

ついに、第41号。10周年を迎えることができました。主なる神の御業に感謝し、御名をあげます。

今、「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」の御言葉が心に響きます（フィリピ2:13。新改訳は「望ませ」を「志を立たせ」、口語訳は「その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神」と訳出）。聖霊なる神は、私どもの心のもっとも深いところに、「ただ神の栄光のために！」という志（本音）を植え付けて、ご自身のみ業を、しもべたちを通して進めてくださいます。

ただしそれは、事業が順調に進むことを保証するものではありません。日本キリスト改革派教会の「常識」は、委員会によって周到な準備をして、事柄を進めて参ります。確かに、わたしは、教育委員会から教案誌発行検討の担当者としていただきましたが、委員方は、検討で終わるものとお考えでした。

しかし、わたしは、ただちに木下裕也教師と名古屋駅前の小さな喫茶店の小さなテーブルで相談し、すぐに望月信教師に実務にいたる相談をし、さらに春名義行教師を加え、編集部が構成されました。こうして第一回の会合を豊明教会の牧師室で、信徒有志にも加わっていただき開催しました。「何としても、カテキズムカリキュラムの二年間は季刊で発行しましょう。財政の裏付けはないので、不足の際は、自分たちの献金で賄いましょう」と、「有志」で奉仕を担うことを申し合わせての出発でした。その後、望月教師とともに「子どもカテキズム」の編集に取り掛かりました。高蔵寺教会からの帰路、深夜の雪化粧の道をおそろおそろ車を走らせたことを鮮やかに思い起します。かくて、創刊号は、委員会の監督下、わずか数カ月の準備で刊

行したのです！

今思えば、当然でしたが、第一回定期会に創刊号を配布したところ、実に厳しい批判を浴びせられたのでした。さらにその二年後、大会教育委員会による発行の提案が継続審議となったとき、弱気になりました。ところが、同志方はひるみませんでした。そして、それが正しい決断であったことは、今や、実質的には大会の陣容で発行、利用されている状況において、明らかであると思います。

あれから、編集部に辻幸宏教師、長谷川潤教師、そして二宮創教師が加わりパワーアップされ安定がもたらされました（途中、短期間でしたが、村手淳教師、梶浦和城教師もご奉仕くださいました）。

しかし、私どもは、自己満足などまったくしていません。むしろ、あの創刊の志がどこまで実現できたのかを考えると、むしろ批判されるべき内容になってしまっていないかと自問しています。ただし、ひと言、10年もの間、仕える教会の伝道牧会に手を抜かず！一度も事故を起こして滞らせることなく刊行した背後にある労苦（その冷や汗……、その半徹夜……）に言及させていただくことを御許してください。専任の奉仕者のいない私どもがです。

11年目を迎えるこのとき、皆さまとともに、志を新たにして、神と教会教育によく奉仕し、契約の子らを養い育てる教案、何よりも地域の子らへの伝道を鼓舞する誌面となるように努力を重ねて参りたいと思います。

最後に、新しい世代の奉仕者が加えられ、編集作業を担ってくださる信徒の奉仕者が起こされるように、どうかお祈りください。

（中部中会日曜学校委員会委員長、  
名古屋岩の上伝道所宣教師）

## 「星に導かれて救い主に会う」

～マタイによる福音書2章1～23節による説教～

芦田高之（新浦安教会牧師）

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、  
お前はユダの指導者たちの中で  
決していちばん小さいものではない。  
お前から指導者が現れ、  
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。

占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。

「ラマで声が聞こえた。  
激しく嘆き悲しむ声だ。

ラケルは子供たちのことで泣き、  
慰めてもらおうともしない、  
子供たちがもういないから。」

ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行き住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。(マタイによる福音書 2章1～23節)

## 序)

東の国の占星学者たちは星に導かれて、救い主にお会いしました。私たちの人生も、注意深く主のお導きを探って歩んでいますと、星の導きではなくても、何かしらのお導きを主からいただきつつ、主が私たちを右へ左へと導いてくださっていることが分かります。振り返ってみると、主が一つずつ、また一歩ずつ、私たちを御自身の御心に従って導いてくださっていることを気付かされます。日常、普通の歩みの中でも、主が私たちと共に歩んで私たちを導いてくださっている。その事実を今朝もう一度確認させていただければと思います。

### 1. ヘロデと占星術の学者

ヘロデ大王は紀元前73年に生まれ紀元前4年に死んだとされています。ですから、イエス様の御誕生は少なくとも紀元前4年よりも前のこととなります。その頃、占星術の学者たちが遠路、ユダヤ人の王としてお生まれになる方にお会いするためにやってきました。彼らは伝統的には東の国の博士たちと言われていますが、実は「占星術者たち」でした。Magosという言葉が使われていて、別の個所では「魔術師」と訳されています。ユダヤでは、「占い」「魔術」は、さげすまれていました。そんな彼らが、ユダヤの国の新しい王の誕生を指し示す星を見つけ、わざわざ遠い道のりを表敬訪問に来たのです。

他方、旧約聖書に通じているエルサレムの祭司長たちや律法学者たちは、「ベツレヘムから指導者が現れ、主の民イスラエルの牧者となる」という預言者ミカの言葉を占星術の学者たちに紹介します。けれども、自分たちは新しくお生まれになったユダヤの王、救い主、メシアに会いに行こうとはしません。ヘロデに至っては、その新しい王の居場所の詳細を知らせよと占星術の学者たちに命じ、実は殺そうと企んでいました。

救い主は、この世の王にも、旧約聖書に精通している宗教家たちにも歓迎されない。むしろ、ユダヤ人たちが魔術師、占い師として蔑んでいた「異国の占星術者たち」によって歓迎され礼拝されていた。これがこの聖書の個所が伝えた一つのメッセージです。

### 2. 星に導かれて

この占星術学者によって見出された救い主は、この世の権力者、知恵ある者たちには受け入れられず、むしろ、無視され、崇められず、殺害されようとしていました。これが私たちの救い主です。今朝は、この救い主がこの世の権力者によって殺害されそうになっても、主のお計らいの中で守られていく。その守られていく様子を注目したいのです。

まず、神様の奇跡ですが、いったい奇跡をどう定義したらいいのか。もちろんおとめマリアが聖霊によって身ごもったことは奇跡と言えま

しょう。では、東の国の占星術者たちが導かれてきた星についてはどうでしょう。我家の子どもたちが小さな時、夜、車に乗って家に帰っておりますと、月を眺めながら言ったのです。「月がついてくるよ」と。その月を眺めているとずっと自分について来る、そして、家にまで付いて来る。そのように幼子には思えたんですね。この時の星も何か特別に光を放つ星だったのかも知れませんが、それが東の国から見たら、ユダヤの方面で光り輝いていて、その星を見つめつつユダヤのエルサレムまで来た。すると、聖書学者たちがベツレヘムを紹介するのでベツレヘムへ向かう。その星を見るとあたかも自分たちを導くようにベツレヘムまでついて来る。そして、該当する幼子とその両親をある家で見つける。星はもう動かない。というか、目的地について、自分たちが動かなくなるので、星も彼らの視界の中で留まるわけです。

たぶん占星術の学者たちが幼子イエス様のところにたどりついた時、彼らは、馬小屋ではなかったと思います。どこか別の安定した所に少し大きくなされたイエス様はヨセフとマリアと一緒にいらしたと思います。この御三人の様子を見てどうして、占星術学者たちは、「この方々だ」と分かったのか。これは、普通に分かったと思います。聖霊に満たされた平安、喜び、清潔さがこの幼子と御両親には満ち満ちていたのですから。

### 3. ヨセフに対する主の御告げ

このあと、占星学者たちにも、またヨセフにも、主の御告げが夢の中で与えられました。これはもちろん奇跡と言えないことはないでしょう。でも、ある事柄に祈りと思いを集中させている時、私たちはしばしば、主のお導きとしか言えない知恵が与えられたり、不思議と道が開かれたり、道が閉ざされたりします。こうしたことはみな、主のお導きです。ヨセフたちは主の御告げを夢で与えられました。今、私たちは聖書の言葉、教会の兄弟姉妹、家族、教会外の

方の言動をとおして、主のお導きをいただいているのです。

毎回それを感じて感謝したり恐れ入ったりすることはありませんが、実はすべてが主のお計らいの中で運ばれています。それを私たちは摂理と言っています。生きて働かれる主が、すべての瞬間、私たちを御自身の御心に従って導いてくださっています。

先日、私は中会のある委員会で、知恵と配慮を必要とすることがありました。そのことをずっと、考え祈り続けておりました。ある時、一つの考えがひらめいて、その難しい事柄をふさわしい方向へと導くことができました。自分の知恵だとは思えない。それはまさに神様から頂いた知恵でした。私の肉眼には見えませんが、天使が私の前に立って、「このようにしなさい」と、御告げをくださった。そのように私は理解しています。

祈って考えて相談して、悩んで、道が閉ざされて、諦めて、それでもまた祈って……と、神様との間で昔ヤコブが神様と祈りのお相撲を取ったみたいに、神様にしがみついて離さない。祈り、悩み、門をたたき、人にも相談し続ける、そしてまた祈り続ける。……そうすると、神様が思いがけない方法で、思いがけない時に手を差し伸べてくださる。その時、私たちは、「これは神様のお導きだ」と実感させられるのです。

祈りも、悩みも、考え続けもせず生きていますと、神様の御手が見えてこないものです。ヨセフはマリアが身ごもった時も、悩んで祈り続けていたはずですが、イエス様が無事誕生した時も、羊飼いや東の国の占星術者たちの突然の訪問を受けたり、シメオンやアンナに祝福されました。「この子はいったいどういう子なんだろう。これほど特別に人々から尊ばれるこの子を何とか守らなければ…」と、思い巡らし祈っていたんだと思います。だから、天使の呼びかけにも敏感に反応し、単なる夢じゃなくて、神様からのお告げだと確信できたのです。そうし

て、ベツレヘムからエジプトへ脱出する時も、エジプトから故郷ガリラヤへ帰るときも、夜中であっても即座に御声に従いえたのです。

#### 4. 日常における主のお導き

今日、最後に注目したいのは、ヨセフがイエス様とマリアをナザレからベツレヘムへ、ベツレヘムからエジプトへ、エジプトからまたナザレへと導いたその行程、道行きです。

すべて神様のお導きの中で、ヨセフはマリアとイエス様を旅から旅へと連れ歩いたのです。すべて神様のお導きとお守りの中です。でも、実際の旅路は、奇跡的なことはありません。ベツレヘムにたどり着いたのが他の人々よりも遅かったら、適当なホテルは当然ながら満室です。だから、馬小屋くらいしかなかったのです。あっと驚くような奇跡的な道が開かれて、ホテルの一部屋が与えられる、ということはなかったのです。

ヘロデが、新しく生まれたユダヤの王を殺そうとしている、という時も、奇跡的にヘロデが死ぬということはないのです。悪いヘロデは生きたままで、その悪者の手から逃亡するという、普通の逃げの手段でエジプトへと逃げ延びて行くのです。この逃避行も特別にグリーン車、ファーストクラスが与えられて…というのではない。普通に歩いて逃げ延びて行くのです。逃げなければならなければ、救い主、神の子でも逃げなければならぬ。ヘロデが死ぬのをエジプトでじっと待たねばならない。神の子でも、父なる神が用意された道なら、逃げたり、待ったり、そして、また戻ったり…という道のりが必要なのです。

こうした逃げたり、待ったり、また戻ったり……という営みは、すべて神様のお導きやお守りの中でなされています。ヨセフやマリアの目には見えなくても、天使が守り支えながらイエス様とヨセフ、マリアを導いてくれました。しかし、当の本人たちにとっては、住民登録が必要ならどうしても住民登録をするために

ベツレヘムに行かなければならぬ。逃げなければならぬ時はどうしても逃げなければならぬ。ほとぼりが冷めるまではどうしても待たなければならぬ。このようにどうしても踏んでいかなければならぬ道を、救い主でさえ踏んでいかなければならなかったのです。

私たちの生活も同じです。いつも神様が送ってくださる天使たちに支えられながら、見守られながら私たちは、歩んでいます。神様によって守られています、導かれています。でも、神様から与えられた道は家庭生活においても、職場や学校生活、また個人的な営みの中でも、どうしても我慢しなければならぬ時もあるわけです。時が来るまではどうしても解決しないこともあるわけです。我慢しながら、唸り続けなければならぬ時もあるわけです。じゃあ、見捨てられているか、というとそうではない。神様が目には見えないけどいろんな形で天使を私たちの回りにはり巡らして下さりながら、私たちがお与えくださった道を一步一步先に進んで行くようにと、言葉に現わせない激励を私たちに与えつつ、私たちを導いて下さっているのです。

ご一緒に祈りましょう。占星術者が星に導かれたように、ヨセフが天使の御告げに促されたように、今、私たちもあなたのお守りとお導きの中で、あなたがお用意くださっている道を歩ませていただいています。あなたを守って下さっている事実が見えない時もあります。用意くださっている道を進み行くことに躊躇を覚えたり、立ちすくんだり、疲れ果ててしまうこともあります。でも、ヨセフが逃げずに、あなたがお与えになった道を突き進んだように、この年も日々、また、週ごとに私たちに用意されている諸々の道をあなたの見えざる支えとお守りに包まれている事実を信じつつ進み行かせてください。耐え忍ばせてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

(2011年1月2日、新浦安教会朝礼拝説教)



# 金沢伝道所教会学校の紹介

漆崎英之（宣教教師）・漆崎春美（教会学校教師）

金沢伝道所は中部中会設立25周年記念開拓事業として開設された伝道所です。1989年7月の伝道開始以来、契約の子の教育と地域の子どもたちへの伝道のために教会学校の働きが続けられてきました。

現在、毎週、8名の子どもと10名の大人（教師7名）が出席しています。また、月一回ですが、富山主日礼拝（午後の礼拝）の後、教会学校の分級（契約の子1名）を行っています。全員、教会員の子どもですが、年に二回の子ども集会には、チラシを配り、近隣の子どもたちが多く集まります。今度、いつやるの？と聞く近所の子どもたちもいて、毎回、楽しみにしてくれています。

## 1. 礼拝

9時に教師が集まって祈りをささげた後、9時10分から礼拝が始まります。幼児から中学生まで一緒に礼拝をささげます。

聖書のお話は、以前は教師が交代で担当していましたが、今は牧師が主に行っています（牧師ができないときだけ教師が交代でします）。カリキュラムは『成長』のものや独自のものを使っていましたが、2001年からは教会学校教案誌のカリキュラムを用いるようになりました。

礼拝の順序は次のとおりです。

- ①前奏、②さんびか、③主の祈り、
- ④十戒、⑤お祈り、⑥聖書朗読、
- ⑦お話、⑧お祈り、⑨さんびか、
- ⑩ささげもの、⑪お祈り（子ども）、
- ⑫後奏

## 2. 分級

9時45分ごろから、幼稚科、小学生科、ジュニア科（小学6年生～中学生）に分かれて分級が始まります。

礼拝後の分級の時間は、一週目は分級、二週目はゲーム、三週目はプレイズ、四週目は分級、五週目はゲーム、六週目はプレイズというふうには、①分級②ゲーム③プレイズというサイクルを繰り返して行っています。一週目の分級は、その日の聖書箇所についての学びや工作などを各クラスに分かれて行います。ゲームの日はゲームの他、プール遊びや雪遊びをしたり、誕生会も行います。プレイズの日には、ダンスや歌で主をさんびします。ゲームとプレイズの日には小学科とジュニア科合同で行います。

分級を三つの形式に分けて行うのは、教会学校の教育の中では、学ぶこと、飛び跳ねること（遊ぶこと）、さんびすることなどの要素がそれぞれに大切であると考えたからです。これらを組み合わせることによって、多様な形での学びと共に、教師と子どもたち、また子ども同士の交わりが深められています。また、教会の他の奉仕を担っている教会学校教師の負担軽減にもつながっています。

また、三週間ごとに新しい聖句を暗唱し、三カ月分の暗唱聖句を復習してシールを渡します。シールの数に従ってクリスマスに希望の商品と交換できるようにしています。

### 3. 行事

#### ①イースター

みんなで卵さがしをします。

#### ②たこやき大会

業務用のたこやき機で大量のたこやきを作って一緒に食べます。1990年から地域の子どもたちのために長年行ってきました。味は抜群で大好評でしたが、準備と後片付けが大変なため、2009年からは「ジョイフル・タイム」に切り替えました。楽しい企画の中に聖書のお話を組み入れて行います。

これまでに行った企画は次のようなものです。ショベルカーやクレーンでのお菓子取り、スーパーボールすくい、射的、ヨーヨーつり、魚つり、ダーツ、パットゴルフ、もぐらたたき、型ぬき、工作（ビーズのアクセサリ、ぶんぶんゴマ、ペーパークラフト、バルーンアート、バックのステンスル）、お菓子作り（パンケーキ・クッキー・アイスクリームのデコレーション、ポップコーン、綿菓子）ぬりえ、タングラム。

#### ③夏期学校

2008年から、7月の連休に、近くの研修館で一泊の夏期学校を行っています。テーマを決めて、いつもより時間をかけて聖書を学びます。これまでのテーマは、「教会はイエス様の体」「デボーションについて」「聖書ってすごいんだ」などです。ゲームやキャンプファイヤー、証、花火などもあり、楽しいときを過ごします。

2008年と2010年の夏期学校にはCRCのミッショントリップのチームのメンバーも参加していただき、彼らと共に過ごす時間は、子どもたちにとって特別な恵みとよい刺激、交わりの時となりました。

#### ④クリスマス会

ゲームや歌、お話の他、これまでに次のようなことを行いました。

指人形（「くつ屋のマルチン」）、スライド

（「賢者の贈り物」）、紙芝居、ビデオ（「クリスマスってなあに」、「おめでどうイエス様」、「クリスマスを救え」、「ファースト・クリスマス」）、人形劇（「メリークリスマスおおかみさん」）、ペープサート（聖誕劇）、パベットの劇、ブラックシアター、劇（「よきサマリヤ人」、「ローソクマン」）、工作（ペットボトルのクリスマス飾り、クリスマスカード、クリスマスの壁掛け、キャンドル）、オークション、お菓子の家作り、お菓子（ミニドーナツ、アイスクリーム、クッキー、ケーキ、クレープ）のデコレーション。

#### ⑤ハンドベルの間安

花の日やクリスマスに、子どもたちと老人福祉施設を訪問します。ハンドベルの演奏や歌を届け、ゲームやおしゃべりをして交わりを持ちます。施設の方々にはたいへん喜ばれています。

### 4. デボーションの指導

2008年から、家庭で行うデボーションの指導を始めました。最初はジュニア料の生徒だけでしたが、教案誌の「いのちのパン」を用いて、教えられたことをデボーションカードに書くようにしました。一年後、夏期学校でデボーションについて学んだ後、小学科の子どもたちもできるように、質問形式のデボーションノートを作成し、それに書いてもらうようにしました（資料A）。

さらに一年後、質問に答えるものから、教えられたことを自由に書ける形式のデボーションノート（資料B）や、市販のノートにその日の聖句や心に残ったことなどを書くやり方に切り替えました。一人ひとり、子どもたちの状況に合わせて、どんな形がよいのか試行錯誤しながら、その都度、形を変えて進めてきました。

毎日きちんとできる子、三日に一度ぐらいの子、書くのはめんどうだからと読むだけの子と様々です。子どもには難しい言葉が多く、言葉

## デボーションノート

マタイによる福音書10章16節～20節

2009年 12月 17日 木曜日

- ④ 「オオカミの群れに羊を送り込むようなものだ。」というイエス様の言葉で、オオカミとは誰のことですか？羊とは誰のことですか？線で結びましょう。



オオカミとは

- ・ オオカミのように口が大きい人
- ・ 迫害する人たち



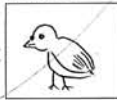
羊とは

- ・ 弱々しい性格の人
- ・ 弟子たちのこと

- ⑤ イエス様がおっしゃった言葉を絵でかきましょう。



のように賢く



のように素直になりなさい。

- ⑥ イエス様のために迫害される人々は、どうして幸いなのでしょう。  
(マタイによる福音書5章12節)

天には大きな報いがあるから。

今日の聖書のかしよを読んで思ったこと、教えられたことを書こう！

弟子達は、イエス様の教えをする時、色々の苦しみがありました。でも、弟子達はイエス様の教えをやめようとはしませんでした。私達も強い信仰を持って、どんな時でも、イエス様に任せていけるように。

神様、どうか私たちに、神様の知恵と新置な信仰を与えてください。イエス様のこと話を話すことができるように、力を与えてください。

資料A 質問形式のデボーションノート

## デボーションノート

2011年 1月 4日 (火)

1. 神様がこのときをみらびいてくださるようにお祈りしましょう。
2. みことばを2.3回読んで、神様が語ってくださることに耳をかたむけましょう。
3. デボーションノートに、感じたことなどを書きましょう。
4. 教えられたみことばにしたがうことができるように、お祈りしましょう。

○聖書箇所 ルカによる福音書

24章 28節～35節

### ① どんなことが書かれていましたか？

一行は目指す村に近づいたが、イエスは夜も先に行こうとされていたので、二人は無理に引き止めた。一緒に食事の席に着くと、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開き「イエスだ」と分かったが、その姿は見えずかった。そして、すぐにエルサレムに戻ってみると、サマリアとその仲間が集まり、主は本当に復活してシモンに現れたと言っている。

### ② 心に残ったみことばも書きましょう。

道で話しておられるとき、主が聖書を説明してくださったとき、わたしの心は燃えていた。主を信じて王の心によってわたしたちは熱くされる。

資料B 自由形式のデボーションノート

そのものの意味を理解できない箇所もあります。日本のキリスト教界では、今、子ども聖書辞典の出版が待ち望まれています。

子どもであっても、御言葉によって養われる必要性があることは大人と何も変わりません。柔らかい彼らの魂を神様が御言葉によって成長させてくださっているのを感じています。子どもたちが継続的に御言葉に親しむことができるように、今後も一人ひとりに合ったペースとやり方で指導を続けたいと思っています。こうした子どもデポジションノートに刻まれた子どもたちの信仰を通して、大人が深く教えられ、大人の信仰が問われることがたびたびあります。

## 5. 教会学校の夕拝

中学生になって部活などで教会学校や主日礼拝に出席できない子どもたちのために、教会学校の夕拝を始めました。ここで大事なことは、朝から教会に来ている子どもたちが、教会で遊びながらその時間まで待って、共に夕拝をささげることです。部活に行った子どもたちが、安心して教会の交わりの中に置かれる配慮が必要です。

## 6. 大人と一緒に守る主日礼拝

礼拝堂には、小学校から譲ってもらった子ども用の机と椅子が用意されています。礼拝堂と続きの和室で礼拝を守っている幼児とお母さんもおられます。小学生以上の子どもたちには、「礼拝中のメモ」(資料C)の用紙に、その日の聖書箇所と説教題、教えられたこと、心に残ったこと、絵などを書いてもらいます。最初は静かに座っていることのできなかった子どもたちも、少しずつ落ち着いて礼拝を守れるようになります。メモや絵には、子どもたちの信仰がそのままに表現されていて、素直な信仰に大人の方がしばしば教えられます。

礼拝の最後に、子どもたちは前に出て、暗唱聖句を一人ずつ発表し、御言葉入りのカードを

もらいます。

## 7. 子どもたちの奉仕に助けられて

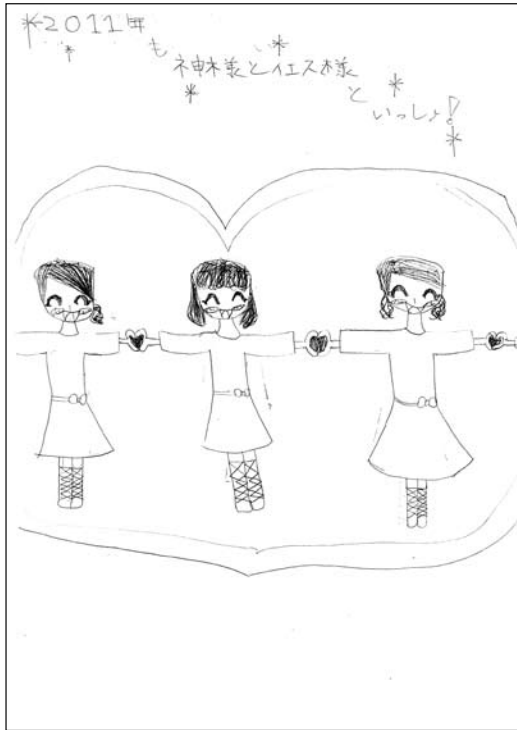
金沢の場合、40畳の礼拝堂を、食卓の交わりと勉強会の場、子ども集会の会場と多目的に兼用しています。礼拝後、男の子は、折りたたまみのテーブルを出し、礼拝堂を昼食のできる体制に作り直します。女の子は、食事の配膳や洗った食器を拭きます。奉仕を通して、子どもたちも、キリストの体なる教会に組み込まれていきます。大人と子どもが共に一つの奉仕を担い合うことによって、子どもも大人も神の民、神の家族であることを体得することができます。また年々、衰えていく体力を身にしみて感じている大人にとって、子どもたちの奉仕は、大きな助けとなっています。

## 8. 今後の課題

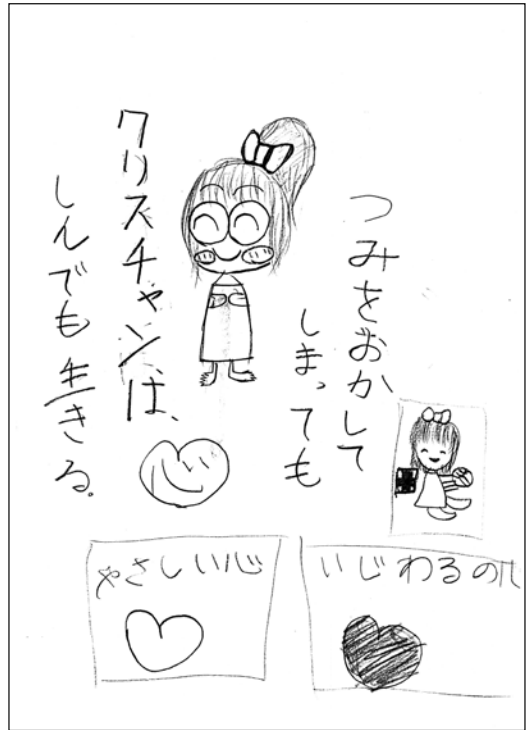
地域の子どもたちへの伝道については、開設当初から考えてきたことですが、実際には、子どもたちを継続的に教会に留めることはできませんでした。この間に、契約の子どもたちは成長していきました。こうした状況の中で、地域の子どもたちへの伝道を考えた場合、契約の子どもたちと同じレベルで地域の子どもたちを扱うことはできません。数ヶ月に一度、子ども伝道のための継続的な集会を持つことが目標です。

ジュニア科では、信仰告白に向けての教理的な学びも必要になってきています。

大会・中会の夏季キャンプへの出席を子どもたちに促すことも大切です。子どもたちは、毎年、これを楽しみにしています。大中会的な交わりの中で、多くの信仰の友と出会い、大勢の奉仕者スタッフとの関わりを集中的に受け取ることができます。CRC 宣教チームとの交わりも大きな祝福です。若いチームメンバーとのキャンプ、そこでの礼拝、賛美、交わり、証、遊び、どれもが子どもたちに大きな信仰の喜びと成長

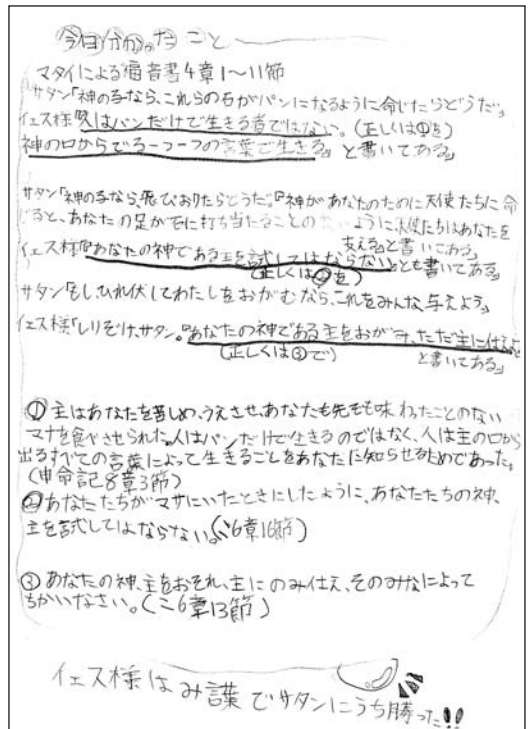


資料C 礼拝中のメモ



を促します。異文化に生きるメンバーとの関わりを通して、子どもたちの信仰の幅は広がっていきます。

やがて子どもたち全員を、それぞれの賜物に従い、神様の奉仕のためにこの金沢の地から派遣できる日が来ることを願いながら、これからも主から与えられた教会学校の奉仕に励みたいと思います。



# 教会（日曜）学校像について

相馬伸郎（本誌編集長）

## 1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ第56章7節、マタイ第21章13節）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするので、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

子どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は

神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私もはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることとなります。

## 2. 分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なのではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです。」準備したものの全部をやれたかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

### 3. 子ども礼拝式における説教の重要性

#### —日曜学校の目標予—

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活を確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（公同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかかと思えます。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでしよ

う。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわかまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

### 4. 説教の完成としての牧会—分級の目標—

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「牧会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずで

説教（神の言葉の共同的伝達）と牧会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

## 5. 教会形成の一環としての日曜学校

### —教師会と教師—

およそ教会的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているのであり、そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められているのです。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

## 6. 伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあ

ります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子どもたちを捉える伝道の間として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

私どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

私どもの目に子どもたちは、どのように映っているのでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさへすれば、子どもらこそはつきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

私どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria! (ただ神の栄光の為に!)

(中部中会日曜学校委員会委員長、  
名古屋岩の上伝道所宣教教師)



# 副読本のご案内

## 『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

### ● 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを禱にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

## 『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満10年となり、第41号まで発行して参りました。中部中会では8割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

---

**〈背景と文脈〉**

主イエスはいやしのみわざを通して、ご自分が権威と力あるメシアであることを示された。人々が主イエスを信じ、永遠の命を受けるためである。主は、多くの悪霊につかれた者たちもいやされた(8:16)が、福音書はそのすべてを詳細に記してはいない。今日学ぶ箇所は、悪霊に取りつかれた二人のいやしが詳細に記されている箇所のひとつである。主イエスの権威と力は霊の世界にも及ぶ。主の来臨は広義での終末が始まったことを示している。

**〈悪霊、主イエスと対決する (8:28-29)〉**

ガダラ人の地方(28)とはガリラヤ湖の南東部に位置する地域である(聖書巻末にある地図参照)が、詳細についてはわかっていない。「多くの豚の群れがえさをあさっていた」(30)、とあるように、そこは異邦人が多く住む地だった。ユダヤ人にとって豚は汚れた動物であることから、養豚はユダヤ人の地では行われなかった。

その地方で、主イエスは二人の悪霊に取りつかれた者と出会われた。マルコヤルカの並行記事では悪霊に取りつかれた者は一人である。これは矛盾ではなく、マルコヤルカは二人のうち一人に焦点をあてて記述した、と考えられる。二人は「墓場から出てイエスのところにやってきた」(28)。彼らはだれも住みたいと思わない墓場を住み家としていた(マルコ5:3)。非常に凶暴だったので、だれもそのあたりの道を通れないほどだった(28)。「昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で打ちたたいたりしていた」(マルコ5:5)。これらの異常な行動は悪霊に支配されていたことを示す。ちなみにルカ8章30節は、支配していた悪霊がたくさんだったと記している。

「やって来た」(28)と訳されている語は対決する、反対するという意味があり、それが、彼らが主イエスのところにやってきた目的だった。「神の子、かまわないでくれ。まだ、その時ではない

のにここにきて、我々を苦しめるのか」(29)と彼らは言ったが、これはもちろん彼らを支配していた悪霊の言葉である。悪霊は、主イエスが神の子であり、彼らを苦しめるためにこの地上に来られたことを知っていた。「その時」とは定められた時、すなわち、悪霊が神の子によって滅ぼされる終末を指すと考えられる。悪霊は終末での自らの運命を知っていて、まだその時ではないのに、我々を苦しめるのかと抗議した。悪霊たちは主イエスに関して正しい知識をもっている(ヤコブ2:19)。

**〈主イエス、悪霊を追い出される (8:30-34)〉**

悪霊たちは、はるかかなたで豚の大群がえさをあさっているのを見て、「我々を追い出すなら、あの豚の中にやってくれ」(31)と願った。なぜ、そのようなことを願ったのかはわからないが、豚は律法では汚れた動物であり、彼らが入るにはふさわしかった、と考えられる。目には見えなくても、悪霊が二人から出て豚の中に入ったのは、「豚の群れがみな崖を下って湖になだれ込み、水の中で死んだ」(32)ことから明らかである。マルコ5章13節によると、豚は約二千匹であった。

これを見ていた豚飼いたち、多分雇われてその働きをしていた者たちは、町に行き行って起こった出来事を一切知らせた。彼らは恐らく、飼っていた豚が死んでしまったことに関して、彼らに過失はなかったことを告げたとされる。その話を聞いた町中の者がやって来て、主イエスにその地方から出て行ってほしいと言った。彼らは恐れに取りつかれたからである(ルカ8:37)。その町の者たちは、多くの豚が死んでしまった損失だけに目を留め、悪霊に取りつかれ、絶望的な状態にあった二人の人間を癒された力あるメシアを信じようとはしなかった。そのようにして彼らは福音を拒絶した。物質的な低いレベルの生き方を自ら選択したのである。(後藤公子)

---

4月3日

「悪霊を追い出すメシア」

説教展開例

---

テキスト            マタイによる福音書 8章28～34節

参照カテキズム  子どもカテキズム  問1

---

### 〔単元のねらい〕

悪霊の働きと言うと、それは時代遅れの神話であるというような反応が返ってくるかもしれない。しかし、人を命の神から引き離そうとする霊の力は、今なお働き続けている。わたしたちは一方では、悪霊の力を決してみくびってはならない。

しかし、わたしたちは恐れることはない。悪しき霊に勝利されたイエス・キリストがわたしたちを支配しておられるからである。イエス・キリストのもとでこそ人はまことの命に回復されるのだということ、救われた喜びをもって語りたい。

---

## 「取り戻された命」

---

人間の幸せは、神さまと共に生きるところにあります。人間の本当の命は、神さまと共に生きる命です。神さまのみ手の中で、神さまと結びついて生きているなら、わたしたちは本当の命を生きています。そこに喜びがあり、幸せがあります。そして、神さまと共に生きる喜びと幸せを与えてくださるために、み霊がいつも働き続けてくださっています。み霊はわたしたちを神さまと結びつけ、神さまご自身の命に生かしてくださるお方です。

しかし、この世には人間を神さまから引き離そうとする霊も働いています。それは悪しき霊です。悪霊は強い力でわたしたちを神さまから引き離し、わたしたちから本当の命を奪い、わたしたちを苦しめ、病ませ、恐れさせ、滅ぼそうとします。聖書には、このような悪霊の働きがあきらかに記されています。

悪霊の働きと言うことを言うとき、それは昔のお話にすぎない、科学万能の時代にそんな時代遅れのことを持ち出すなんて、と言う人があるかもしれません。けれども、人を神さまから引き離し、人の命を滅ぼそうとする力は、今なお働いています。わたしたちはその力を見くびってはなりません。

けれども、わたしたちは恐れなくともよいのです。心配しなくてよいのです。なぜなら、イエス

さまがわたしたちと共にいてくださるからです。イエスさまは悪霊よりも強いお方です。イエスさまのみ霊は、悪霊の働きからわたしたちをしっかりと守ってくださるのです。

今朝は、イエスさまが悪霊に取りつかれた二人の人を、その支配から救ってくださったことを学びましょう。

悪霊に取りつかれるということがどれほど悲しく、恐ろしいことかということを、この二人の人は示しています。まず、この人たちは墓場に住んでいました。墓場は死んだ人の住みかです。生きている人の住むところではないのです。この人たちが墓場に住んでいたということは、すでに命を失っていたということです。もちろん体は生きていますが、もはや人間としてのすこやかな命を生きてはいなかったということです。

それから、彼らはとても凶暴であったと書かれています。野の獣のように凶暴であったのです。ほかの人々を傷つけようとするので、だれも近づくことができなかつた。自分たちの身も傷つけていたにちがいません。何と悲しい、みじめな姿でしょう。

これが悪霊の力です。悪霊はこの人たちに住みつき、この人たちの言葉も心もふるまいも支配して、ほしいままにふるまっていたのです。悪霊の

力の前には、人間は無力です。

しかし、イエスさまがこの地方にお着きになると、二人の人は墓場から出て、イエスさまのところにやってきました。イエスさまのところに来たなら、もう大丈夫です。わたしたちのひとりひとりにとっても、救いとはイエスさまのところにいくことなのです。

イエスさまのみ前で、二人の人は突然叫び出しました。もちろん、この人たちを借りて悪霊が叫んだのです。それは、「神の子、かまわないでくれ。まだ、その時ではないのにここにきて、我々を苦しめるのか」という叫びでした。

悪霊には、イエスさまの力にはかなわないということがわかっていたのです。それで、イエスさまを恐れたのです。悪霊は、イエスさまがこの二人の人から自分たちを追い出されることを知っていました。それで、我々を追い出すのなら、あの豚の中にやってくれと頼みました。遠くの場所で、豚の群がえさをあさっていたのです。

イエスさまは悪霊たちの願いをきかれたので、悪霊は豚の中に入りました。すると、悪霊に取りつかれた豚の群はがけを駆けくだって湖の中になだれ込み、水の中で死んだのです。

悪霊に取りつかれた豚の群がいきなり走り出し、湖に飛び込む。こわいなあ、と思った人があるかもしれません。確かに、恐ろしい光景です。

けれども、わたしたちは、イエスさまによって悪霊を追い出していただいた二人の人にこそ目をとめたいのです。この人たちは、もう墓場に住むことをしません。他人も、自分自身も傷つけることはありません。イエスさまと出会って、本当の命の喜びを取り戻したからです。人が生きるべきすこやかな命を、イエスさまが取り戻してくださいましたからです。

わたしたちの命の喜びは、イエスさまと共に生きるところにあるのです。イエスさまをあがめて生きるところにあるのです。 (木下裕也)

---

[今週の暗唱聖句]

詩編 27編1節

主はわたしの光、わたしの救い

わたしは誰を恐れよう。

主はわたしの命の砦

わたしは誰の前におののくことがあろう。

---



## 〈ねらい〉

今日は、主イエスの、悪霊に取りつかれた男の人のいやしの御業を通して、イエス・キリストの永遠の命を与える権威について学びたいと思います。

## 〈展開例〉

皆さん、お墓ってどんなところだろう?? 少し考えてもらう……聖書は次のように言っています。

「イエスが向こう岸のガダラ人の地方に着かれると、悪霊に取りつかれた者が二人、墓場から出てイエスのところにやって来た。二人は非常に狂暴で、だれもその辺りの道を通れないほどであった」(28)。

聖書の時代には、このように悪霊につかれた人がたくさん登場します。彼らは、「墓場」に住んでいました。墓場って、暗い所ですよ。さみしい所ですよ。決してぼくたち私たちが住みたいと思うような所ではないですよ。でも、そこをお家にして、まわりの人々を脅かしている男の人たちがいたのです。

そこに、イエス・キリストがやってきました。悪霊は人間を苦しめることはできます。でも、神様には絶対に勝つことができません。イエス・キリストこそが、ほんとうの神様であることを知っていたのです。「突然、彼らは叫んだ。『神の子、かまわないでくれ。まだ、その時ではないのにここにきて、我々を苦しめるのか』」(29)。自分が最後には負けてしまうことを知っています。

これが、ぼくたち私たちが信じているイエス・キリストの素晴らしさです。イエス・キリストは、どんなことがあっても、いつも、ぼくたち私たちと一緒にいてくださいます。そして、どんなことがあっても、ぼくたち私たちを守り、導いてくださるのです。イエス・キリストの内には、すべての権威があります。イエス・キリストは、ぼくたち私たちの罪、悪い心を赦し、永遠の命を与えてくださり、ぼくたち、私たちを神の子としてくださるのです。ぼくたち私たちの毎日の生活に、どんなに苦しいことがあったとしても、イエス・キリストと一緒にいてくださるかぎり、絶対にだいじょうぶです!!

けっきょく、この男の人たちにとりついていた悪霊は、『我々を追い出すのなら、あの豚の中にやってくれ』と願」(31)って、「イエスが、『行け』と言われると、悪霊どもは二人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れはみな崖を下って湖になだれ込み、水の中で死んだ」(32)のです。人間を脅かすことができるようなものでも、きたない動物の代表である豚に入って死ぬことになりました。イエス・キリストは、このような素晴らしい力を持っているのです。ですから、イエス・キリストと一緒にならだいじょうぶです。

## 〈お祈り〉

天の父なる神様、いつもイエス・キリストを信じて、永遠の命の恵みの中を生きていけるようにしてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



## 〈ねらい〉

悪霊にとりつかれた気の毒な二人の人は、あまりに私たちとかけ離れていて、現実には考えられないような話に思える。しかし、彼らは昔の物語の、私たちの知らない人ではなく、私たちも彼らと近いものであることを認めたい。ここまで狂暴で人々に嫌われ恐れられているというほどではなくとも、私たちは悪魔の誘惑に負けやすく、主に救われなければどうしようもない人間であることを子どもたちと共に学びたい。

## 〈ワーク〉

【Q1】 悪霊に取りつかれていた二人の人はどんな人たちでしたか？ (28節)

1. とっても乱暴で、人々に恐れられていた人
2. 近所の人から人気のあった人
3. 普通のおうちに暮らしていた人

【Q2】 この人たちの中に入っていた悪霊は、イエスさまによってどうなりましたか？ (32節)

1. もっと強くなって、いっそうこの人たちを苦しめた
2. この人たちから出て、豚の群れの中に入って湖の中に入って死んでしまった

【Q3】 悪霊にとりつかれた人たちを救ってくださったイエスさまのことを、町の人たちはどう思いましたか？ (34節)

1. すばらしい救い主だ！ イエスさまのお話をもっと聞きたい！
2. 多くの豚を死なせた不思議な力を持つこの人は恐ろしい、この町から出て行ってほしい。
3. 豚が死んでしまい、損をした。そんなことをした人は、この町から出て行ってほしい。

【Q4】 悪霊はどんな働きをするのですか？

1. 人間を神さまから引き離そうとする
2. 神さまとお友だちを大好きになれるようにする

【Q5】 その二人の人は、イエスさまに出会ってどうなったと思いますか？

1. 悪霊がいなくなったので、イエスさまによる本当の喜びを取り戻して幸せになった。
2. 悪霊がいなくなってつまらないなあと思って文句ばかり言って暮らした。

【Q6】 イエスさまがあなたの町にいらっしゃったらどんなふうになりたいですか？

1. イエスさまと仲良くなりたい！ お話をいっぱい聞きたい！
2. 悪霊を追い出すような恐ろしい人なので、関わりあいたくない。

## 〈お祈り〉

私たちをいつも愛してくださる神さま。あなたの尊いお名前を賛美します。私たちは、悪霊にとりつかれた人のように、神さまから背を向けて歩んでしまうことがあります。でも神さまはそんな私を見捨てず、不思議なみ業で私を救ってくださることを今日学びました。悪魔に心を許すことなく、神さまだけを見上げて信じていけますように強めてください。

## 〈答え (例)〉

【Q1】 1

【Q2】 2

【Q3】 2と3

【Q4】 1

【Q5】 1

【Q6】 1





## 〈ねらい〉

主イエスは、悪霊さえも支配し打ち滅ぼす権威と力を持たれている救い主メシアであることを覚える。

## 〈展開例〉

悪霊に取り付かれた人については、並行記事であるマルコ5章1節以下が詳しいので、そこを讀みながら、また、紙芝居などがあれば、それをを用いつつ、問答する。

## 1. 悪霊に取り付かれた人はどこに住んでいましたか？

→墓場。墓場は生きている人がいるところではありません。この人はもはや人として生きているとは言えないでしょう。

## 2. この人の様子は、普通でしたか？

→昼も夜も大声で叫んだり、石で自分を傷つけたりしていた。この人は非常に凶暴で、ほかの人を攻撃するばかりでなく自分自身をも痛めつけています。これは、本人の苦しさのあらわれであるとも言えます。

## 3. ほかの人たちはこの人をどう扱っていましたか？

→たびたび足かせや鎖で縛った。ほかの人たちはこの人を足かせや鎖で縛って押さえつけることしかできませんでした。しかし、悪霊の力は足かせや鎖で縛っておけるものではなく、もう手の施しようがない状態でした。

## 4. この人（悪霊）はイエス様を見たときにどうしましたか？

→イエス様の前でひれ伏して、自分を滅ぼさないように願った。

## 5. イエス様は悪霊にどう命じられましたか？

→この人から出て行けと命じた。悪霊たちは、近くの豚の群れに乗り移ることを願い、主イエスはそれを許されました。結果、豚の群れはなだれを打って湖に飛び込みおぼれました。このことに驚いた豚飼いたちによってこの事件が町に知らされました。

## 6. 悪霊が出て行ったこの人はどうなりましたか？

→正気になって、イエスのもとに静かに座っていた。イエス様によって悪霊を追い出されたこの人は、まともに生きていくことのできない死んだような状態から、普通の生活を送ることができる状態に救い出されました。彼はそのままイエス様に従ってついでいきたいと願ったのですが、イエス様は自分の家に帰って自分の身に何が起こったかを人々に伝えなさいと命じました。この人はこれに従いました。これはこの人が元々居るべきところに帰ったともいえます。

この人に取り付いていた悪霊は今も働いていて、その力は人の心に神様から離れようとする誘惑という形をとってあらわれたり、悪意や悪事という形で現れたりしています。私たち自身はこれに打ち勝つことはできないが、主イエスはすでにこの悪霊にも打ち勝っておられることを覚えて、イエス様から離れないようにしましょう。

## 〈祈り〉

天の父なる神様、私たちはイエス様から私たちが離そうとする力に打ち勝つことができませんが、イエス様がすでに打ち勝ってくださっていることを覚えて、イエス様から離れないようにお守りください。どうか今も働く悪しき力からお守りください。



**〈ねらい〉**

私たちの喜びはイエス・キリストと共に生きることにある。

**〈子どもカテキズム〉**

問1 私たちは何のために生きるのですか。

答 私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためです。

これが私たちの喜びです。

**〈展開例〉**

○悪霊の力とはどのようなものかを考えてみよう。

→人間を神さまから引き離し、人の命を滅ぼそうとする力。

○悪霊に取りつかれた人の悲しさ、恐ろしさに目を向けよう。

→「墓場に住んでいる」「非常に凶暴で誰も近寄れない」。彼らは人から離れて暮らさなければならぬ。神さまから引き離されるといことはそのような悲しい、みじめな姿となる。

○悪霊の働きは主イエスの時代の話だけではないことを考えてみよう。

→今の時代の悪霊の働きとして何が考えられるかを具体的に挙げてみる。

○主イエスが悪霊に取りつかれた人から悪霊を追い出すことができるのはなぜか考えてみよう。

→主イエスは、神の御子、メシアとしての力を持っている方。主イエスのメシアとしての働きは、神さまから離れている人を神さまのもとへ連れ戻すもの。

○主イエスによって悪霊を追い出してもらった人たちはその後どうなったか想像してみよう。

→神さまから引き離す力から解放されたということは、本当の命の喜びを取り戻し、イエス・キリストと共に生きる人生へと導かれる。

○子どもカテキズムを参考にしながら、私たちの喜びについて考えてみよう。

→私たちの命の喜びは、神さまと共に生きること、イエス・キリストと共に生きることにある。



**〈背景と文脈〉**

主イエスはガダラ人の地方で二人の悪霊につかれた者をいやされた(8:28-34)。その後、舟に乗ってガリラヤ地方に戻られた。主はカファルナウムを拠点としてガリラヤ伝道をなさったが、今日学ぶ箇所には、そこでの中風の人をいやしが記されている。単なるいやしの奇跡とは異なり、この物語では、主イエスが罪を赦す権威をもつお方であることが強調されている。

**〈中風の人への罪の赦しの宣言(9:1-2)〉**

主は「自分の町に帰って来られた」(1)。自分の町とはカファルナウムである。4章13節によると、主は宣教の拠点であるカファルナウムに住まわれた。中風の者が連れて来られた時、主は御言葉を語っておられた。その家には大勢の人が集まり、戸口の辺りまで、すきまもないほどだった(マルコ2:2)。ファリサイ派の人々と律法の教師たちも、そこに座っていた(ルカ5:17)。マタイは「人々が中風の人を床に寝かせたまま、イエスのところへ連れてきた」(2)とだけ記し、詳細は省いている。しかしマルコとルカは中風の人を運んできたのが四人の男であり、主イエスの前に置こうとしたが群衆に阻まれてできなかったため、屋根に上って瓦をはがし、主の前に病人を床ごとつり降ろしたと記している(マルコ2:4、ルカ5:18-19)。

主は彼らの信仰を見られて、中風の人に、「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」と言われた(2)。「彼らの信仰」とは、四人の男と中風の人を指すと思われる。彼らは、主が寝たきりの中風の者をいやす力をもっておられると信じ、屋根からつり降ろすという行動で信仰を表した。マタイは、主が罪を赦す権威をもっておられる方であることを強調するために、そのことを省略したと思われる。

「子よ」という呼びかけには親愛の情がこめられている。「あなたの罪は赦される」(2)という

表現から、彼の病が罪の結果だったと考える学者もいるが、必ずしもそのことは示唆されていない。神からの罪の赦しは、万人に例外なく必要である。罪が赦されることは、病気がいやされるより、もっと必要なことである。その意味で、主イエスは中風の人にもっとも必要な赦しを与えられた。主が地上に来られた目的は人の罪を赦すことだった(1:21, 20:28, 26:28)。

**〈罪を赦す権威の証明(9:3-8)〉**

その言葉を聞いた律法学者の中に、「この男は神を冒瀆している」(3)と思う者たちがいた。「神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか」(マルコ2:7)というのが、そう思った理由である。これは心の中でのつぶやきだったが、主は直ちに彼らの考えを見抜かれた。そして「『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて歩け』と言うのとどちらが易しいか」(4)と尋ねられた。言うだけなら、もちろん「あなたの罪は赦される」と言う方が易しい。罪が赦されたかどうかは見える形で証明できないからである。それに反して歩けなかった者に「起きて歩け」と言うのは、結果が見える形で現れてくるから、より難しいと言える。

「人の子」という呼び方は、主がご自分にあてて用いられた称号であり、ダニエル書7章13節に起源をもつ。「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい」(6)と言われたとき、その人は起き上がり、家に帰って行った(7)。四人の男に床ごと担がれて来た歩行不能の中風の人、自力で起き上がり歩いて帰った。目の前で起きた出来事に群衆は恐れを感じ、神を賛美した。主イエスは、中風の人をいやしをとおして、ご自分が病いを癒す権威だけでなく、罪を赦す権威をもっておられることを証明された。

病いのいやしの究極の目的は、人々が主を信じ、罪を赦され、永遠の命を受けることである。私たちもその恵みに招かれている。(後藤公子)

テキスト マタイによる福音書 9章1～8節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

### 〔単元のねらい〕

福音書における、主イエスによる病のいやしのみわざは、主の十字架の贖いによる罪の赦しの恵みと結びついている。罪の赦しこそが根本的な救いであり、わたしたち人間における最大の祝福である。病気のいやしはこの祝福を指さすしるしとしてなされたものであることを確かめたい。

## 「あなたの罪は赦される」

あるとき、イエスさまのもとに、中風という病気を病む人が連れて来られました。この病気にかかると、動くことができなくなります。この人も動くことができませんでした。一生歩くことも、起き上がることもできないことを覚悟しなければならなかったのです。何と悲しい、つらい病気でしょう。

けれども、この中風の人がイエスさまのみもとに来たのです。歩けなかった、動けなかった人がなぜイエスさまのところに来ることができたのでしょうか。

それは、連れて来てくれた人たちがあったからです。この人たちは中風の人を床に寝かせたまま、イエスさまのところまでかついで来たのです。この人たちは、イエスさまならこの人をいやしてくださいと信じたのです。もう一生寝たきりのままだと絶望していたこの人を立ち上がらせてくださると信じたのです。

イエスさまはこの人たちの信仰をごらんになって、お喜びになりました。イエスさまはご自分を信じる人々に、必ず恵みを注いでくださいます。必ず祈りを聞き届けてくださいます。イエスさまはこの中風の人をも、一瞬のうちにいやしてくださいだったので。床に縛りつけられていた人を起き上がらせ、自分の足で立って歩けるようにしてくださいだったので。この人はいやされた喜びに躍り上がり、床をかついで自分の家に帰っていきました。

ただ、イエスさまはこの人をいやされるとき、

あなたの病気は治るとおっしゃったのではありませんでした。そうではなく、あなたの罪は赦されるとおっしゃったのです。

この人だけではなく、イエスさまは数多くの病人をいやされました。目の見えない人の目を開き、耳の聞こえない人の耳を開き、身動きできない人をも歩きまわれるようになさいました。もちろん病気がいやされることそのものが、神さまの祝福です。病気のいやしによって、イエスさまは病気の苦しみや悲しみを取り除いてくださいました。それはいやされた人にとって、大きな喜びであったでしょう。

けれどもイエスさまはあなたの病気は治るとおっしゃったのではなく、あなたの罪は赦されるとおっしゃいました。それはなぜでしょうか。罪の赦しの恵みにあずかることこそ、わたしたち人間にとってもっとも大きな、根本的な恵みだからです。病気のいやしは、罪の赦しの恵みを示すしるしなのです。

わたしたち人間をお造りになったのは神さまです。人間に命を与えられたのは神さまです。ですから神さまとともに生きることこそ、人間の幸い입니다。神さまのみ手のうちに生きるときに、わたしたちはほんとうの命に生かされています。

では、罪とは何でしょうか。命の主である神さまから離れることです。神さまから離れるとき、人間は命を失うのです。どれほど体が健康で、元氣であったとしても、神さまに背き、そのふとこ

ろを離れるなら、人間はもはや本当の命を生きてはいないのです。死んでいるのと同じなのです。

ですから、罪が赦されることこそがもっとも大切なことなのです。罪が赦されるとは、人間がもう一度神さまのふところに帰って来るということです。そのとき、人間は本当の命に返らされるのです。神さまのもとでこそ、わたしたちは生きることの喜びと幸せを取り戻すことができるのです。

そのことが、病気のいやしということと深く結びついているのです。わたしたちの目は何のためにあるのでしょうか。神さまを見るためです。わたしたちの耳は何のためにあるのでしょうか。神さまのみ言葉を聞くためです。わたしたちの足は何のためにあるのでしょうか。神さまのもとに歩いていくためです。つまり、わたしたちの目は、耳は、足は、神さまを喜ぶためにこそ備えられているのです。

そして、わたしたちが罪を悔い改め、神さまと仲直りをして、もう一度神さまのもとに帰っていくとき、わたしたちの目も、耳も、足もいやされるのです。神さまが見えなかった目が見えるようにされるのです。み言葉を聞けなかった耳が聞けるようにされるのです。思い思いに自分勝手な道をさまよっていた足が、神さまの道を歩く足に変えられるのです。

人間の罪を赦すことができになるのは、ただ神さまだけです。神さまはひとり子のイエスさまを十字架につけ、わたしたちの罪の身代わりに死なせられることによってわたしたちの罪を贖い、赦してくださいました。わたしたちを神さまとともに生きるすこやかな人間に造りかえ、生まれ変わらせてくださいました。

あなたの罪は赦される—イエスさまはわたしたちにもこのように語りかけてくださるのです。これにまさる幸いはないのです。 (木下裕也)

---

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 9章6節 (前半)

人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。

---



## 〈ねらい〉

今日は、主イエスが、中風の人をいやされた出来事から、イエス・キリストの罪を赦す権威について学びたいと思います。

## 〈展開例〉

神様は、ぼくたち私たちに、心から愛してくださっています。愛してくださっているって、いったいどういうことだろう？……考えてもらう。

神様の愛、それは、イエス・キリストの十字架に表されています。イエス・キリストは、十字架で、ぼくたち私たちのために、ぼくたち私たちの罪を背負って死んでくださいました。しかし、三日目によみがえられて、天に昇られて、神の右に座して、救いを完成してくださいました。そのイエス・キリストを信じれば、ぼくたち私たちの罪、悪い心は赦されて、永遠の命を得ることができます。そして、ぼくたち、私たちは、神様の子どもとなるのです。これが神様が、ぼくたち私たちを愛してくださっているということなのです。ひとことで言えば、神の愛は、罪の赦しに表されているのです。

さて、イエス・キリストが、カファルナウムに帰られたときのことで、「すると、人々が中風の人を床に寝かせたまま、イエスのところへ連れて来た。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、『子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される』と言われた」(2)。

身体がしびれて動けなくなる病気をもった人が、お友だちにかつがれて、イエス・キリストの

もとにやって来しました。

『『この男は神を冒瀆している』と思う者がいた』(3)とあるように、神だけが罪を赦す権威を持っているので、イエス・キリストを信じない人々の中には、イエス・キリスト攻撃する者もいました。しかし、イエス・キリストは彼らの心の考えを見抜いて(4-5)、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」とおっしゃいました。「中風の人に、『起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい』と言われた。その人は起き上がり、家に帰って行った」(6-7)とある通りです。

聖書では、罪を赦す権威は真の神にだけ与えられています。人の罪を赦すことができるのは、真の神のみなのです。ですから、イエス・キリストが、この中風の男の人の病をいやし、その罪を赦されたということは、イエス・キリストこそが真の神だということを意味しています。

イエス・キリストだけが、私たちの罪を赦し、永遠の命を与えてくださるのです。なぜならば、イエス・キリストこそが真の神様だからなのです。ぼくたち私たちも、イエス・キリストを信じて、罪赦された毎日を過ごしていきましょう。

## 〈お祈り〉

天の父なる神様、イエス・キリストこそが真の神であり、罪を赦してくださいのお方です。イエス・キリストを信じて、永遠の命の恵みの中を生きていけるようにしてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



## 〈ねらい〉

罪が赦されることは、病気がいやされるより、もっと必要なこと。勉強ができるよりも、友だちと仲良くすることができるよりも、早く走ることができるよりも、ずっとずっと必要なことだということを教えられたい。

## 〈ワーク〉

【Q1】 中風という病気にかかると動くことができなくなり、一生歩くことも起き上がることもできなくなります。しかし、その人がなぜイエスさまのところに來ることができたのでしょうか？

1. 友だちが連れてきてくれたから
2. 少し病気が良くなって歩くことができたから

【Q2】 この人の友だちは、なぜイエスさまのところに彼を連れてきたのでしょうか？

1. イエスさまならこの人を治して下さると信じたから
2. 目立ちたかったから

【Q3】 イエスさまはこの人たちを見て、どう思われたのでしょうか？

1. 家の屋根に上って瓦をはがしてしまって、家の中はホコリだらけ、困った人たちだと思った
2. 無茶などと思われるようなことをしてまで、イエスさまを信じて行動したことを喜ばれた

【Q4】 イエスさまはこの人をいやされる時、何とおっしゃいましたか？

1. 子よ、元気を出しなさい。あなたの病は治る
2. 子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される

【Q5】 イエスさまがこの地上にこられた本当の目的は何ですか？

1. 貧乏な人を元気にし、病気の人を治すこと
2. 人の罪を赦すこと

## 〈お祈り〉

私たちをいつも愛してくださる神さま。あなたの尊いお名前を賛美します。イエスさまは中風の人とその友だちの信仰を誉めてくださいました。イエスさまなら必ずなんとかしてくださると信じる信仰を私たちにも与えてください。また、お友だちや家族のからだを心配したり助けたい気持ちをも与えてください。

## 〈答え (例)〉

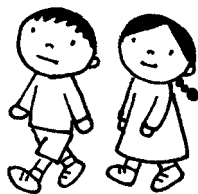
【Q1】 1

【Q2】 1

【Q3】 2

【Q4】 2

【Q5】 2



## 〈ねらい〉

イエス様のいやしのみ業は、私たちの罪を赦し、私たちを滅びから救うみ業につながる。イエス様は力のある救い主であることをおぼえよう。イエス様を信じて与えられる救いの素晴らしさを再確認しよう。

## 〈展開例〉

## 1. 中風という病気を知っていますか？

→中風とは、脳卒中などによって体にまひが残った状態のことを言います。具体的には、寝たきりや歩くことができなかつたり、言葉がしゃべれなくなつたりすることです。現代の医学をもってこれをいやすことはできません。

## 2. 中風の人の友人たちはなぜイエス様のところに彼を連れていこうとしたのですか？

→友人たちは、イエス様が次々と病人をいやされていることを見聞し、イエス様の教えも聞いていたことでしょう。そうして、この方ならば、必ず友の病をいやしてくださると確信したからです。

## 3. 友人たちはどのようにして彼をイエス様のところに運んだのですか？

→病人が寝たきりになっているベッドを四人で担いで運んできました。家の中にいたイエス様の周りには教えを聞くために大勢の人がいましたが、友人たちは家の屋根を剥がすことまでして、イエス様の前に運びました。

## 4. イエス様は中風の人に何と言われましたか？

→「元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」。病気がいやされることも大切ですが、罪を赦されることが一番大事なことです。

## 5. その言葉を聞いた律法学者はどう思いましたか？

→神を冒瀆していると思いました。イエス様が救い主であることを信じない者にとっては、そのように思えても不思議ではないでしょう。

## 6. イエス様は律法学者に話された後、中風のの人に何と言われましたか？

→「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい」。罪が赦されることは人の目には見えない事柄ですが、イエス様が罪を赦す力のある方であることを示すために言われたことです。

## 7. 中風の人はどうなりましたか？

→起き上がって、家に帰って行きました。誰の目にも明らかな結果ですが、イエス様はご自分が人を罪から救うために来られた救い主メシアであるということをこのように示されたのです。

## 〈祈り〉

天の父なる神様、救い主イエス様のいやしのみ業を学びましたが、イエス様は私たちの最大の病である罪から私たちを救うことのできるただ一人の方であることをおぼえ感謝します。神のひとり子が私たちのところに来てくださり、十字架のあがないを成し遂げてくださいましたことを感謝します。





## 〈ねらい〉

キリストによる罪の赦しこそが救いであることを知る。

## 〈子どもカテキズム〉

問24 主イエス・キリストは、私たちの救いのために、どのようなお働きをしてくださったのですか。

答 主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、三日目に、永遠のいのちによみがえられました。

ですから、私たちは、罪赦されて神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

## 〈展開例〉

○中風という病気を病む人の苦しみを想像してみよう。

→歩くことも起き上がることも出来ない人の苦しみ。また、当時の社会における病人の立場は非常に弱い。病気がその人の罪のせいだとも見られていた。

○なぜ律法学者の中に、「この男は神を冒瀆している」と思う者がいたのか考えてみよう。

→罪の赦しは、神さまだけができることである。当時の人々の理解として、勝手に罪の赦しを宣言することは、神さまの権威を侵すことになる。

○主イエスの「あなたの罪は赦される」という言

葉から病気のいやしと罪の赦しの関係を考えてみよう。

→罪の赦しこそが根本的な救いであり、最大の祝福である。主イエスによる病気の癒しはその祝福を指し示すしるしである。

○主イエスの問い「『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか」について一緒に考えてみよう。

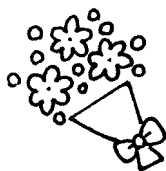
→結果として主イエスは、中風の人に対してどちらも言われた。主イエスは、罪を赦すことのできる方であり、病気も癒すことのできる方なのである。

○病気を癒された人の喜びについて考えてみよう。

→主イエスが「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい」と言うと、その人は起き上がり、家に帰って行った。自分の足で家に帰ることができる喜びだけでなく、罪赦された者としての喜びもそこにはある。

○中風の人の癒しの奇跡を見た人々の反応について考えよう。

→恐れを抱くことが、神さまを賛美することへとつながっている点に注意すべき。主イエスの御業は、真の神の御業として、それを体験する者を神さまへの賛美に導くのである。



受難週のクライマックスは、十字架につけられたキリスト御自身である。感動的な場面の多くある中で、福音書記者マタイの描くそれは、他と趣きを異にしている。主のみ苦しみが前面に引き出され、苦痛の極みにあるキリストが魂で受けておられる地獄が描かれている。そこに主のみ苦しみの深い意味と恵みを認めることが許される。

### 〈キリストの苦しみの深さ〉

マタイは主イエスの苦しみを真正面から示そうとする。それは主御自身の発せられたお言葉「エリ、エリ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか）」(46)に見いだせる。しかもこの叫び声は「大声であった」と注意深く述べられている。50節でもう一度「大声で叫ばれた」となっている。まさに主イエス・キリストの魂の底からの真実な叫びであったことは間違いない。時は午後三時近く、十字架の苦しみを味わい尽くし最後の力を振り絞っての祈りであった。主は神御自身からまったく見捨てられたのである。この主の叫び声は、私たちにとっても理解し難いように、すぐ近くで聞いていた人たちにとっても同様であった。彼らは、主の「エリ」という言葉を「エリヤ」と聞き違え、預言者エリヤの助けを呼んでいるものと受け取ったのである(47)。主はすでに人から見捨てられていた。群衆からは見放され、ユダヤの指導者たちにはもはや用のない者と烙印が押され、親しい弟子たちも主を見捨てて逃げ去って、孤立無援の中に置かれていた。そして最後の拠り所であった父なる神様からも捨てられたのである。これこそが本当の地獄の苦しみであり、その神のきよい怒りと呪いをこの時、主は最後の一滴までも飲み尽くそうとされた。だからもはや人々の差し出した苦痛をマヒさせるための葡萄酒を一滴も飲まれなかったのである(48)。

### 〈苦しみの意味〉

けれども、主御自身はそうした裁きに値するお方では決してなかった。同じく十字架につけられた悔い改めた強盗が「この方は何も悪いことをしていない」と証言している(ルカ23:41)。それは私たち罪人のための身代わりとしてのみ苦しみであり、死にはかならない。本当は、罪を犯し続けているこのわたし自身が発せなければならなかった叫びであり、味わわなければならなかった裁きなのである。私たちは人に捨てられることをまるで地獄のような苦しみ・悲しみと受け取るが、主イエスにとっては全幅の信頼を置いておられた神から見捨てられることの方が最大の苦しみ・悲しみだったのである。いまわの際までも主は、私たちのために執り成し続けてくださっていた。

### 〈苦しみの実り〉

主の苦しみの実りの第一は、神殿の垂れ幕がまっ二つに裂けたことである(51)。これは自然に生じたものではなく、神が成し給うた奇跡である。私たちと神とを隔てていた幕が切り落とされ、イエス・キリストによって神に近づくことが許された。第二は、死んだ聖徒がよみがえったことである(52)。私たちの最後の敵である死が打ち破られた証しである。第三に、主の十字架を見届けていた人に悔い改めの信仰の告白が与えられたことである(54)。信仰はキリストの救いの恵みによるものである。そして最後に婦人たちの弱い信仰を励まし支えたことである(55, 56)。キリストは神から見放されても決して神への信頼と愛を失うことがなかった。この主イエスの十字架上でのあの叫びは、何よりも神への信頼と愛とにあふれたものだった(詩編22編全体)。その主の愛と信頼とが私たちが罪の底から救い出された本当の理由・根拠である。それ故私たちは、ただ主イエス・キリストへの言い尽くしがたい感謝と賛美とをささげざるを得ない。(山下朋彦)

※第28号に掲載されたものを再掲載しました。

テキスト マタイによる福音書 27章45～56節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

### 〔単元のねらい〕

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」。主イエスの肉声（アラム語）が響き渡ります。神に捨てられる人間、死へと引き渡される罪人の絶望の叫びです。本来、私どもが叫ぶべき叫びです。釈迦やソクラテス、孔子など従容として死んでいった、優れた精神的指導者たちの死と比べて、あまりの違いに驚きます。主イエスだけがまことの死を知り、死なれたからです。私どもの身代わりとなられた故の、極みまでの苦しみを味わわれたからです。このお姿を間近で見た百人隊長たちが、「本当に、神の子だった」と告白します。私たちも、聖霊に導かれ、この十字架のイエスさまを真実に見るなら、同じように「イエスは神の子」との告白へ導かれるはずです。確かにドラマチックに十字架を語れば、誰でも心が震えるでしょう。しかし、信仰へと直結するとは限りません。聖霊の働きを祈り求め、信頼して、言葉をもって子らの心のキャンバスに十字架を描き出しましょう。

## 「神に見捨てられるイエスさま」

今、読んだ聖書の中に、日本語ではない言葉がありました。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」。これは、イエスさまの肉声を、そのまま、マタイさんが書き留めたのです。それは、イエスさまが、十字架の上から、大声で叫ばれたお言葉でした。それほど、お弟子さんたちの耳に残ったのだと思います。新約聖書は、ギリシア語で書かれていますが、この叫びだけは、どうしても、そのまま残すべきだと考えたからだと思います。その意味は、こうです。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」。

さて、みなさんは、このイエスさまの十字架の上での叫びをどのように聞きましたか。びっくりしたお友だちが少なくないと思います。

「本当にイエスさまが十字架でそんな叫びを叫ばれたのかなあ。ちょっと信じられない。ていうか、かなり、がっかりしてしまう……。だって、イエスさまは、神さまの御子であって、天のお父さまのことをずっと信じて来られたはずだから。そう思うお友だちもいるかもしれません。

あるいは、こう思ったお友だちもいるかもしれません。「これって、マジ？ イエスさまでも、やっ

ぱり最後には、『こんなはずじゃなかった、何で自分が十字架につけられてしまったのか』って、天のお父さま、神さまを恨んでしまったのかな？」。

「もしかすると、イエスさまは、まさか本当に死んでしまうことになるとは、考えていらっしやらなかったのかな」。

「いやあ、おかしい。だって、イエスさまは、何度も、十字架につけられることになるって、お弟子さんたちに予告されていたはずだよな。今、その通りになったのだから、そんなふうに思われるのも、おかしいよな」。

「うーん、イエスさまでも、本当に死んでしまうことになったとき、やっぱり、怖くなって、死にたくなって、『神さま助けて！』っていう思いで、叫んだのかな」。

「いや、待てよ、イエスさまはお弟子さんたちに、三日目に復活すると予告されていたはずだ。ってことは、イエスさまは、十字架の上でも、余裕だったはずだよな」。

「そうか、そう言えば、前に、先生から、これは、旧約聖書の詩編第22編の最初に歌われた御言葉だって教えてもらったっけ。それによれば、詩編

第22編って、最後には、神さまに感謝します。讚美しますっていうことが歌われているんだよね。なーんだ、だったら、これは反対に、イエスさまの勝利の叫びってことなのか」。

皆さんの心の中に、いろんな疑問、驚き、口では言い表せないような思いが湧いているかもしれません。でも、確かなことがあります。イエスさまが、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫んだという事実です。聞き間違いではありません。確かに、ある人たちは、「エリヤ、エリヤ、わたしを助けて！」と叫んでいるのだと、言った人がいたようです。けれども、著者のマタイさんは、キチンと「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と、念を押しています。

いったい、イエスさまは、十字架の上で、何をしておられるのでしょうか。それは、本当に、父なる神さまから、見捨てられているのです。見放されているのです。その事実を、イエスさまは、叫ばれたのです。

天のお父さま、神さまを信じて救われている人ってどんな人なのでしょう。それは、神さまと一つに結ばれ、神さまの子どもとして神さまの愛の中に抱かれているということです。どんなことがあっても、神さまから決して見放されることのない人、神さまがいつも一緒にいていただける人だということです。

ところが、今、イエスさまは、事実、神さまに見捨てられているのです。神に見捨てられる人。それ以上に恐ろしいことはありません。悲しいことはありません。「そんなんだったら、生まれて来なかったほうがまだ」と言っても言い過ぎではないと思います。本当に、ほんとうに恐ろしいことです。

でも、それならなぜ、神さまの御子でいらっしやるイエスさま、人間となられても何一つ神さまに

罪を犯したことがなく、完全に神さまの御言葉、律法を守り抜いたイエスさまが、天のお父さまから見放され、今、まさに死のうとしてしているのでしょうか。

それは、ぼくたち私たちの身代わりになられたからです。私たちは、汚い心をもって、悪いことを言ったりやったりして、神さまの前に罪を犯しています。つまり、ぼくたち私たちがこそ、このように叫んで死ななければならぬのです。

ところが、主イエスさまは、そんなぼくたち私たちの身代わりになって、父なる神さまの罪に対する怒り、罪への刑罰をお受けくださったのです。イエスさまは、本当に、苦しみ抜いてくださったのです。本当に、恐怖の中で、暗闇の中で、震えおのきつつ死なれたのです。

十字架につけたローマの兵隊たちは、イエスさまの十字架の上のお姿を真下から、間近で見ました。その人たちが、こう言ったのです。「本当に、この人は神の子だった」。

なぜでしょうか。それは、イエスさまが、最後の最後まで、恐ろしいまでに苦しめましたが、天のお父さまのことを恨んだり、憎んだり、信仰を捨てられなかったからです。殺してしまった兵隊たちさえ、認めずにおれなくなってしまったのです。イエスさまは、敵が見ても、十字架の上で、天のお父さまへの信仰を貫かれたということです。すべてをおゆだねになられたのです。その意味で、あの叫びは勝利の叫びでもあります。

ぼくたち私たちは、神の御子のイエスさまの、この苦しみのおかげで、神さまの子どもとされたことを、決して忘れることはできません。イエスさまを信じているぼくたち私たちは、もう、決して、神さまに見捨てられることはなくなったのです。ぼくたち私たちは、イエスさまのおかげで神さまの子どもとされているのです。心から、神さまに感謝しましょう。

(相馬伸郎)

---

[今週の暗唱聖句]      マタイによる福音書 27章54節 (後半)  
本当に、この人は神の子だった。

---

## 〈ねらい〉

今日は、イエス・キリストの受難のクライマックスである十字架の救いについて、学びたいと思います。

## 〈展開例〉

みんなお友だちから仲間外れにされたような、悲しい経験はありますか？……聞いてみる。

イエス・キリストは、お友だちどころではない、父なる神様に捨てられたお方です。

「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』。これは、『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか』という意味である」(46)。

イエス・キリストは、十字架の上で、神様に見捨てられてしまいました。神様の目から見たら、十字架上のイエス・キリストは、嘘をついた人でした。それは、嘘をついた人の罪を負ったからでした。盗人でした。それは、盗人の罪を背負ったからでした。人をねたむひとでした。それは、人をねたんだ人の罪を背負ったからでした。裏切り者でした。それは、人裏切った人の罪を負ったからでした。神様の目から見たら、十字架上のイエス・キリストは、ありとあらゆる罪を背負った人でした。それは、世界のありとあらゆる罪人の罪を背負ったからでした。こうして、イエス・キリストは、完全な罪人として、神様から見捨てられてしまいました。見捨てられる、しかも神様に見捨てられる、忘れ去られる、これほどさみしいことがあるでしょうか。しかし、イエス・キリストは、神に見捨てられたのです。

なぜなら、それは、あなたが見捨てられないためなのです。あなたが神様から見捨てられないために、イエス・キリストは十字架に於いて、神から見捨てられて、ぼくたち私たちを救ってくださったのです。そして、息を引き取られました(50)。

「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起り、岩が裂け、墓が開いて、眠りについてた多くの聖なる者たちの体が生き返った」(51-52)。

「神殿の垂れ幕」とは、一年に一度、大祭司が生贄を献げるために、通る幕でした。それが裂けたということは、人間がいつでも神様と交わることができるようになったということです。神様にお祈りするために、ぼくたち私たちは、わざわざ教会に行く必要はありません。ご飯を食べていても、遊んでいても、お風呂に入っても、いつでも、どこでも、お祈りを通して神様と交わることができるようになったのです。イエス・キリストは、十字架で、ぼくたち、私たちの罪を赦してくださいただけではなくて、いつでも、どこでも、神様と交わることができる道を開いてくださったのです。十字架で罪赦されたことに感謝して、いつも神様と交わって歩んでいきたいと思えます。

## 〈お祈り〉

天の父なる神様、十字架の罪の赦しを感謝します。いつも神様と交わることができるように導いてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



## 〈ねらい〉

十字架上で主イエスは、父なる神に見捨てられた。本当は、私たちが神から見捨てられなければならないところで、主イエスが代わりに罪の刑罰を負ってくださった。それにより私たちは、神の子どもとされた。このことをしっかりと覚えて、神に感謝をしていく。

## 〈ワーク〉

空白を埋めましょう。

【Q1】 イエスさまは、十字架のうえで、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言われた。これは、「わが神、わが神、なぜわたしを（ ）になったのですか」という意味です。

【Q2】 イエスさまは、何一つ（ ）に（ ）を犯したことがなく、かんぜんに（ ）の（ ）、（ ）を守りました。

【Q3】 本当は、（ ）が（ ）に（ ）られ、（ ）なければいけないのを、イエスさまが（ ）となって、（ ）にかかってくださいました。

【Q4】 そのイエスさまの十字架の（ ）によって、わたしたちは（ ）て、もう決して（ ）ことがなく、神さまの（ ）になりました。

【Q5】 わたしたちは（ ）に心から（ ）しましょう。

## 〈お祈り〉

神さま。主イエスさまが、わたしたちの救い主として私たちの身代わりとなって十字架にかかってくださり、神さまに見捨てられ、苦しみ抜いてくださいました。それにより私たちは、神さまの子どもとなりました。心から感謝します。

## 〈答え〉

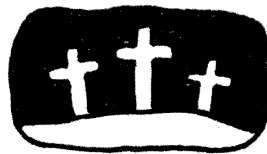
【Q1】 お見捨て

【Q2】 神さま、罪、神さま、御言葉、律法

【Q3】 私たち、神さま、見捨て、苦しま、身代わり、十字架

【Q4】 苦しみ、救われ、見捨てられる、子ども

【Q5】 イエスさま、感謝



## 〈ねらい〉

わたしたちの罪のために、神様から見捨てられ、十字架の上で死なれた。わたしたちの罪からの救い主イエス様に感謝しよう。

## 〈展開例〉

マタイ27章45-56節をたどりながら、十字架のキリストを仰ぎたい。

1. イエス様は、昼の三時ごろ大声で叫ばれました。

何と叫ばれましたか？

→「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」。

2. それは、どういう意味だったでしょうか？

→「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか」。この叫びは、本来なら、私たちが上げるべきものでした。

3. それを聞いた人々は、どういう反応をしたでしょうか。それは、正しかったですか？

→エリヤを呼んでいると言う者、酸いぶどう酒を飲ませようとした者、エリヤを呼んでいるから待ってみようと言う者など、すべてが、的外れなものであった。

4. イエス様が再び大声で叫ばれて、息を引き取られた時、どういうことが起こりましたか。それにはどういう意味がありますか？

→神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。それは、イエス様によって神様に近づけるようになったということ。地震が起こり、岩が裂け、墓で眠りについていた聖なる者たちの体が生き返った。それは、死が打ち破られたということ。

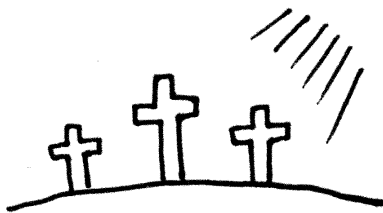
5. 百人隊長やいっしょにイエス様の見張りをしていた人たちは、いろんな出来事を見て何と言いましたか。

→「本当にこの人は神の子だった」

6. イエス様の十字架の死が、わたしたちとしっかりと結びついていることを伝えたい。

## 〈祈り〉

天の父なる神様。イエス様の十字架がわたしたちを罪から救い出すために備えられたことを、しっかりと覚えさせて下さいますように、お願いいたします。



## 〈ねらい〉

キリストの十字架の苦しみを知り、それが私たちの救いのためであることを知る。

## 〈子どもカテキズム〉

問24 主イエス・キリストは、私たちの救いのために、どのようなお働きをしてくださったのですか。

答 主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、三日目に、永遠のいのちによみがえられました。

ですから、私たちは、罪赦されて神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

## 〈展開例〉

○主イエスが叫ばれた言葉「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」の意味を考えよう。

→「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉は、旧約聖書の詩編22編2節の御言葉であることを確認する。

→主イエスはこれを大声で叫ばれた。十字架の肉体的な苦しみの中での叫びであるが、それは魂の叫びである。主イエスの十字架の苦しみは肉体的なものだけではなく、私たちの代わりに神の呪いを受ける魂の苦しみであった。

○主イエスの叫びを聞いた人々の反応について考えてみよう。

→イエスを十字架につけた人々、それを見ていた人々には、その叫びの意味がわからなかった。主イエスの叫びは、主イエスの十字架の意味と同様に、信仰を通してしか理解できない。主イエスの十字架が私たちの救いのためであると信じることによってこそ、その叫びも理解することができる。

○主イエスが十字架の上で息を引き取られたとき、何が起きたか確認し、その意味を考えよう。

→「神殿の垂れ幕が裂けた」のは、私たちと神さまを隔てていたものが取り去られ、キリストによって神さまに近づくことが許されたしるしである。

→「墓が開き、聖なる者たちの体が生き返った」のは、私たちの最後の敵である死が打ち破られた証しである。

→イエスの十字架を見届けた人々が「本当に、この人は神の子だった」と言ったのは、イエスの十字架上の死に伴う様々な出来事が神の奇跡であることを知ったからである。





**〈背景と文脈〉**

主イエスの復活は十字架の死とともに、聖書のもっとも中心的な使信である。復活は、主イエスの贖いのみわざが父なる神に完全なものとして受け入れられ、完成したことを示す。パウロが「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、罪のなかにあることとなります」（コリント一15:17）と言っているゆえんである。

マタイ福音書は他の福音書と同様に、主イエスがいつ、またどのように復活されたかについては記していない。墓が空であったこと、よみがえられた主が数人の女たちに顕現されたことを通して復活の事実を証している。

マタイは特に、祭司長たちとファリサイ派の人々がピラトに願いでて番兵たちに墓を守らせたこと（27:62-66）を記している。彼らは、主イエスの死体が弟子たちによって盗みだされないように、とできる限りの対策をとった。

**〈天使の顕現と使信（28:1-7）〉**

「週の初めの日の明け方」に「マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行つた」（1）。ちなみに並行記事（マルコ16:1、ルカ24:1）を見ると、彼女たちの目的は主の御体に香料を塗るためであったことがわかる。もう一人のマリアはヤコブとヨセフの母マリアであり（27:56）、ヨハナ（ルカ24:10）、そのほか名を記されていない他の婦人たち（ルカ24:10）も一緒だったことがわかる。福音書の記事の間に矛盾があるのではなく、誰に焦点をあてているかによって異なっている。ちなみに、ヨハネ福音書はマグダラのマリアの名だけを記している。

2節の「すると」と訳されている語は「見よ!」という意味であり、読者の注意を喚起している。大きな地震が起こり、天使が天から降って来て、墓の入り口にあった大きな石（27:60, 66）を転がした。これは、婦人たちが墓の中に入り、空に

なっているのを確認するためであった。「座った」（2）は直訳すれば「座っていた」（原語では未完了過去が使われている）という意であり、これは婦人たちが墓に到着する前に起こった出来事と考えるのが自然である。

天使の顕現に接し、番兵たちは恐怖のあまり全身が麻痺し動けなくなった。彼らはピラトの命によって、主の遺体が弟子たちによって盗みだされないために番をしていた（27:65）。人間的な安全対策（封印された大きな石、番兵たち）は、神の御力の前には何の意味もなかった。

天使は婦人たちに、主イエスの復活とガリラヤで主に会えることを弟子たちに伝えるよう命じた。墓に行った彼女たちの目的は主の御体に香料を塗るためであったことから、主の復活をまったく予測していなかったことがわかる。婦人たちにとって復活のニュースはまさに喜びの訪れ（福音）であった。彼女たちは、恐れながらも大いに喜び、その使信を弟子たちに少しでも早く告げようと走って行った。

**〈復活の主の顕現（28:8-10）〉**

9節の「すると」も「見よ!」という意味である。まだ墓から遠くない所で、主イエスは婦人たちにご自身を現わされた。「おはよう」（9）は直訳では「喜びなさい」という挨拶の言葉である。婦人たちは主の前にひれ伏し礼拝した。主は弟子たちへの伝言を婦人たちに託された（10）。主はその伝言のなかで「わたしの兄弟たち」と弟子たちを指して言われている。主が十字架にかかられたとき、ヨハネ以外の弟子は逃げた。しかしそうした彼らを赦され、弟子たちを「わたしの兄弟たち」と呼ばれたのである。マタイは、主が約束通りガリラヤで弟子たちにご自身を現わされ、そのような弱い弟子たちに、出て行ってすべての民をわたしの弟子にしなさいという大宣教命令を与えられたことを記している（28:16-20）。（後藤公子）※第37号に掲載されたものを再掲載しました。

テキスト マタイによる福音書 28章1～10節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

### 〔単元のねらい〕

復活祭、おめでとうございます。十字架において父なる神に見捨てられたお方は、また、死者からよみがえられたお方です。こうして、十字架において示された神の愛は、罪と死の力に完全に勝利されたことが示されました。この勝利の光の中で、十字架も受難も、ご生涯もすべては光り輝くものとなりました。そればかりか、キリストを信じる私どもの生涯のすべてもまた、光り輝くものとされます。躓き倒れやすい私どもの毎日の生活も、主イエスの勝利のおかげで、支えられ、主の栄光をあらわすものとされます。今朝、復活された主イエス・キリストが聖霊によって礼拝式のただ中に臨臨くださり、神の民に、復活の勝利、その希望、永遠のいのちを鮮やかに示してくださることを証しましょう。

## 「神によみがえらされるイエスさま」

復活祭（イースター）、おめでとうございます。私たちは、毎週、日曜日の朝、ここで礼拝をささげています。毎週、お祝いをしているわけです。お祭りと言い換えてもよいです。ただし、お祭りというと、神社などで「何々祭り」とかしていますね。ですから、「礼拝がお祭りだなんて、違うんじゃないの」と思うお友だちもいるかもしれません。

いいえ、教会こそ、毎週日曜日、本当のお祭りをしています。厳かなお祭りです。しかも、喜びといのちに満ちあふれたお祭りです。何のお祭りでしょうか。それは、イエス・キリストの復活のお祝いです。

今朝は、わたしたちが、どうして礼拝するようになったのか、お祭りする理由、なぜ、毎週日曜日にするのか、その源にさかのぼっていっしょに学び、そして、神さまを礼拝しましょう。

今から2000年ほど前、イエスさまは、金曜日の午後に十字架につけられました。しかし、天のお父さまは、その三日目の朝、つまり日曜日の早朝、十字架の上で死なれ、お墓の中に葬られたイエスさまをよみがえらせてくださったのです。これが、ぼくたち私たちが、日曜日に礼拝をささげる理由となったのです。

さて、イエスさまのご復活を最初に知らされたのは、マグダラのマリアともうひとりのマリア、つまり女性のお弟子さんたちでした。二人は、イエスさまのご遺体を丁寧に葬りに行こうと、お墓に駆けつけます。すると、突然、大地が揺れました。そのとき、主の天使が天から降って来ました。洞穴のようなお墓には、大きな石が扉のようにして置かれていました。天使はその石をゴロゴロと転がしてしまっ、その上にチョコンと座りました。

墓の両脇には、イエスさまのご遺体を弟子たちが盗みに来るかもしれないと、槍を持った番兵たちが警護していました。ところが、天使たちがあまりにまばゆかったので、まるで死人のように動けなくなってしまいました。

婦人たちは、このすばらしい光景を目の当たりにして、何よりもすばらしい情報を知らされます。「あの方は、ここにはおられない。かねて言われた通り、復活なさったのだ」。

婦人たちは、墓の中に入って、見てみます。すると、本当にイエスさまのご遺体はどこにもありません。

イエスさまのご復活は、その瞬間を見た人は誰もひとりいません。どのようにご復活なさったのか、

誰も知りません。本当に神秘的なのです。それは、イエスさまが、お母さんのマリアさんのおなかの中に身ごもった瞬間にも似ています。誰も見ていないのです。まさに、神さまのわたしたちに対する愛の御業です。ですから、誰にとっても、復活の出来事は、イエスさまが十字架の前に語られたお言葉を信じる以外にありません。信仰がない人は、復活されたお姿を見ても信じません。もっと言えば、信仰がない人には、イエスさまの復活のお姿そのものも見えなかったのかもしれませんが。あの番兵たちが、天使の輝きの前に死人のようになってしまったように、かえって死人のようになってしまうかもしれません。ただし、事実、復活されたイエスさまを大勢の人たちが見ました。弟子たちは、復活されたイエスさまとただ見たということではなく、深く出会いました。

さて、復活のイエスさまに最初に出会ったのは、この女性たちでした。イエスさまは、最初に「おはようございます」と挨拶されました。彼女たちは、イエスさまの足元で、イエスさまの足を抱きます。お体を触ったわけです。本当に、体が復活されたということです。そして、ひれ伏して礼拝します。

イエスさまが「おはよう」とおっしゃったのは、「喜びなさい」「おめでとう」という意味があります。イエスさまのご復活は、ご自分のためであるよりは、わたしたちのためだったのです。つまり、イエスさまはおっしゃっておられます。「わたしはよみがえりました。だから、わたしを信じているあなたがたは、もう、罪の裁きの死、永遠の死によって滅ぼされることはありませんよ。あなたは、わたしと一っしょに永遠に生きることができまよ。確かにあなたたちの肉体の生命は、死を経験します。でも、それは、終わりではありません。あなたたちは、わたしによって、体の死というトンネルを越えて出ていけば、わたしと共に生

きる天国へと行けるのですよ。あなたたちは、死に打ち勝つ勝利者になったんですよ。

イエスさまのご復活こそ、ぼくたち私たちの教会の新しい出発の原点となりました。キリストの復活がなければ、ここに、この教会はありえませんでした。世界中に教会は存在しないはずですよ。イエスさまのご復活こそ、私たちの信仰の土台なのです。ですから、世界中の教会でもっとも大切にお祝いされているのです。

もし、イエスさまが復活されなかったら、ぼくたち私たちがどんなに心を込めて礼拝をしても、どんなに大勢の人たちが集まって礼拝しても、ほとんど意味がありません。空しいのです。もしも、礼拝式に、復活されて今も生きていらっしゃるイエスさまが共にいてくださらなければ、礼拝をささげることは、ほとんど無駄って言うてもよいかもしれません。

逆に、もしも、イエスさまが復活されたのに、ここで、礼拝をささげることをしない人、その恵みを知らない人がいれば、人間にとって、これ以上、悲しいこと、残念なこと、もったいないことはありません。

なぜなら、人間にとって一番大切なことは、まことの神さま、生きていらっしゃる神さまを礼拝し、そのいのちを豊かに受けることだからです。それがなければ、人間は幸福になれません。生きる意味と目的がわからないからです。

わたしたちもこの目をどんなに開いてみても、眼鏡をかけてみても、望遠鏡や顕微鏡を使ってみてもイエスさまを見ることはできません。しかし、ぼくたち私たちが、今、イエスさまが、ここに共にいて、わたしを愛してくださっていると信じています。つまり、今朝、ここにも繰り返し、新しく奇跡が起こっているのです。 (相馬伸郎)

---

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 28章5節(後半)～6節

恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、  
あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。

さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。

---

## 〈ねらい〉

今日は、イエス・キリストの復活による永遠の命の祝福について、学びたいと思います。

## 〈展開例〉

ぼくたち私たちの人生は、たった一回しかありません。一年365日として、80年生きたとしても、29,200日しか人生はないのです。でも、聖書は、ぼくたち私たちの人生は80年で終わってしまうのではなくて、永遠に続いていくと言っています。ぼくたち私たちは、天国で神様をほめたたえながら、永遠に生きていくことができます。永遠というとは何か長い時間のように感じる人がいると思います。でもそうではありません。永遠とは、神様との交わりを表しているのです。ぼくたち私たちは、神様とまじわりながら、天国で生きていくことができます。それが永遠の命です。

では、ぼくたち私たちは、なぜ、永遠に生きることができるのでしょうか。それは、イエス・キリストが死に打ち勝たれて、およみがえりになられたからなのです。

「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである」(1-2)。

イエス・キリストは金曜日に十字架にかかられて死なれました。そして、土曜日の安息日を越えて、三日目の日曜日によみがえられたのです。世界の歴史の中で、初めて死が打ち破られたのです。

日本の大学生の五人の内三人は、死とは無になることだ、死んだら何もなくなってしまうと考えているそうです。セネカという哲学者は、「死よ、

お前のおかげで私は死ぬまで不幸になってしまった」と言いました。死の問題が解決されない限り、どんなに楽しく生きたとしても、とてもむなしなものではないというのです。船のデッキの柵にもたれかかっていた人がため息をつきながら言ったそうです。「死とぼくの間には、たった15cmの距離しかない」。こう言ったそうです。

ぼくたち私たちは、死がある限り、結局何をしても絶望だと思ふのです。でも、そうではありません。イエス・キリストが死からよみがえってくださったのです!!

「天使は婦人たちに言った。『恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい』」(5-6)。

確かに、イエス・キリストは、この歴史の中で死に打ち勝たれて、よみがえられたのです!!

ぼくたち私たちも、この素晴らしい喜びと知らせをお友だちに伝えましょう!! ぼくたち、私たちに、復活されたイエス・キリストが与えてくださった永遠の命があるのです!!(8)。

ぼくたち私たちにとって、死は決して怖いものではありません。復活されたイエス・キリストがいつも共にいてくださるのです。

## 〈お祈り〉

天の父なる神様、イエス・キリストが十字架で死なれただけではなく、三日目によみがえられたことを感謝します。永遠の命の恵みの中をこれからも生きることができるようになってください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



**〈ねらい〉**

十字架上で死なれた主イエスは、三日目によみがえられました。この復活によって、主イエスが神の御子であり、私たちの救いが完成したこと、今も主イエスは生きておられること、私たちも主イエスのように復活することが出来ることなどが確かなものとなりました。このことを子どもたちに伝え、子どもたち一人一人が主イエスを自分の救い主として信じて、神に感謝をしていく。そして、主イエスによる復活の勝利、希望の中に歩むようにしていく。

**〈ワーク〉**

空白を埋めましょう。

【Q1】 マリアさんたちがイエスさまのお墓に行くくと、お墓の（ ）が横にころがって、（ ）がその上に座っていました。

【Q2】 天使はマリアさんたちに、「あの方は、ここには（ ）。前から言われていたとおり、（ ）なされたのだ」と言いました。

【Q3】 お墓の中にはイエスさまは（ ）でした。その後、マリアさんたちのところに主イエスさまが来られ、「（ ）と声

をかけられました。マリアさんたちはイエスさまに（ ）しました。

【Q4】 日曜日の礼拝はイエスさまの（ ）を（ ）しているのです。

【Q5】 復活されたイエスさまによって、わたしたちに（ ）の命が与えられます。今も（ ）イエスさまが、いつも一緒にいて、わたしたちを（ ）くださっています。

**〈お祈り〉**

神さま。主イエスさまが、十字架の死からよみがえられ、何時も私たちと共に居てくださり、救いの命の中に入れてくださり心から感謝します。復活のイエスさまが何時も私たちと共にいてくださるようにお祈りします。

**〈答え(例)〉**

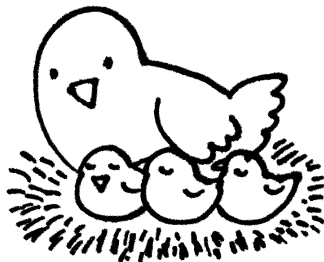
【Q1】 石、天使

【Q2】 おられない、復活

【Q3】 おられません、おはよう、ひれ伏し

【Q4】 復活、お祝い

【Q5】 永遠、生きておられる、愛して



**〈ねらい〉**

イエス・キリストが、十字架・死・復活を通して、罪と死の力に完全に勝利されたことを覚え、復活の主イエスを喜ぼう。

**〈展開例〉**

1. 墓に行った婦人たちが、イエスの足を抱き、その前にひれ伏しました。  
→復活の瞬間を見た人はいませんが、復活されたイエス様にはたくさんの方がお会いしています。  
→イエスさまは、私たちのためによみがえられました。
2. 週の初めの日に復活されたイエス様を覚えて、日曜日（主の日）に礼拝を行うようになりました。

→礼拝は、復活され、今も生きておられるイエス様にお会いしお祝いすることなのです。

3. まことの神であり、神の御子である主イエス・キリストの罪からの救いを心から信じる私たちには、罪と悪の力からの自由と、永遠の命が与えられています。

→復活のイエス様が共にいてくださる喜び、永遠の命の希望と喜び、感謝について話し合ってみましょう。

**〈祈り〉**

主イエス・キリストの父なる神様、私たちのために、イエスさまが十字架にかかって死んでくださり、三日目によみがえってくださったことを感謝します。イエスさまにお会いできる礼拝に喜んで出席することが出来るようにお守りください。



## 〈ねらい〉

キリストの復活のみ業が私たちにもたらすものは何かを知る。

## 〈子どもカテキズム〉

問24 主イエス・キリストは、私たちの救いのために、どのようなお働きをしてくださったのですか。

答 主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、三日目に、永遠のいのちによみがえられました。

ですから、私たちは、罪赦されて神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

## 〈展開例〉

○主イエスの三日目の復活が、いつの時であったかを確認しよう。

→主イエスの復活の出来事は、「安息日が終わって、週の初めの日」であった。教会が日曜日に礼拝するのは、キリストの復活の出来事に基づいている。

○「マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った」のは、どうしてか。マルコ16章1節、ルカ24章1節から確認しよう。

→彼女たちの目的はイエスの遺体に香料を塗るため、丁寧な葬りのためであった。

○墓にいた主の天使が婦人たちに語ったことはどういうことか考えてみよう。

→「イエスはここにはおられない」、婦人たちの目的であったイエスの遺体はなくなっている。

→「かねて言われていたとおり、復活なされた」、主イエスの復活は、主イエスご自身があらかじめ言われていたことの実現であった。

→「弟子たちはガリラヤで主イエスに会う」、復活された主イエスは、弟子たちにご自身を示されるのである。

○復活の主イエスに最初に出会ったのは、婦人たちだった。婦人たちの反応と主イエスが彼女たちに命じられたことを確認しよう。

→「婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した」。婦人たちは復活された主イエスの体に触れ、またひれ伏して礼拝した。

→主イエスは彼女たちに弟子たちへの伝言を託された。それは、先の天使の告げ知らせと同様にガリラヤで弟子たちに会われるというものだった。

○子どもカテキズム問24からキリストの復活の意味について考えてみよう。

→キリストの十字架の死と復活によって、私たちは、罪赦されて神と共に永遠に生きる祝福に生かされているのである。



**(1) 士師記**

士師記には、ヨシュアの死からサムエルの登場までの約300年間に、12人の士師が主によって立てられたことが記されている。この時代、イスラエルにはまだ王が立てられておらず、社会的・宗教的にも乱れていた。士師はこうしたイスラエルに与えられた政治的・軍事的指導者であった(2:11-23)。

ギデオンは、士師の中でもサムソンらと共にもっとも重要な士師として覚えられている(ヘブライ11:32)。

**(2) イスラエルの罪と主の裁き (1-6)**

イスラエルの人々は、主の目に悪とされることを行ったため、主が七年間、彼らをミディアン人に渡され、主の裁きに置かれる。

**(3) 預言者の言葉 (7-10)**

預言者が士師記に登場するのは、4章4節とここだけである。主がギデオンの召命にあたり、イスラエルの罪を指摘するために預言者の言葉を書き記したことは、イスラエルの罪の大きさを示すものであり、同時にギデオンが主の御業を行うことがいかに重要なことであったことを語っているといってもよい。

**(4) ギデオンの召命① (11-24)**

主は御使いをギデオンにつかわし、ギデオンに士師としての召命を与えられる。この時、ギデオンは「わたしの一族はマナセの中でももっとも貧弱なものです。それにわたしは家族の中でいちばん年下の者です」(15)と語り、自らが主に用いられる器であることに疑問を呈する。しかし、主の召しは、彼の能力を認められたからではなく、主が共に働かれるゆえであることを、主はギデオ

ンに語られ(16)、士師の働きが主の御業であることを明らかにされる。

主による召命に対して、ギデオンは繰り返し主に確認し、しるしを求める(17, 36, 39)。主からの召しは、一度限りで感情的なものに留まることなく、繰り返し与えられる。このことにより、主からの召しをギデオンが受け入れ、召命がより深められていく。

最初、ギデオンは供え物を主の御前にささげる(19-20)。主はギデオンがささげた肉とパンを焼き尽くすことにより、ここに確かに主の御業が働いていることをお示しくくださった(21)。

**(5) 士師としてのギデオンの働きの始め (25-35)**

主が士師として召し出したギデオンに対して最初に命じた働きは、バアルの祭壇を壊し、アシェラ像を切り倒し(25)、主のために祭壇を築き、献げ物をささげることであった(26)。主の告げられたことをギデオンが実行することにより、バアルに仕える人々との信仰の戦いが始まる。主は、彼の父ヨアシュを理解者として立て(31)、さらにはアビエゼル(34)、マナセ、アシェル、ゼブルン、ナフタリからも人々が合流し、ギデオンに協力する(35)。この時、彼には、ひとりで戦うのではなく、主が共におられ、主が遣わしてくださった民と共に戦うことが示される。

**(6) ギデオンの召命② (36-40)**

しかし、ギデオンの心はなお揺さぶられ、主に召しの確認を求める(36, 38)。主はギデオンのいずれの問いかけに対しても誠実に応えてくださり、主がギデオンを士師としてお立てくださったことをその都度お示しくくださり、彼の召命を固くしてくださいました。(辻 幸宏)



テキスト 士師記 6章  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28, 29  
ウェストミンスター信仰告白 第10章  
ウェストミンスター小教理問答 問31, 32

### (単元のねらい)

今回から旧約の救済史に戻る。そのため、主の恵みによりイスラエルの民が出エジプトから約束の地カナンに入ったことを簡単に説明してから、士師の時代に立てられたギデオンのことを取り上げることが相応しいと思われる。

また、ギデオンに関しては、今回と次回の二回に渡って取り上げる。今回は、ギデオンが主によって士師として召命を受けた場面のみを考える。召命に関しては、私たち教師は教師（牧師）として、また子供たちはキリスト者としての召しを受け、その職務や信仰に導かれていくが、繰り返し問われるのが、私たちの職務や信仰への確信である。私たちは、繰り返し心が揺さぶられ、職務や信仰を主に確かめ、主はそのたびごとにお答えくださることにより、私たちの職務への確信、信仰の確認は強められていく。このことを、ギデオンをとおして確認していただきたい。

## 「神さまは繰り返しお答えくださる」

しばらく新約聖書のイエスさまについての学びを続けてきましたが、今日から再び旧約聖書の学びとなります。エジプトで奴隷の民となっていたイスラエルに対して、主なる神さまは誰をお立てくださいましたか？ そうです。神さまはモーセさんをイスラエルの指導者としてお立てくださいました。そしてイスラエルの民を解放しないエジプトの王ファラオに対して、主なる神さまはモーセによって九つの奇跡を行わせ、最後に初子の死をとおして、ファラオはようやくイスラエルの民を解放し、彼らは約束の地カナンに旅立つことができました。その後、モーセがシナイ山において十戒を主から授かり、40年にわたって荒れ野を彷徨いますが、モーセの次に指導者として立てられたヨシュアによって、イスラエルは約束の地に入ることができたのです。

さて、今日から学びます士師記の時代は、イスラエルが約束の地カナンに入り定住した、ヨシュアの次の時代になります。指導者を失ったイスラエルは、罪を行い、バアルやアシェラの偶像を拜

んだりしていました。その結果、主なる神さまは、イスラエルの民を他国に支配されたり、苦しみをお与えになることにより、イスラエルの民に罪の裁きを行われます。

ギデオンの時代も、イスラエルの人々は、罪を繰り返し、その結果としてミディアン人に支配されていたのです。そうした中、イスラエルの民の多くも、ミディアン人がもたらしたバアル像とアシェラ像を拜んでいたのです。

そのような中、イスラエル人の助けを求める祈りは主なる神さまに聞き入れられ、主は御使いをヨアシュの子であるギデオンの所につかわされました。主はギデオンを士師として立てて、イスラエルを救おうとされたのです。主の御使いはギデオンに「勇者よ、主はあなたと共におられます」(12)と語ると、ギデオンは「出エジプトを行ってくださった主なる神さまはどこにおられるのか？ 私たちは見放されてしまったのか？」と切々と訴えます(13)。しかし、主はギデオンに語ります。「あなたのその力をもって行くがよい。あなたはイスラエルを、ミディアン人の手から救

い出すことができる。わたしがあなたを遣わすのではないか」(14)。

ギデオンさんは驚きます。主なる神さまに対して助けてくださるよう祈ってはいたものの、主なる神さまは、あなたがそれをするのだと語られたのです。自分にはそのようなことはできないと思ったことでしょう。だからこそギデオンさんも「どうすればイスラエルを救うことができますよう。わたしの一族はマナセの中でももっとも貧弱者です(わたしにはできません)」と訴えるのです。

しかし、主なる神さまは語られます。「わたしがあなたと共にいるから、あなたはミディアン人をあたかも一人の人を倒すように打ち倒すことができる」と(16)。つまり、あなたが士師として働かなければならないのは、「あなたがミディアン人に勝利を遂げる力がある」からではありません。「神さまと一緒にいてくださる。そして神さまが勝利を遂げてくださるからこそ、あなたは神さまに委ねて戦えば、勝利を得ることができるのですよ」と言われたのです。

それでも、ギデオンさんは疑いが晴れません。「では、わたしが主なる神さまに供え物をささげ、礼拝しますから、そのしるしを示してください」と確証を求めます(18)。そして、ギデオンが神の御使いの指示に従って献げ物をささげたとき、主の御使いは、手にしていた杖の先を伸ばして、肉とパンに触れた。すると、岩から火が燃え上がり、肉とパンを焼き尽くしたのです(21)。こうしてギデオンは、この方が主の御使いであることを悟りました。

その夜、ギデオンは主の言われるとおりにバアルの祭壇を壊し、アシェラ像を切り倒し、そして主なる神さまを礼拝するために祭壇を作り、献げ物をささげます(25-26)。しかしギデオンは人々を恐れて、夜中にこれを行いました。いくら神さまと一緒にいてくださるといっても、ギデオンは怖かったのです。

翌朝になり、バアルの祭壇が壊され、アシェラ像も切り倒されているのを見た人々は、ギデオンを責め立てます。ギデオンは奥に隠れていたのか、ここでは出てきませんが、ギデオンの父ヨアシュが出てきて、そして「もしバアルが神なら、自分の祭壇が壊されたのだから、自分で争うだろう」(31)と語り、ギデオンの味方であることが明らかになります。ミディアン人、アマレク人、東方の諸民族が結束してギデオンを責めるためにやって来ますが、ギデオンが角笛を吹くと、アビエゼルを始めマナセ、アシェル、ゼブルン、ナフタリの人々もギデオンを支持して合流してきました。ギデオンはもう後ろに下がることができない状態になっています。しかし、同時に自分に味方する民が多くあることも確認でき、主なる神さまが共にいてくださることを実感したことでしよう。

しかし、この期に及んでもギデオンは主なる神さまに召しの確認を行います。「もしお告げになったように、わたしの手によってイスラエルを救おうとなさっているなら、羊一匹分の毛を麦打ち場に置きますから、その羊の毛にだけ露を置き、土は全く乾いているようにしてください」(36-37)。さらに、「どうかお怒りにならず、もう一度言わせてください。もう一度だけ羊の毛で試すのを許し、羊の毛だけが乾いていて、土には一面露が置かれているようにしてください」(39)。主はその都度、ギデオンの試みを聞き入れてくださり、主が共にいてくださり、主がギデオンにすべての勝利をもたらしてくださることを約束してくださったのです。

みなさんは、神さまのことを疑ったり、信じられないことがないでしょうか？ 神さまはいつも皆さんと共にいてくださいます。そして、神さまはギデオンのようにしるしを求める皆さんの祈りも聞き届けてくださいます。主に祈り求め、今も私たちと一緒にいてくださる主なる神さまを信じましょう。(辻 幸宏)

---

[今週の暗唱聖句] 士師記 6章16節(後半)

わたしがあなたと共にいるから、  
あなたはミディアン人をあたかも一人の人を倒すように打ち倒すことができる。

---

## 〈展開例〉

イスラエルの人たちは、エジプトの国でひどい目に遭わされていました。「神様助けてください！」と、みんな一生懸命お祈りしたので、神様はイスラエルの人たちを助け出してくださいました。「神様ありがとうございます！」と喜んでエジプトの国から逃げ出したイスラエルの人たちでしたが、何年も経つうちに本当の神様のことを忘れて、偽物の神様を拝んだり供え物をしたりするようになってしまいました。偽物の神様を拝むことは神様がとてもお嫌いになることですから、絶対にしてはいけないことです。

あるとき、神様はギデオンさんに偽物の神様を壊してしまいなさいとお命じになりました。イスラエルの人たちが本当の神様のことを思いだし、本当の神様だけを礼拝するためです。本当の神様を信じる人を神様は喜んで助けてくださいます。

残念なことに、日本でもたくさんの方が偽物の神様を拝んだり供え物をしたりしています。

「これは何でしょう」。

(木片または石ころを見せる。木や石などの答えがあると思う)

「そうですね。では、これは神様ですか？」。

(違うという答えを聞いて)

「では、これならどうですか？神様ですか？」。

(といいながら目鼻を描く、また色を塗る。違うという答えを聞いて)

「そうですね、どんなに可愛い顔を描いても、金ぴかに色を塗っても神様にはなりません。でも、間違えて木や石で作られたものを神様だと思って拝んだり供え物をしたりしている人がいっぱいいるのです」。

「それは本当の神様ではありません。本当の神様は聖書で教えられている神様ただ一人です。本当の神様を礼拝しましょう！」と教えてあげましょう。

## 〈やってみよう〉

用意した木片や石にクレヨンやマーカーで顔を描いたり色を塗ったりして、人形を作ります。時間があれば、包装紙、端布、毛糸などをボンドで付けて、服や髪の毛にするのも楽しいと思います。



## 〈ねらい〉

主によって士師として召命を受けたギデオンは、繰り返し神さまに職務や信仰を確認しました。神さまはそのたびに答えてくださり、信仰が強められました。そのようなギデオンの姿と働きをとおし、子どもたちにも神さまを信じる者としての信仰の確認を促す。

## 〈ワーク〉

【Q1】 罪を繰り返し行うイスラエルの民に対して、神さまはどのような裁きを行われましたか？（1－6節）

1. 7年間、ミディアン人により支配された
2. イスラエルの民、全員が滅ぼされた
3. 罪をすべて赦してくださり何もされなかった

【Q2】 神さまは御使いをギデオンに遣わしました。神さまはギデオンのどのような働きに召されましたか？（11－24節）

1. 預言者
2. 士師
3. 祭司

【Q3】 ギデオンは神さまから士師としての召命を与えられましたが初めは何と答えましたか？（11－24節）

1. 任せてくださいとはりきった
2. 自信が無く断ろうとした

【Q4】 神さまの召命に対し、ギデオンは繰り返

し何を求めましたか？（11－24節）

【Q5】 神さまが士師としてのギデオンに最初に命じられたことは何ですか？（25－32節）

1. ミディアン人の支配からイスラエルの民を救うこと
2. バアルの祭壇とアシュラ像を壊し、神さまの為に祭壇を築き、献げ物をささげること
3. イスラエルの民をひとつにまとめること

【Q6】 イスラエルの民の中でギデオンの仲間となるものは与えられましたか？（33－35節）

【Q7】 何度も神さまに問いかけるギデオンに対して神さまは応えてくださいましたか？（36－40節）

## 〈お祈り〉

天の父なる神さま。あなたの尊いお名前を賛美します。ギデオンが神さまにより選ばれ、問いかけにお応えくださり、信仰が強められたように、私たちの信仰も導いてください。

## 〈答え（例）〉

【Q1】 1

【Q2】 2

【Q3】 2

【Q4】 しるし

【Q5】 2

【Q6】 与えられた

【Q7】 応えてくださった



## 〈ねらい〉

神さまは私たちの祈り願いを繰り返し聞き、繰り返し応えてくださる。

## 〈展開例〉

合同の話のあとで皆で分かち合いましょう。  
○最初、神さまの御使いに士師として召し出されたとき、ギデオンは素直に聞き従いましたか？

・何でよりによって私が……、他に候補者がいくらでもあろうに……  
→神さまの御心は人間の思考にまさる。

○み使いの話にもかかわらず、まだ信じきれないギデオンは何を頼みましたか？  
→どうか証拠を見せてほしい……

○このあと、神さまはギデオンにある命令をします。それはどんなものですか。また、ギデオンはその命令をいつ実行しましたか？

・ホントに神さまは私を守ってくれるの……？  
→まだすべてを神様にまかせきれない。だから周囲の目が怖い

○その後、ついにギデオンはイスラエル民族をはじめ、諸民族を集めますが、いきなり支配者であるミディアン人に対し兵を挙げて戦いに挑ましたか。もし、そうでないなら何をしましたか？

・ここまで来てナンナンですが、まだちょっと納得できなくて……  
→ギデオンも同じようだったです。

○これで、ギデオンはやっと納得して兵を挙げましたか。それともまだ何か神さまに頼みましたか？

→ここまで、神さまは一度も「いいかげんにしろ！」と怒っていない。自ら召し出したギデオンの面倒を最後の最後まで神さまは見てくださるのです。

## 〈祈り（要旨として）〉

人間の基準では測り知れない神さまの御旨と御心を知ったこと、イエス・キリストに至る救いと励ましの道であることを知ったこと、それらを備えてくださったことに感謝して。



## 〈ねらい〉

神さまの恵みは、神さまの一方向的な恵みによって与えられるものであることを知る。

## 〈子どもカテキズム〉

問28 主イエス・キリストの救いは、どのようにして私たちのものとなるのですか。

答 私たちが持っている正しさやかしこさ、そのほか、どんな良いものでも、自分の力で救いを手に入れることはできません。

救いは、ただ神さまの恵みとして与えられるのです。

問29 神さまの恵みとは何ですか。

答 神さまが、一方的に、愛をもって、私たちを救いのうちに選んでくださったことです。

私たちは、聖霊のお働きによって、自分を罪人と認め、悔い改め、イエスさまを信じてことができました。

ですから、私たちは、心をこめて神さまを賛美します。

## 〈展開例〉

○士師記に取り組む最初として士師記の文脈を確認しつつ、ギデオンの物語の背景を知ろう。

→士師記にはヨシヤの死から約300年の間にイスラエルに12人の士師が立てられたことが記されている。ギデオンの時代、イスラエルの人々

は、主の目に悪とされることを行ったので、主は彼らを7年間、ミディアン人の手に渡された。イスラエルの人々は主に助けを求めて叫んだ。

○ギデオンの召命の出来事の中で、神さまが何をギデオンに約束されたのか確認しよう。

→神さまはギデオンと「共にいる」ことを約束された(16)。「主と共にいる」ことこそ、神さまの恵みであり、信仰者の真の力となるのである。

○ギデオンの召命と主の約束との関係がどのようなものなのかを考えてみよう。

→神さまはイスラエルを救うためにギデオンをその器として召し出された。しかし、ギデオン自身が言うように、ギデオン本人に特別な力があるわけではない。神さまがギデオンと共にごりてくださるからこそ、ギデオンは神さまの召命に応じて働くことができるのである。

○子どもカテキズム問28、29を参考にしながら、私たち自身の力と神さまの恵みとの関係について考えてみよう。

→ギデオンがそうであったように、私たちもまた自分自身の力は小さなものである。しかし、神さまは私たち自身に力があるから救いの恵みを与えられるのではない。神さまが一方向的に恵みを与えられ、私たちと共にいてくださるからこそ、私たちは神さまの恵みに応じて、神さまのために働くことができるのである。



**(1) 主の選抜 (1-8)**

ギデオンと向かい合っていたミディアン人の陣営は、十三万五千人であった(8:10参照)。それに対してギデオンの陣営には三万二千人が集まっていた。人数を見比べた限り、ギデオンにはかなり不利な状況である。しかし主はギデオンに対して「あなたの率いる民は多すぎる」(2)とお語りになり、「恐れおののいている者は去る」ように求める(3)。こうして二万二千人が去り、残ったのは一万人であった(3)。

しかし、主はギデオンに対してさらに「民はまだ多すぎる」(4)とお語りになり、水辺において水を手にすくってすすった者三百人のみを残し、膝をついてかがんで水を飲んだ残りの者を去らせた。

主なる神さまがギデオンの陣営をより分けたのには理由がある。戦いは人間と人間による力の戦いではなく、主なる神さまによる戦いであるからである。主によって召されたギデオンが陣営の数に安心し、自分たちの力に頼って戦いに挑むことを、主が拒絶し、ギデオンが主なる神さまに対する信仰により、主に委ねて戦いに挑むことを望まれた結果である。

三万二千人から三百人に主が絞られたのも、単に数合わせではない。最初に去ることが求められた恐れおののいている者は、主に依り頼む信仰が問われた結果である。次に去ることが求められた者たちは、どの様な時にも敵に背を向けることのない注意深さがあるかが問われた結果である。

**(2) 主の激励 (9-15)**

三百人になったギデオンの軍勢に対して、ギデオンが恐ろしくなり、戦う意欲を失わせないために、主はギデオンに対して従者プラを伴って敵陣

に下ることを求める(10-11)。目の前には、ミディアン人らがいなごのように数多く横たわっているのが見える(12)。ギデオンは敵陣の一人の男が夢の話をして聞いたのを聞いた。その内容は、ミディアン人がイスラエルの手に渡されるという内容であり(13)、ギデオンはその夢の話と解釈を信じ、主にひれ伏して礼拝して、勝利の確信を得る(15)。

**(3) 戦いの勝利 (16-25)**

ギデオン率いる三百人のイスラエルと十三万五千人のミディアン人との戦いが始まる。ギデオンは百人ずつ三つの小隊に分け(16)、深夜に敵陣へと入っていく(19)。そして敵陣に着いた時、こぞって角笛を吹き、水がめを割って、松明を左手にかざし、右手で角笛を吹き続け、「主のために、ギデオンのために剣を」と叫んだ(20)。大軍が故に油断があったであろうミディアン軍は、不意を突かれた形となり、角笛の音、松明の光に混乱し、同士討ちを行うにいたる。主は少人数でも、大軍であるミディアン人たちが混乱し、敗走、逃走していくためにもっとも相応しい戦略、もっとも相応しい時間をギデオンにお与えくださったのである。

**(4) まとめ**

私たちは人間的な目、常識に目が奪われ、主なる神さまの御力に委ねることを忘れがちである。しかしギデオンの戦いにおける勝利は、この世的な常識の中で生きる者である私たちを、すべてを支配し、すべてを司られている主なる神さまへの信仰こそが何よりも重要であり、第一とすべきことであることを確認させてくださっている。

(辻 幸宏)



テキスト 士師記 7章  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問11, 13  
ウェストミンスター小教理問答 問11

### (単元のねらい)

わずか三百人の仲間と共に戦った士師ギデオンは、十三万五千人いたミディアン人たちに勝利を遂げる。しかし、この物語を単に人間の物語として語り聞かせることでは、勇者ギデオンの美談になってしまうことに注意をしなければならない。子どもたちに語り聞かせるときに、常に忘れてはならず、物語の中心に位置することは、すべてを支配し治めておられる主なる神さまの御力である。わずか三百人であっても主なる神さまが共にいてくださり、主が勝利を遂げてくださることをギデオンは信じて、主なる神さまにすべてを委ねたからこそ勝ち取った勝利である。

子どもたちを含め私たちは、周囲の状況によって物事を判断し勝ちであり、そこに主なる神さまが共におられ、支配しておられることを忘れてしまう。だからこそ、このギデオンの物語をとおして、主なる神さまが常に私たちと共におられ、私たちを支配し、守り導いてくださっていることを確認し、どのようなときにも、祈りととともに霊的な判断を下す必要があることを語っていただきたい。

## 「たった三百人で十三万五千人に勝つ！」

約束の地カナンが主によって与えられ、定住することができたイスラエルは、主の御前で悪とされることを行うようになりました。それは主なる神さまが、イスラエルを愛するが故に、父が悪いことをした子どもを叱るように、懲らしめなければならないほどひどいものでした。そのため主は、イスラエルを七年間、ミディアン人の手に渡され、イスラエル人は逃げ惑うようにして暮らしていました (6:1-5)。そのため、イスラエルの人々は、苦しみのあまりに主なる神さまに助けを求めて叫んだのです (6:6)。

イスラエルが罪を繰り返しても、なおも主なる神さまはイスラエル人を愛してくださっています。だからこそ、一人の指導者ギデオンをお立てくださいます。そして主なる神さまはギデオンに対して、ミディアン人と戦い、イスラエルを救い出すためにあなたを遣わすと命じられたのです (6:14)。

ギデオンがミディアン人を討つために立ったとき、イスラエル人は三万二千人が集まってきました (7:3)。この数は、ミディアン人十三万五千人

(8:10) に対して、決して多い人数ではなかったでしょう。しかし、主なる神さまは、「あなたの率いる民は多すぎるので、ミディアン人をその手に渡すわけにはいかない。渡せば、イスラエルはわたしに向かって心がおごり、自分の手で救いを勝ち取ったと言うであろう」(7:2) とお語りになります。つまり、これはイスラエル人とミディアン人との戦いですが、同時に主なる神さまとミディアン人との戦いなのです。ギデオンも一緒に戦うイスラエル人も、主なる神さまによって遣わされて戦うのです。だからこそ、イスラエル人が自分たちの力で勝ったと思うような人数は必要ないと主はお語りになりました。

最初にここから去るように命じられるのは、「恐れおののいている者」です (7:3)。つまり、恐れるとは、主なる神さまが共にいてくださることを信じておらず、自分の手で勝利をおさめなければならないとの思いがあるのであり、主はそれを不信仰であり、主の戦いには相応しくないとお語りになっているのです。

このとき二万二千人が帰り、残されたのは一万



人でした。しかし、主はギデオンに対して、「民はまだ多すぎる」(7:4)とお語りになります。そして、民を水辺に連れて行き、「犬のように舌で水をなめる者、すなわち膝をついてかがんで水を飲む者はすべて別にしなさい」(7:5)とお命じになりました。主と共に戦うためには、信仰と共にどのようなときにも周囲の状況を的確に判断することが求められます。犬のように水を飲んでいるようでは、背後に隙をつくり、敵に攻めてこられる危険が生じるのです。

このとき、ギデオンのもとに残ったのは三百人でした。ミディアン人十三万五千人からすれば、「たったの三百人」です。しかし、主なる神さまは、神さまを信じて、またどのようなときにも周囲を見渡す注意深さをもっている者こそが、主の兵士としてふさわしいとして、この三百人を残したのです。

ギデオンには、なおもミディアン人に対する恐れがありました。主は、ギデオンの恐れを取り去るために、敵陣であるミディアン人の中を下って行き、彼らが話していることを確認するように命じます(7:10-11)。すると、敵陣の一人の男が自分が見た夢について語っています。それはギデオンが勝利をおさめ、ミディアン人とその陣営が敗退するというものでした(7:13-14)。このことを聞いたギデオンは、主が勝利を遂げてくださることを確信して、ミディアン人と戦うことにしました(7:15)。

ギデオンは三百人を三つの小隊に分け、全員に角笛とからの水がめ、松明を持たせます(7:16)。そしてミディアン人の陣営に攻め入るのは深夜です(7:19)。敵が油断して寝入っているときに、一斉に角笛を吹き、持っていた水がめを砕き、さ

らに一斉に「主のために、ギデオンのために剣を」と叫ぶことにより、ミディアン軍を混乱させたのです(7:19-20)。ミディアン人たちはおじけづいて逃げて行き、また同士討ちを始めます。ここまで来れば、戦いの勝負は決まったようなものです。ギデオン率いる三百人のイスラエルは、十三万五千人のミディアン軍に勝ちました。

私たちが忘れてはならないことは、ギデオンたちは、立派な作戦をねって、成功をおさめたのですが、この勝利をおさめるにあたって、主なる神さまが常に共にいてくださり、主なる神さまの指示に従って戦ったゆえに、イスラエルは勝利を遂げることができたのです。

皆さんは、周囲の人たちに言われたら、いつでも「ああそうなんだ」と思って、言われるままに行うことはありませんか？ 周囲の人たちも行っており、当たり前だから、私も行うということはありませんか。確かに、周囲の人たちにあわせることは、大切なことです。しかし、何でもかんでも、他人にあわせていてもダメなのです。私たちは、このことが本当に正しいことなのか、いつでも考えなければなりません。どのようにしたらよいのか分からないですか。しかし、主なる神さまはいつでも私たちと一緒にいてくださいます。そして私たちを助けてくださいます。だからこそ、そうしたときには、神さまを信じて、神さまに祈り、神さまがお与えくださる答えに従えばよいのです。何をするにしても、自分でできるから、周囲の人たちも行っているからという理由で行うのではなく、主なる神さまはこのことを願っておられるのかを考えながら、祈りながら、行動することが、私たちに求められているのです。(辻 幸宏)

---

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 12章32節

小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

---



**〈展開例〉**

もし暗い夜に、知らない人のお家に「一人で行きなさい」と言われたらどうでしょう。恐くていやですね。わたしがそう言われたら、「いやだいやだ、一人でなんか行けない。誰か助けて！一緒に行って！」とお願いすると思います。お父さんやお母さんが「一緒に行ってあげるよ。」と助けてくれたら安心して行けますね。私たちの神様は「一緒にいてください」とお願いすると、どんな時でも必ず一緒にいて助けてくださる方です。

ミディアン人に苦しめられて困っていたイスラエルの人たちも、神様に「助けてください」と言いました。神様はイスラエルの人たちの願いを聞いて、ミディアン人と戦うために、ギデオンさんを隊長に選んでくださいました。

ギデオンさんは、「隊長になるなんてわたしには出来ません」と言いましたが、神様は「わたしと一緒にいるから大丈夫です。わたしを信じなさい」とおっしゃいました。ギデオンさんが本当に

大丈夫かな？ と思って見ると、ミディアン人の兵隊はたくさんいて、とてもかないそうにありません。それなのに神様は「ギデオンの兵隊は多すぎる」とおっしゃいました。そして、恐がっている兵隊や油断している兵隊をお家に返してしまったので、ギデオンさんの兵隊はほんの少しになってしまいました。ギデオンさんはもっと心配になって、もう一度、「神様、本当にこんな少しの兵隊でミディアン人に勝つことが出来るのですか？」と神様に聞きました。すると、神様はまた、「わたしが一緒に戦うのですから大丈夫です」とおっしゃいました。そして、ミディアン人に勝てる良い考えをギデオンさんにくださいました。そのおかげで、ギデオンさんたちはミディアン人に勝つことが出来ました。神様が一緒にいてくだされば、怖いことは何もないのですね。

ギデオンさんと一緒に戦ってミディアン人に勝ってくださった神様は、わたしたちと一緒にいていつでもわたしたちを守っていてくださいます。神様に従っていきましょう。

**〈やってみよう〉**

野菜のスタンプで遊びましょう。

スタンプパットまたは絵の具をスポンジや綿などにしみこませたもの（どちらも三色ぐらいあるとよい）を用意し、オクラや長ネギ、大根などを使って、適当な大きさに切った画用紙にスタンプングをして遊びます。

スタンプングした紙を、カードにしたり台紙に貼って、母の日のプレゼントにしてもよいと思います。



## 〈ねらい〉

300人で13万5千人に勝利したギデオンの戦いはすべて神さまの導きによるもので、人間の力ではなく神さまを信じ、すべてを委ねた結果である。私たちもこの世的な常識で判断してしまうことが多いなか、神さまが常に共におられ導いてくださること、信じ委ねることを子どもたちに伝える。

## 〈ワーク〉

【Q1】 ミディアン人の軍勢13万5千人に対してギデオンの軍勢は何人で戦いましたか？（1-8節）

【Q2】 神さまは最初3万2千人いたギデオンの軍勢を1万人に減らしました。なぜですか？（1-8節）

1. ケガや病気の兵士だったから
2. 敵を恐れて、神さまを信じ依り頼むことができていなかったから
3. 子どもや老人だったから

【Q3】 次に神さまは1万人いた兵士を300人に減らしました。どのような方法で判断をしましたか？（1-8節）

1. それぞれ力比べをさせた
2. 水辺で水を飲む姿勢をみた
3. 武器をたくさん持っている者を選んだ

【Q4】 300人に減った軍勢に不安を感じたギデオンに対し、神さまは敵の兵士が見た夢の話をお聞かせしました。どのような内容でしたか？(9

## - 15節)

1. ミディアン人の軍勢がギデオンの軍勢に勝利する
2. 戦いをすることがなくなる
3. 300人のギデオンの軍勢がミディアン人に勝利する

【Q5】 夜遅くに攻撃をしたギデオンの軍勢は角笛、水がめ、松明などを使い、ミディアン人の軍勢を混乱させるを行いました。その結果、戦いに勝利しましたか？（16-25節）

【Q6】 戦いの勝利は神さまの力によるものか、人間の力によるものか、どちらだと思いますか？（16-25節）

## 〈お祈り〉

天の父なる神さま。あなたの尊いお名前を賛美します。目で見えること、耳で聞こえることばかりを信じてしまう私たちが、神さまのみわざを信じ、神さまに依り頼む信仰が強められるように導いてください。

## 〈答え（例）〉

【Q1】 300人

【Q2】 2

【Q3】 2

【Q4】 3

【Q5】 勝利した

【Q6】 思いを分かち合しましょう



## 〈ねらい〉

どのような時も、自分の考えではなく祈りをもって神様の御声に聞き、従う者となろう。

## 〈展開例〉

問いに答えながら、分かち合いましょう。( )に下の箱から選んで文章を完成させてください。数回使われる文字もあります。

- 神様によって約束の地カナンへと導かれたイスラエルの人々でしたが、彼らは神様がお嫌いになることをするようになりました。そのため、神様は( )間、( )の手にイスラエルの人々を渡されました。イスラエルの人々は苦しみのあまり、神様に( )を求めました。神様はイスラエルの人々のために( )をお立てになりました。
- ミディアン人は13万5千人、それに対して、ミディアン人を討つために立ち上がったイスラエル人の人数は( )人でした。しかし、神様はイスラエルの人々が自分の手で救いを勝ち取ったと言わないように「( )は去りなさい」と言われました。( )人が残りました。神様は次に水辺で水を飲むように言われました。「( )のように舌で水を飲む者、すなわち、膝をついてかがんで水を飲む者は去りなさい」と言われました。残ったのは( )人でした。
- ミディアン人は13万5千人、ギデオンの精鋭は

( )人。勝ち目はありません。しかし、神様は全員に( )と( )と( )を持たせました。深夜一斉に( )を吹き、( )を砕き、「主のために、ギデオンのために」と叫ぶことにより、( )は混乱し、逃げたり、同士討ちを始めました。こうして、ギデオンの部隊は( )に勝ったのです。この戦いは( )常に共にいてくださり、その指示に従ったことにより、勝利できたのです。

ア、7年  
イ、主なる神様  
ウ、ミディアン人  
エ、300  
オ、角笛  
カ、1万  
キ、恐れおののいている者  
ク、松明  
ケ、助け  
コ、ギデオン  
サ、3万2千  
シ、犬  
ス、空の水がめ

## 〈祈り〉

天の神様、私たちは自分の考えが正しいと思ってしまう罪人ですが、いつも、あなたさまの御声を聞く者とならせてください。



## 〈ねらい〉

神さまが常に私たちと共におられ、私たちを支配し、守り導いてくださっていることを確認する。

## 〈子どもカテキズム〉

問11 私たちの神さまの全能、主権とは何ですか。

答 私たちの神さまが、すべてのものを神さまの栄光のために定め、造り、保ち、支配しておられることです。

神さまの力の及ばないところは、宇宙のどこにもありません。

問13 神さまの摂理のお働きとは何ですか。

答 今、私たちに働く、神さまの善いお力のことです。

神さまのお許しがなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、神さまは私たちの父として私たちを守ってくださいます。

ですから、健康も病気も、嬉しいことも悲しいことも、すべてのことが私たちの役に立つよう働くのです。

## 〈展開例〉

○神さまが、ギデオンとその仲間たちの数を三百人まで減らされたことの意味を考えてみよう。

→神さまがギデオンの仲間の数を三百人まで減らされたのは、イスラエルをミディアン人から救うのは人間の力ではなく、神さまの働きであることをイスラエルが知るようになるためである。

○子どもカテキズム問11から神さまの全能、主権について考えよう。

→神さまは、すべてのものをご自身の栄光のために定め、造り、保ち、支配しておられる。私たちが神さまの全能を信じ、主権を信じるということは、そのようにすべてのものを定め、造り、保ち、支配しておられる神さまの力を信頼するということである。

○子どもカテキズム問13から神さまの「摂理」について考えよう。

→神さまの摂理の働きとは、今、私たちのために働く、神さまの善いお力のことである。神さまの摂理の働きを信じることは、神さまが私たちの人生のすべてをその力によって導いてくださっていることを信じることである。ギデオンたちが少ない人数で多くの敵に立ち向かうことができたのも、そのような神さまの力を信じることができたからなのである。



単元の目標に沿って、「神にささげられたサムソン」というポイントに限定して研究していきたい。

主の御使いが不妊の女であったマノアの妻に対し、子を身ごもると告知するところに、この記事の焦点がある。この告知は、ルカ福音書におけるバプテスマのヨハネの誕生告知、また主イエスの受胎告知と比較される。聖書において、その時々危機的状況に対する神の劇的介入が、子どもの誕生という形で始まることはしばしばある。それは苦しむ民を救うための神の劇的な恵みの御業として起こる（モーセ、サムエル、そしてイエス）。ここでも怪力サムソンの誕生は、「ペリシテ人の手からイスラエルを解き放つ救い」(5) をもたらす、神の劇的介入の始まりである。

その告知の中に「その子は、ナジル人として神にささげられている」との言葉がある(5, 7)。原語に即せば「その子は、神のナジル」というだけの簡素な言葉である。フランシスコ会訳などは「ナジル人として聖別されている」と訳している。

ヘブル語「ナジル」は、「選り出された、世俗の使用から分離・聖別された」を意味する。そこから派生した「ナジル人」とは、イスラエルの中で特別に神にささげられた者である。

後代においては、そのようなナジル人になるために、期間限定で自主的に誓願するということが慣習として定まっていたようだ。その規定については、民数記6章1～21節に詳しい。特別の誓願を立て、主に献身する「ナジル人」になる者は、三つのことをタブーとした(①頭髪を切ること、②ぶどう酒やその他の飲食、③死体に近づくこと)。

しかし、元来のナジル人とは、特別な救出の力を担う者、あるいは神への奉仕に生まれながらに聖別された者として、民の中に与えられたカリスマ的存在であったようだ。そのような元来の意味

での古典的ナジル人として、サムソンとサムエルの名が挙げられる。両者は、生まれながらにしてナジル人であり、生涯を通して全うした。

さらに言えば、サムエルの場合は、親の誓願によって神に「ささげられた」のに対し、サムソンの場合は、人間の側からの先行する誓願は一切なく、まったく神の側から、生まれる前より「聖別されていた」という点で他に類を見ない存在である。

そのような出生が反映してのことか、サムソンは頭髪のこと以外は、タブーなどおかまいなしの破天荒なありようで、後代のきよいナジル人の姿からは程遠い。想像をたくましくするならば、そこには親への反抗もあったのかもしれない。「聖別された」子を与えられたゆえに、その子をふさわしく神に「ささげる」べく、自らをきよめ、そして恐らく子であるサムソンにもきよくあることを強いた両親。この葛藤。

単元の目標によれば、サムソンにならって「私たちが神にささげられた者として歩もう」と促すように勧められている。しかしテキストに即して考えるならば、「ささげられた者」としての歩みを強えられる時には、サムソンが抱えていたかもしれないような葛藤が、教会の子どもたちにも生まれる可能性があることを指摘せずにはおれない。

むしろこのテキストから語るならば、サムソンと同様に「聖別された」存在としての自己の尊さに、目を開いてあげることが肝要であろう。母の胎内にある時から、キリストのものとして「聖別」され、サムソン同様に、神の救いの歴史の中で重要な働きをなす一人のみどりごとして生まれてきた、すべての子どもたち。そんな召命に気付いたら、彼らはおのずと「自らを神にささげる」ナジル人の道を行くであろう。(坂井孝宏)

テキスト 士師記 13章  
参照カエキズム 子どもカテキズム 問31～33

### 〔単元のねらい〕

士師サムソンは、生まれながらのナジル人であった。子どもたちにとって、ナジル人は聖書の世界のことだが、神さまにささげられて神さまにお仕えするという点では、イエスさまを信じるキリスト者は、誰でもナジル人である。今日、神さまは、私たちに、神さまにささげられた者、神の子どもとして、どのように生活すべきかを求めているらっしゃるかを教えたい。

## 「神さまにささげられたサムソン」

愛するお友だち、おはようございます。

先月から旧約聖書のお話をしています。特にイエスさまのご先祖さんたち、イスラエルの人たちのお話です。

イスラエルの人たちは、神さまに先立って導かれながら、エジプトから約束の土地カナンまで旅をしました。何十年かかったかおぼえている？そう、四十年間でした。そのときのリーダーは、モーセでした。そのモーセは、ヨルダン川を渡る手前で、120歳で亡くなりましたね。イスラエルの人たちが、ヨルダン川を渡って、約束の土地カナンに入るときのリーダーは？ そうヨシュア。モーセの後には、ヨシュアをリーダーとして、約束の土地カナンに入って行きました。

ところが、その約束の土地カナンには、ペリシテ人のような、イスラエルの人たちよりも強い人たちがたくさん住んでいたのです。イスラエルの人たちは、そういう人たちと戦わなければなりません。それで、ヨシュアが亡くなってから、次から次へとリーダーが立てられました。彼らを“士師”と言います。実は、イスラエルの人たちは、約束の土地カナンに入ると、その土地の神々を拝んで、神さまに背く、偶像崇拜の罪を犯すようになりました。そのたびごとに、イスラエルの人たちは、その土地の強い人たちから攻撃されて、ピンチに陥りました。そのことで、イスラエルの人たちが、神さまを呼び求めて、神さまに立ち帰ると、憐れみ深い神さまは、“士師”と呼ばれるリー

ダーをお立てくださって、イスラエルの人たちを救ってくださったのです。全部で十二人、“士師”と呼ばれるリーダーが次々と立てられました。その内の一人が先々週と先週のお話のギデオンでした。今日は、“士師”の十二番目、サムソンのお話です。

さて、十一番目の士師、アブドンが、8年間、イスラエルの人たちのリーダーとして立てられて、亡くなると、またもやイスラエルの人たちは、神さまを忘れて、その土地の神々を拝むようになってしまいました。それで、イスラエルの人たちは、とても強いペリシテ人に攻撃されて、またもやピンチに陥って、40年間も苦しい目にあうことになりました。そんなとき、神さまは、イスラエル十二部族の一つ、ダン族のマノアと奥さんのところに天使を遣わして、二人に男の子を育てるとの約束を告げさせました。でも、奥さんは子どもを産めない体でした。天使のメッセージです。

「主の御使いが彼女に現れて言った。『あなたは不妊の女で、子を産んだことがない。だが、身ごもって男の子を産むであろう。今後、ぶどう酒や強い飲み物を飲まず、汚れた物も一切食べないように気をつけよ。あなたは身ごもって男の子を産む。その子は胎内にいるときから、ナジル人として神にささげられているので、その子の頭にかみそりを当ててはならない。彼は、ペリシテ人の手からイスラエルを解き放つ救いの先駆者となるう』」(13:3-5)。

みんなは、“ナジル人”って、はじめて聞くかな？  
“ナジル人”というのは、神さまにお仕えるために、神さまにささげられた人のこと。いくつか誓いを守ることが必要でした。たとえば、お酒を飲まないこと、髪の毛を剃らないことや死体に触らないことが必要でした。神さまが、マノアと奥さんにお与えくださる男の子は、産まれる前から、そういうナジル人として、神さまにささげられた人でした。そう、この人がサムソンで、ペリシテ人の手から、神の民イスラエルの人たちを救う、十二番目の士師なのです。

ところで、サムソンは、天使が告げた通り、「ペリシテ人の手からイスラエルを解き放つ救いの先駆者」とされました。「救いの先駆者」だから、やがて、神さまが遣わされる救い主、主メシアが、どういうお働きをなさるのが、このサムソンに示されていたのです。このサムソンに指し示されていた救い主、主メシアというのは、罪と悪魔の手から神の民を解き放ってくださるお方、そうです、みんなのイエスさまのことです。

そこで、今日、みんなにおぼえてもらいたいことは、そのイエスさまを信じている人は、誰でも、サムソンのように、神さまにささげられている者、神さまの子どもとされているということです。そう、イエスさまを信じているみんなは、神さまにささげられているのです。“ナジル人”なんて呼ばれることはないけれども、そして、特に髪の毛を剃らない誓いを神さまにする必要はないけれど

も、みんなも、サムソンのように、神さまにお仕えるために、神さまにささげられています。今日は、ぜひ、このことをおぼえてください。

それなら、神さまにささげられている者として、どのように生活することが大切でしょうか。ナジル人は、お酒を飲まないとか、髪の毛を剃らない、死体に触らないといった、神さまがお命じになったことを一生守る必要がありましたが、みんなにとって大切なことは、神さまがおっしゃる通りに生活することです。今のみんなに神さまが何を信じるように求めているらっしゃるのか、どのように生活するように求めているらっしゃるのか、そのことを聖書を通してちゃんと知って、その通りに信仰生活をするということです。私たちばくたちは、聖書のお言葉の通りに信仰生活をするので、神さまにお仕えます。神さまにささげられている者として、神さまの子どもとして生活します。そのように生活することで、周りの、まだ神さまを知らないお友だちに、神さまの子どもとして生活することのすばらしさを伝えていくのです。イエスさまによって罪と悪魔の手から解き放たれて生活することのすばらしさを証していくのです。

愛するお友だち、今週も、みんなは、イエスさまを信じることで、すでに神さまにささげられていて、神さまの子どもとされていて、この世の中で光輝いていることを忘れないでください。

(長谷川潤)

---

[今週の暗唱聖句] 士師記 13章7節 (一部)

その子は胎内にいるときから死ぬ日までナジル人として神にささげられている。

---





## 〈展開例〉

あなたのお友だちはみんな教会学校に来ていますか？ あなたのお家の近所の人はどうですか？ 教会に来てお友だちは少ないですね。少し寂しいかも知れませんが、がっかりすることはありません。教会学校に来て神様を信じているお友だちは、神様のために特別に選ばれている神様のこどもなのです。特別に選ばれたなんて、うれしいことですね。

神様のために選ばれたわたしたちは、神様のお役に立つこと、神様が喜んでくださることをしたいですね。何をしたらいいでしょう？

いちばんはじめにすることは、神様が喜んでくださることが出来るようにお祈りすることです。それから、大きな声で神様を賛美することです。心からの賛美を神様は待っていらっしゃいます。もう一つはあなたのように教会学校に来て聖書の

お話を聞くこと、そしてイエス様になさったようにみんなに親切にすることです。そうすると、神様はとても喜んでくださいます。

そして、あなたがそれを喜んですることが出来ると、まだ教会学校に来ていないお友だちが、「あれ、教会学校に行っているお友だちって、何だかいつも楽しそうだな」、「神様を信じているお友だちって優しいな」、「神様って素敵なお友だちだ」と、お友だちにも神様のすばらしさが伝わります。神様のすばらしさが伝わって、たくさんのお友だちが教会学校に来ることが出来たら神様はもっともっと喜んでくださいますし、わたしたちもううれしいですね。

神様のために特別に選ばれたわたしたちですから、これからも神様が喜んでくださることをたくさんしましょう。

## 〈やってみよう〉

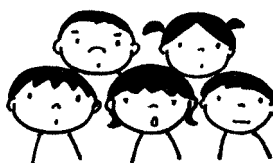
## さんびしましょう

「よろこびひろげよう」

(『ブレイズワールド (子どもリビングブレイズ)』26、いのちのことは社)

- 1番 よろこび ひろげよう  
ちいさな ぼくたちだけど  
イエスさまはどんなときでも  
あいしてまもってくださる
- 4番 みことば つたえよう  
ちいさな ぼくたちだけど  
イエスさまはどんなときでも  
あいしてまもってくださる

☆先生が考えた振りや動きで歌ったり、子どもたちに振りを考えてもらったりすると、より楽しんで歌えることと思います。



## 〈ねらい〉

サムソンは生まれながらのナジル人でした。イエスを信じる私たちも「ナジル人」です。神さまは私たちに、どのように生きるよう求めていらっしゃるかを教えます。

## 〈暗証聖句〉

「その子は胎内にいる時から死ぬ日までナジル人として神にささげられている。」(士師記13章7節)

## 〈ワーク〉

【Q1】この時代、イスラエルの人々は40年間ペリシテ人に攻撃され苦しい目に会いました。それはなぜですか？(1節)

【Q2】子どもが産めなかったマノアの妻に、主の御使いは何と言いましたか？(3-5節)  
あなたは、( )を産むであろう。  
その子は胎内にいる時から( )として神にささげられている。

【Q3】ナジル人とは神さまにお仕えする為、ささげられた人のことです。神さまから守るよ

うに言われたことは何でしたか？(民数記6章1-8節)

- ①( )を飲まない。  
②( )を切らない、そらない。  
③( )に触らない。

【Q4】私たちも生まれる前から神さまにえられ、守られています。私たちがどのように生きるよう神さまは求めていらっしゃるでしょうか？

## 〈お祈り〉

愛する神さま。生まれる前から私たちを守り愛してくださっていることを感謝します。神さまに喜ばれる子どもになれますよう、これからも導いてください。

## 〈答え(例)〉

【Q1】主の目に悪とされることを行ったため

【Q2】男の子

【Q3】①お酒 ②髪 ③死体

【Q4】思いを分かち合ひましよう



〈ねらい〉

礼拝で語られたサムソンの歩みをふり返りながら、教会学校に出席し礼拝することもたちに神様の恵みと力が与えられていることを知る。

〈展開例〉

※分級に未信者の家庭から来ている子どもと一緒に出席している場合は、これから神様を信じていこうと思えるよう、配慮しながら話しましょう。

○神様のことを忘れ、神様から離れて生活している人と、神様に愛され、神様に従って生きる人の人生を比べてみましょう。

例) 日曜日の過ごし方

・礼拝しない人は……朝9時頃に起きてアニメの番組を見ます。午後は遊んで過ごします。

→人を創られた神様は悲しんでおられるでしょう。

・礼拝する人は……皆さんのように朝9時頃に

は教会に出かけて礼拝します。

→人を造られた神様は喜んでおられ、恵みをあふれるばかりにくださるでしょう。困ったことがあっても、祈ることで、いちばん良い助けを神様があたえてくださいます。

○その他、教師の信仰生活の中で、信仰を持っていて良かった経験や恵みを子どもたちに紹介します。もし信仰を持っていなかったらどんな人生を歩んでいたろうか等を話すのも楽しいかもしれません。

〈祈り〉

神様、私たちが教会学校に出席させてくださり、まことの神様を信じる人としてくださることをありがとうございます。好きなことや、楽しいことを少しがまんしたりしないといけないこともありますが、それ以上に神様が良いもので一杯にしてくださいることをありがとうございます。



## 〈ねらい〉

神さまにささげられた神の子どもとしての歩むことを知る。

## 〈子どもカテキズム〉

問31 救いとは何ですか。

答 神さまの子どもとされることです。  
そのために、神さまは私たちの罪を赦して義と認めてくださいました。  
ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」とお呼びします。

問32 救われたあなたはどうなりますか。

答 聖化の歩みを始めます。

問33 聖化の歩みと何ですか。

答 神さまの子どもとして、罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。  
神さまに愛されている喜びのうちに、私たちが神さまを愛して歩みます。

## 〈展開例〉

○サムソンは「ナジル人」として神さまにささげられたが、「神さまにささげられる」とはどのような意味か考えてみよう。

→「神さまにささげられた」人は、神さまのため

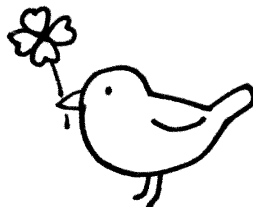
に神さまに仕える人である。ナジル人はいくつかの誓いを守る必要があったが、その本質は神さまに仕える者として神さまの前に「聖別された（聖くされた）」存在としてあり続けることにあった。

○子どもカテキズム問31から、私たちが「神さまの子ども」であることと「神さまにささげられている」者であることについて考えてみよう。

→イエス・キリストを信じる者は、誰でもサムソンのように神さまにささげられている者であり、神さまの子どもとされている。ナジル人のような内容の誓いを守るということはしないが、神さまに救われた者として、喜びと感謝をもって神さまを「父」と呼び、神さまに従う歩みをするのである。

○子どもカテキズム問32、33から聖化の歩みについて考えてみよう。

→イエス・キリストを信じ、キリストに結ばれた者は、聖化の歩みをする。それは、神さまに仕える者として、神さまの前に「聖別された（聖くされた）」者としてあろうと努め続けることであり、私たちの主、イエス・キリストの姿に似ていくことでもある。



単元の目標に沿って、「サムソンの祈り」の意味に特に注目して研究していきたい。

サムソンにはライオンをも手で引き裂く怪力があった(14:6)。それは神が与えた霊の賜物であり、ペリシテ人という屈強な民族に対抗する勇気をイスラエルに与えるための特別なカリスマであった。サムソンがペリシテ人を打倒するために聖別され(先週の聖書研究を参照)、備えられた救済の器であることは、“神のご計画に基づいて”ペリシテ人の妻を得た、とされていることから明らかである(14:1-4)。

しかし彼は、その召命を自覚することなく、怪力に物を言わせて、だれはばかることなく自由奔放に行動した。粗暴な性格は、ペリシテ人との衝突をいたずらに引き起こし、次々と殴り殺しては恨みを買うだけであった。そのようにして、神からの賜物を決してふさわしく用いることなく、おのれの力を誇示していたサムソンであった。女にもだらしなく、問題ばかり起こす彼に対して、イスラエルの中にも迷惑に思う者はいた(15:9以下)。

そんな彼がペリシテ人の罠に落ちて、デリラにだまされて力を失うくぐりたりは、物語としての魅力にあふれている。注目すべきは、ペリシテ人に捕らえられる前のところで、サムソンは「主が彼を離れられたこと」に気付いていなかった(20)という点である。主が共におられるなら勝利があり、離れられるならばどこにも希望はないというのは、イスラエルの歴史が伝えてきた信仰であった。そして、主がイスラエルを離れる時は、いつもその民の犯した罪に原因がある(民数14章全体の中での41節、またヨシュア7章全体の中での12節を参照)。それはまた、特別なカリスマをゆだねられた者の場合も同じである。サウルは様々な過ちを犯し、その結果として、主の霊は彼から離れて悪霊がさいなむようになった(サム上

16:14)。

そう考えれば、ここでのサムソンの場合も、単に髪を剃られた結果として魔術的に力が失われたわけではなく、主がその行為に内在する明確な罪を見られたがゆえに、彼から離れられた結果である。それはナジル人としてのタブーを破ったという表層的な罪にとどまらない。彼の人生全体における傲慢と反抗、神への畏れの欠如、賜物の不当な管理などなどを、神が数えられた結果であると読むことはゆるされているであろう。結果サムソンは、目をえぐられ、永遠の暗黒の中で奴隷にされ、三千人も敵の前でさらし者にされるという恥辱を味わうことになる。これは「罪人の悲惨」そのものである。

そんな深い淵の底から、彼は祈る。「わたしの神なる主よ。わたしを思い起こしてください」(28)。思い出すのはネヘミヤの祈りである。捕囚の生き残りとしてエルサレムに残っている者たちの惨状を聞かされたネヘミヤが、泣き崩れ、断食して神にささげた祈りが記録されている(ネヘミヤ1章)。その祈りの中に、罪の悔い改めと、契約を「思い起こしてください」との祈りがある(7, 8)。

サムソンの「思い起こしてください」との祈りにも、自らの罪と悲惨を悔いる嘆きを読み取ってよいであろう。契約の神は、そのような罪人を厳しく罰せられる神である。しかし同時に、その罪人をなお愛し、立ち返って生きよと願われる神である(エゼキエル33:11)。この神は、罪を悔いる者が嘆いているのを見て、憐れみを注がれない方ではない。サムソンにも、その憐れみは注がれ、最後の力が与えられた。彼はようやく最後に、自分の召命に忠実に働き、与えられた賜物をふさわしく用いることができた。ペリシテ人は倒され、神の栄光は表された。サムソンという、この愚かな器を通してさえも。(坂井孝宏)

テキスト 士師記 16章  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問68

### 〔単元のねらい〕

サムソンは、ナジル人としての誓いを守ることをせず、神さまに罪を犯してしまいましたが、結局、最後は、罪を悔い改めて、神さまによりすがること、自分の命と引き換えに、天使の予告通りに、ペリシテ人の手から神の民イスラエルを解き放つ救いの先駆者となった。サムソンの勝利は、サムソンと共におられる全能の神さまの勝利だが、神さまの御言葉に従い、神さまに信頼して祈るときにこそ、全能の神さまのご臨在をよくおぼえることができることを教えたい。

## 「祈りにこたえ勝利をお与えくださる神さま」

愛するお友だち、おはようございます。

今日も、先週に続いて、士師十二番目、最後の士師、サムソンのお話をしましょう。

サムソンが、イスラエルのリーダーとして、イスラエルの人たちを守るようになると、ペリシテ人たちは、何とかして、サムソンをやっつけようと考えました。ところが、サムソンは、とても怪力なのです。一匹の若い獅子を何にも武器を使わないで、素手で、子山羊を裂くように真っ二つにしたり（14:5, 6）、どう猛なジャッカルを三百匹も捕まえたりしました（15:4）。ですから、そう簡単には、サムソンを捕まえて、やっつけることはできません。

サムソンの怪力の秘密って、何でしょうか？実は、彼の怪力の秘密は、生まれてから一度も髪の毛を剃ったことがないことにありました。しかし、髪の毛が剃られると、怪力を出せなくなってしまったのです。それなら、サムソンが、怪力を出せたのは、サムソンが怪力の持ち主だったからだと思う？実は、サムソンが怪力を出せたのは、神さまがサムソンと一緒にいてくださったからなのです。葦の海を真っ二つに分けられたり、ヨルダン川の水を壁のようにしてせき止められた神さまがそのものすごい御力を出してくださったので、サムソンは怪力を出せたのです。それで、サムソンが、デリラという女の人に、その秘密を教えて、髪の毛が剃られてしまうと、怪力を出せな

くなってしまいました。それは、神さまがサムソンを離れられて、御力を出してくださらなかったからなのです。神さまは、サムソンに髪の毛を剃るなど命じられていたのです。ところが、サムソンは、その秘密をデリラにバラしてしまって、髪の毛を剃られてしまいました。サムソンは、神さまのおっしゃることに従わなかったのです。それで、神さまがサムソンから離れてしまわれたので、急に弱くなってしまい、ついにペリシテ人に捕まえてしまいました。そして、両目をつぶされて見えなくさせられ、牢屋に入れられて、粉ひきをさせられました。

ところで、みんな、髪の毛が伸びると、男の子は床屋さんに、女の子は美容院に行って、髪の毛を切るよね。お家でお母さんが切ってくださいのお友だちもいるよね。髪の毛は切っても、時間が経つと、また伸びるものです。髪の毛を全部剃って、丸坊主にしても、時間が経つと、また生えて来るよね。サムソンも、髪の毛を剃られたけれども、また生えて来て、髪の毛が伸びました。

強敵サムソンを捕まえて、やっつけることができた！というので、ペリシテ人たちが、自分たちの守り神ダゴンのお祭りをしていたときのことです。守り神ダゴンがサムソンに勝利して、やっつけてくれたというのでお祝いを盛大に行っていたのです。そんなお祭りの会場で、サムソンは、みんなの見せ物にされていました。みんなは、サ

ムソンのとてもみじめな格好を見て、大笑いしました。けれども、このときのサムソンは、以前のサムソンとは違いました。サムソンは、神さまへの誓いをたくさん破ってしまいました。そして、とうとう、髪の毛を剃られたことで、神さまはサムソンから離れてしまわれました。そんなサムソンは、牢屋の中で、神さまのおっしゃることに従ってこそ、神さまと一緒にいてくださって、御力を出してくださることを改めておぼえて、何でもできる神さまにこそ、よりすぐることの大切さを知ることになっていました。

サムソンは、ダゴン神のお祭り会場に引き出されると、目が見えないので、建物を支えている柱に触らせてくれるように、彼の手をつかんでいた若者に頼みました。建物の中は、ペリシテ人のリーダーたちや男女でいっぱい。屋上にも、何と三千人もの男女がいました。そのとき、サムソンは、神さまにお祈りしました。「サムソンは主に祈って言った、『わたしの神なる主よ。わたしを思い起こしてください。神よ、今一度だけわたしに力を与え、ペリシテ人に対してわたしの二つの目の復讐を一気にさせてください』(16:28)。こうお祈りすると、サムソンは、建物を支えている真ん

中の二本の柱の一方に右手を、他方に左手をつけて、もたれかかりました。すると、ものすごい音と共に、建物は崩れて、そこにいたペリシテ人たちは全滅、もちろん、サムソンも亡くなりました。しかし、こうして、サムソンは、自分の命と引き換えに、ペリシテ人の手からイスラエルを解放放ったのでした。そのようにして、神さまにお仕えするナジル人の一生を終えたのです。

さあ、今朝のサムソンのお話から、私たち、ぼくたちは、とても大切なことを教えられます。それは、神さまと一緒にいて助けてくださると信じているならば、神さまがおっしゃることに従うこと、そして、神さまに信頼してお祈りすることが大切だということです。そうするならば、私たち、ぼくたちは、目に見えない神さまと一緒にいて助けてくださることをよくおぼえることができるのです。

今週から、また新しい一週間、学校や幼稚園が始まります。何でもできる神さまが、今週も、みんなと一緒にいて助けてくださいます。神様がおっしゃることに従って、神さまに信頼してお祈りしながら、今週も安心して生活しましょう。

(長谷川潤)

---

[今週の暗唱聖句] 士師記 15章18節 (一部)

あなたはこの大いなる勝利を、この僕の手によってお与えになりました。

---



## 〈ねらい〉

ぼくたち私たちは、失敗してしまうことがあります。でも、神様に悔い改めて祈るときに、神様が祝福をしてくださることについて、学びたいと思います。

## 〈展開例〉

ぼくたち私たちは、失敗してしまうことがあるかな?? 聞いてみる……

サムソンは、神様から選ばれた、勇気と怪力に満ちた恵み豊かな人でした(14:5-6, 15:4)。

ところがサムソンは、その神様の恵みに気付かず、その力を自分勝手に用いて、誰かれはばかることなく、自分勝手に行動していました。特に意味もなくペリシテ人と衝突を起こして、彼らをなぶり殺しにしました。また、神様の恵みを自覚せずに、「サムソンはガザに行き、一人の遊女がいるのを見て、彼女のもとに入った」(1)と聖書にあるように、女の人と遊んでいる始末でした(1)。

そして、「彼女は膝を枕にサムソンを眠らせ、人を呼んで、彼の髪の毛七房をそらせた。彼女はこうして彼を抑え始め、彼の力は抜けた」(9)とあるように、そのデリラによって、怪力の秘密が暴かれて、彼は髪の毛を剃られてしまったのです。

「彼女が、『サムソン、ペリシテ人があなたに』と言うと、サムソンは眠りから覚め、『いつものように出て行って暴れて来る』と言ったが、主が彼を離れられたことには気づいていなかった」(20)と聖書は言っています。

神様がぼくたち私たちと共にいてくだされば、

そこには祝福があります。そこには勝利があります。しかし、神様が離れてしまったら、そこには希望も喜びもなくなってしまうのです。

サムソンは、自分から力が抜けたのに気が付かずにペリシテ人と戦ったために、彼は戦いに敗れて、牢獄に入れられてしまいました(21)。

しかし、そこで彼は悔い改めるのです。苦しみの淵で、彼は主に祈るのです。「サムソンは主に祈って言った、『わたしの神なる主よ。わたしを思い起こしてください』(28)。神様に従って来なかった、その罪を悔い改めました。すると神は、サムソンのその悔い改めの祈りを聞き上げてくださるのです。最後に彼は神様に立ち返って、『わたしの命はペリシテ人と共に絶えればよい』と言って、力を込めて押した。建物は領主たちだけでなく、そこにいたすべての民の上に崩れ落ちた。彼がその死をもって殺した者は、生きている間に殺した者より多かった」(30)。力が与えられて、サムソンは大きな働きをして生涯を閉じるのです。

ぼくたち私たちも、失敗をしても大丈夫です。神様に悔い改めて、立ち返れば、神様は大きな祝福を与えてくださるお方なのです。失敗をしても、悔い改めて神に心新たに従っていきましょう。

## 〈お祈り〉

天の父なる神様、どんなに失敗をしても悔い改めて、何度でも神様に従えるように導いてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。





**〈ねらい〉**

サムソンはナジル人としての誓いを守らず、神さまに罪を犯しました。しかし、最後には罪を悔い改め、神さまはサムソンの祈りを聞きとどけてくださいました。私たちも神さまの御言葉に従い、信頼して祈ることの大切さを伝えます。

**〈暗証聖句〉**

「あなたは、この大いなる勝利を、この僕の手によってお与えになりました。」(士師記15章18節)

**〈ワーク〉**

- 【Q1】サムソンの怪力の秘密は何でしょうか？(17節)
- 【Q2】「主がサムソンから離れられた……」のはなぜでしょうか？(19-20節)
- 【Q3】自分の罪を悔い改めたサムソンは、心から祈りました。(28節)

「わたしの神なる主よ。わたしを（ ）ください。」

- 【Q4】サムソンの祈りに、神さまはどのように答えてくださいましたか。(30節)

**〈お祈り〉**

愛する神さま。いつも私たちと共にいて助けてくださることを信じます。神さまをおぼえ、心からお祈りすることが出来ますよう、導いてください。

**〈答え(例)〉**

- 【Q1】髪の毛。ナジル人として献身して、神さまから力を与えられていた
- 【Q2】髪の毛がそられて、ナジル人としての献身が失われたため
- 【Q3】思い起こして
- 【Q4】力をもう一度与えてくださった



## 〈ねらい〉

神様の御言葉に従い、神様に信頼して祈るときにこそ、全能の神様の御臨在をよく覚えることができることを教えましょう。

サムソンの力は神様が一緒にいてくださったからこそ与えられた力でした。

神様が一緒にいて助けてくださると信じているならば神様がおっしゃることに従うこと、そして、神様に信頼してお祈りすることが大切だということを学びましょう。

## 〈展開例〉

問いに答えながら、分かち合しましょう。

## ○サムソンの力の秘密は何でしょうか？

→サムソンの力の秘密は、「髪の毛を切らない」と言われた神様の命令を守っていたからです。このサムソンの秘密を知っている人はだれもいません。

## ○サムソンはなぜ力を失ってしまったのでしょうか？

→サムソンは愛したデリラの誘惑に負けてしまい、秘密をしゃべってしまったため、髪の毛を切られてしまった。

## ○髪の毛を切られたサムソンはどのようにになりましたか？

→主がサムソンを離れたので力が抜けた。そのためペリシテ人にとらえられ、目をえぐり取られ、青銅の足かせをはめて牢屋に入れられた。

☆賜物の管理をすることの大切さ、神の教えに従うことの大切さを導きましょう。

## ○牢屋の中でサムソンはどのように変化しましたか？

→神様の教えに従ってこそ神様が共にいてくださることを覚え神様により頼むことの大切さを信じた。

## ○サムソンは命をかけて何をしましたか？

→神様を信頼して祈った。そして神様はサムソンと共にあり、祈りに応えてくださった。「わたしを思い起こしてください」に込められたサムソンの悔い改めにより、神様はサムソンに再び力を与え、ペリシテ人を全滅させてイスラエルを救われた。

☆神様に従い、信頼して祈ることの平安と祝福を語りましょう

## 〈祈り〉

神様、どうか神様の御言葉に従い、神様に信頼して祈ることができますように。



## 〈ねらい〉

神さまに信頼して祈ることの大切さを知る。

## 〈子どもカテキズム〉

問68 恵みの手段とは何ですか。

答 御言葉と礼典とお祈りです。

父なる神さまは、聖霊のお働きによって、特にこの三つを通して、私たちに、イエスさまがいっしょにいてくださることを信じさせてくださいます。

こうして、私たちはイエスさまと一つに結び合わせられ、キリストの体なる教会として建て上げられます。

## 〈展開例〉

○サムソンの祈りの言葉を確認しよう。

→「わたしの神なる主よ。わたしを思い起こしてください。神よ、今一度だけわたしに力を与え、ペリシテ人に対してわたしの二つの目の復讐を一気にさせてください。」

○「わたしを思い起こしてください」というサムソンの祈りにはどのような思いが込められているか考えてみよう。

→順調な頃のサムソンは神さまからの召命を正し

く自覚することができていなかったのであろう。デリラに髪の毛をそられ、「主が彼を離れられ」(20)、ペリシテ人に捕らえられてから、彼の力の源が神さまにあることを自覚させられた。「わたしを思い起こしてください」という祈りには、自らの傲慢についての悔い改めが伴っている。

○サムソンの祈りから私たちは何を学べるか考えてみよう。

→私たちは自分自身の力だけで生きていくことはできない。神さまが共にいて私たちを助けてくださると信じ、神さまの御言葉に従うこと、そして、神さまに信頼して私たちの必要を祈り求めることが私たちにとって大切なことなのである。

○子どもカテキズム問68から、「祈り」が私たちにとってどのようなものであるかを確認しよう。

→「祈り」は、神さまが私たちに与えてくださっている恵みの手段である。私たちは祈りを通して、イエス・キリストが私たちと共にいてくださることを信じるようにと導かれている。それは聖霊の働きによるものである。



インマヌエル

**〈イスラエル人とモアブ人〉**

イスラエル人とモアブ人との関係は、「主はわたしに言われた。『モアブを敵とし、彼らに戦いを挑んではならない。わたしはその土地を領地としてあなたには与えない。アルの町は既にロトの子孫に領地として与えた。……』」（申命記2:9、参照：創世記19:36, 37）と語られ、アブラハムとロト以来のイスラエルとモアブの親しい関係が示されている。

その反面、出エジプト時にモアブの平野に宿営したイスラエルに対して、モアブの王バラクが、イスラエルを呪う言葉を語った故に（民数記22:1-6）、「アンモン人とモアブ人は主の会衆に加わることができない。十代目になっても、決して主の会衆に加わることにはできない」（申命記23:3）と、偶像礼拝への誘惑があることから、注意も促している。

**〈イスラエル人とモアブ人の結婚〉**

ルツは、オルバと共にモアブの女（4）であり、イスラエル人であるナオミからすれば異邦人であった。イスラエル人が異邦人と結婚することは、バビロン補囚以後は、異教的教えに汚染されないよう厳しくなっていくが、それ以前は、聖書において禁止されることではなかった。特に上に記すとおり、イスラエルとモアブは親しい関係があったことより、モアブの地に身を寄せていたエリメレク、ナオミ一家からすれば、息子たちがモアブの女と結婚することは、無理がなかったと思われる。

**〈ナオミの決断①—帰国〉**

ナオミの夫エリメレクが死に（3）、後に息子たち（マフロン、キルヨン）も相次いで死に、最後にナオミと嫁たちのみが残される（3, 5）。特に

ナオミにとっては、子も亡くなり、孫もないことにより、深い悲しみと同時に、社会的な死を宣告されたのと同然であった。そのため、ナオミは、心機一転するために、住み慣れた場所であるモアブを離れ、ユダに帰ろうと決断する（7）。

しかしこのナオミの決断の背景は、主がその民を顧みられた（6）からであり、ナオミの決断により、ルツがボアズと結婚し、異邦人であるルツがアブラハムの系図に組み込まれていくという、主の摂理があることを忘れてはならない（参照：マタイ1:5）。

**〈ナオミの決断②—離別〉**

一方ナオミは、二人の嫁の事を思い、二人が再婚し幸せになるようにと、離別を決断する（8, 9）。それは、ナオミには他に息子がなく、二人の夫となる者がいなかったからであり（11-13、参照：申命記25:5）、イスラエルにあって異邦人である二人の嫁が再婚することの困難さも、容易に察知したためであり、これがナオミの信仰から出てくる愛である。

**〈ルツの決断〉**

オルバはナオミと別れの口づけをして別れていくが、ルツは離れなかった（14）。ナオミは主なる神に対する信仰によって物事を判断し、行動していくが、ルツ自身もまた主なる神に対する信仰による決断を行ったのである（16）。旧約の時代だからという理由で、異邦人に対する救いが拒絶されていたわけではなく、主への信仰を告白する者に対する救いが約束され、神の救いの歴史の中においても、ルツに重要な位置が与えられていくのである（マタイ1:5）。（辻 幸宏）

※第25号に掲載されたものを再掲載しました。

テキスト ルツ記 1章  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13

### 〔単元のねらい〕

「夫と息子を失ったナオミに、神はルツを与えられた。信仰の絆の深さを喜ぼう」という単元目標のどこに、ねらいを定めるべきか。ナオミの信仰は、神への苦い思いに曇らされている。ルツの告白も、同行する決意の固さを表明する域を越えない。両者の絆と呼べるものが垣間見られるとすれば、嫁の明日のために祈りをささげた姑、姑の今日のために尽くそうとした嫁、二人をそのように導かれた神の慈しみこそ、ねらい目であろう。

## 「慈しみのあるところ」

この世に起こり来るすべての出来事には、光のあたる所とあたらぬ所があります。歴史として記録される出来事と、人々から忘れ去られてゆく出来事があるのです。聖書は、光のあたらぬ所にも光をあて、神の歴史として記録に残します。その一つがルツ記なのです。

紀元前一千年以上の昔のこと。パレスチナに住み着いたイスラエルに、国家を統治する王がまだいない時代。ベツレヘムの町に一人の女性が住んでいました。彼女の名はナオミ。「わたしは喜び、わたしは楽しみ、わたしは快い」という意味の名です。彼女と夫と二人の息子、この四人家族に突然、災難がふりかかります。飢饉に見舞われ、ベツレヘム（パンの家）から食糧（パン）が消えてゆくのです。仕事を失った夫は、食糧調達のため遠くの町まで出稼ぎにゆかねばならなかったでしょう。それでも一家は生活に窮し、住み慣れた家と先祖伝来の土地を、人手に渡さねばならなかったのです。ナオミは生活の基盤を失ってしまいました。

悲嘆にくれる彼女に残されたのは、夫と息子たちと身の周りの僅かなものでした。しかしそれは、彼女にとって生活の保証となるものでした。「わたしには夫がいてくれる。息子たちもいてくれる。そうだ、わたしは夫を喜びましょう。息子たちを楽しみましょう。それを快しとして生きてゆこう」。そんなふうに自分を励まし、彼女は故郷を

後にします。ヨルダン川を越えて、東の国モアブの原野に移り住むのです。そこには、旱魃の被害が及んでいなかったようです。しかし、そこで始まる生活が困難を極めることは、十分に察しがつきます。ユダヤ人がモアブに移り住むということは、外国人（寄留者）として暮らすということです。現地の人々との関係を築かなければ生活は立ち行きません。その地での生活習慣を身に付けながら、なおユダヤ人としての宗教生活を守らねばなりません。その苦労は並大抵ではなかったでしょう。

そんな矢先に、夫はナオミを残して死んでしまいます。近所の人々からは、見るに見かねる様子だったでしょう。やがて土地の娘たちが、息子たちの所に嫁いで来てくれます。新しい五人家族の暮らしは約10年続きます。しかし息子たちも孫を残さないまま相次いで死んでしまうのです。ナオミはどうとう独りになってしまいました。生活の基盤を失って故郷を離れたナオミは、今度は異国の地で生活の保証まで失ったのです。

イスラエルの老女に残されたものは、働き手を失った借地と借家。そして自分と同じく、夫に先立たれたモアブの娘たち。この三人の未亡人にとって確かなことは、土地と家屋を借りるための担保がなくなった、ということです。遠くからそこを立ち退かなければならなくなった、ということです。なんと厳しい現実でしょうか。生活の基

盤も保証も失って、寄る辺なく立ち尽くす女性たちの人生が、そこにありました。

一つの時代の終わりは、もう一つの時代の始まりでもあります。三人の未亡人は新しい人生に足を踏み出してゆくことになります。それは一つの知らせから始まります。「イスラエルの神なる主が、その民を顧みて、食べ物をお与えになった」(飢饉は故郷を去った。主の御手によって終止符が打たれた)。そんな風の便りを耳にしたナオミは、故郷へ帰る決心をします。亡き夫や息子らと額に汗して切り開き、耕し続けたモアブの土地。嫁たちを迎えて一緒に暮らした思い出深い家屋、それを後にする彼女の胸中には、悲しみ痛みが渦巻いていたことでしょう。かつて故郷を離れる際は、夫と息子たちが頼りでした。しかし今、故郷に戻ったとしても、身寄りはいません。姑の決心は、嫁たちには途方もないことだったでしょう。イスラエルの老女は、身の周りの僅かな物を持って、空ろな足取りで、かつて来た道に戻り始めます。見るに見かねて、モアブの娘たちはついてゆきます。途中まで見送るためではありません。姑を独りにしておけないから、同行するのです。

姑の真意は、旅の途中で明らかにされます。恐らく、モアブとイスラエルの国境にさしかかった頃でしょう。ナオミは意を決したように、別れ話を切り出すのです。「わたしの娘たちよ、自分の里に帰りなさい(実の母の家に帰りなさい)。あなたがたは亡き息子らにもわたしにも、よく尽くしてくれました(本当にありがたう)。どうか、イスラエルの神である主が、あなたがたの真心に報いて、あなたがたの未来に慈しみを注いでくださいますように。それぞれに新しい嫁ぎ先を与えて、あなたがたに平安を得させてくださいますように」。姑は、嫁たちに別れを告げ、娘たちの新しい人生を、主の慈しみに委ねたのです。

それは同時に、イスラエルの老女が、モアブの娘たちの足手まといにならないよう、身を引くことでもありました。その真意が痛いほど分かった

嫁たちは、ひとしきりむせび泣くのです。やがて一人の嫁は、別れの口づけをします。姑は安心したことでしょう。しかしもう一人の嫁は、すがりついて離れようとしません。再三の勧めにも応じません。「お母さま、あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなことを言わないでください。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です」。そう言って、同行の意志を曲げないのです。その嫁の名は、ルツでした。

ナオミの心境は複雑だったでしょう。ルツが同行してくれれば、確かに心強い。しかし、彼女の存在は、モアブでの悲劇を思い出させる原因ともなる。女性ふたりの生活、身寄りのない老女と異国からきた未亡人の暮らし、それは困難に違いない。そんな鬱々とした思いを引きずったまま、ナオミは虚ろな姿で帰郷を果たします。「わたしをナオミ(喜び・楽しみ・快い)と呼ばないで、マラ(嘆き・怒り・苦い)と呼んでください。主がわたしを悩ませたのです。全能者がわたしを不幸に落としたのです」。姑に残されたものは、神への苦い思いと、異国の嫁ひとりでした。

この物語を、聖書は神の慈しみの歴史として記録します。生活の基盤も保証も失ったナオミに、飢饉は終わったとの知らせが届きました。あの風の便りこそ、神が人々を通して伝えてくださった慈しみです。神の慈しみは、生きる術を失った老女に里帰りの決心を促します。すると姑の心に、嫁たちへの慈しみが溢れ出します。モアブの娘たちの行く末を、イスラエルの神の慈しみに委ねて祈るのです。すると姑の祈りは即座に実現します。神の御心にかなう祈りだったからです。その証拠に、嫁のルツは自分の行く末を、姑の神・イスラエルの主の慈しみに委ねてしまうのです。このように神の慈しみは、人の慈しみとなって実現してゆきます。姑は嫁の明日のために祈りました。嫁は姑の今日のために尽くそうとしました。それは、主なる神の慈しみ、その実りにほかなりません。

(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 20章5節(一部)～6節

わたしは主、あなたの神……。

わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。

## 〈ねらい〉

ぼくたち私たちの毎日の生活には、いろいろなことがあります。でも神様は、そのすべてを働かせて素晴らしいことをしてくださるお方です。

## 〈展開例〉

「士師が世を治めていたころ、飢饉が国を襲ったので、ある人が妻と二人の息子を連れて、ユダのベツレヘムからモアブの野に移り住んだ。その人は名をエリメレク、妻はナオミ、二人の息子はマフロンとキルヨンといい、ユダのベツレヘム出身のエフラタ族の者であった。彼らはモアブの野に着き、そこに住んだ」(1-2)。

モアブ、そこは偶像礼拝の街です。基本的にユダヤ人は、モアブに移り住むことはありませんでしたが、飢饉の故に、その一家はそこに移り住まわざるを得ませんでした。ところがです。夫のエリメレクは子どもを残して死んでしまいます(3)。さらに、「息子たちはその後、モアブの女を妻とした。一人はオルパ、もう一人はルツといった。十年ほどそこに暮らしたが、マフロンとキルヨンの二人も死に、ナオミは夫と二人の息子に先立たれ、一人残された」(4-5)。結局、ナオミは、夫と二人の息子に先立たれて、一人残されます。これは、心の中にあった最後の希望まで取り上げられてしまったに等しいことでした。モアブに住む意味はもうありませんでした。そこで、ナオミは、心機一転ユダヤに帰ろうとします(6-7)。そこで、ナオミは二人のお嫁さんの将来を思って、別離を決意します(8-9)。それは、モアブの人であるこのお嫁さんたちがユダヤで結婚するのは

大変だという思いもあったでしょう。

しかし、ルツだけはけっして、ナオミの元を離れようとはせずに、ナオミと一緒にユダヤについて行ったのです(14)。「ルツは言った。『あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。わたしは、あなたの行かれる所に行き、お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神」(16)。

この固い信仰に促されて、ナオミはルツを説き伏せるのをやめて(18)、「二人は旅を続け、ついにベツレヘムに着いた」(19)と聖書は言います。ベツレヘムに帰って来たのです。

しかし、神様は不思議なことをなさいます。このベツレヘムでルツは、ボアズと再婚するのです。そして、何と!! その子孫から、救い主イエス・キリストが、ユダヤの街ベツレヘムでお生まれになられるのです。

もし、あそこでオルパと一緒にナオミを捨ててルツがユダヤに来なかったら、ボアズに会うこともなかったでしょう。そうすれば、イエス・キリストがお生まれになられることもなかったでしょう。ぼくたち、私たちの決断を通して、神様は素晴らしいことをしてくださるのです!!

## 〈お祈り〉

天の父なる神様、いろいろなことがあります。でも神様は、そのすべてを働かせて素晴らしいことをしてくださるお方です。あなたを信じて歩めますように。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



## 〈ねらい〉

ルツはナオミからすれば異邦人であったが、ルツがナオミの息子と結婚したことも主のみこころであり、主の慈しみによることであることを伝えたい。

## 〈ワーク〉

子どもたちと一緒にメッセージを思い出しながら聖書を開き、以下の問題に取り組んでください。

【Q1】 エリメレクとナオミとその二人の息子は、どうしてベツレヘムからモアブに移ったのですか（1節）。

1. 飢饉が国を襲ったから
2. 地震で家がつぶれたから

【Q2】 ナオミの二人の息子のお嫁さんの名前は、何ですか（4節）。

オ○パトル○

【Q3】 ナオミの夫エリメレクと二人の息子は、どうなりましたか（3～5節）。

（ ）しまった

【Q4】 夫と二人の息子が死んでしまったので、ナオミはどうすることにしましたか（6節）。

（ ）を去って、（ ）に（ ）ことにした

【Q5】 ナオミは、オルパとルツに別れを告げて、何と言いましたか（11節）。

「わたしの娘たちよ、（ ）なさい」

【Q6】 すると、オルパとルツはどうしましたか（14節）。

オルパはやがて、しゅうとめに（ ）の口づけをした。

ルツはすがりついて（ ）。

## 〈お祈り〉

神さま。いつも神さまを信じて、神さまに従う信仰を与えてください。

## 〈答え〉

【Q1】 1

【Q2】 オルパとルツ

【Q3】 死んで

【Q4】 モアブ、ユダ（国）、帰る

【Q5】 帰り

【Q6】 別れ、離れなかった





## 〈ねらい〉

神は夫と息子をなくして失意の中にあるナオミに、嫁のルツを主にある家族としてお与えになった。わたしたちもイエス・キリストにあって一つの家族であることを覚えよう。

## 〈展開例〉

- 問いに答えながら、分かち合いましょう。
- 「ナオミ」という名前にはどんな意味がありますか？（ルツ1:20を参照）
- ナオミという名前は日本にもありますね。「直美」なら、まっすぐで美しいという意味です。ヘブル語では、「ナオミ」は「わたしは喜び、わたしは楽しい、わたしは快い」という意味だそうです。
- ところが、ナオミはとても悲しい出来事あって「わたしをマラ（苦しみ）と呼んでください」と言うようになりました。それはどんな悲しみだったのでしょうか？
- ナオミは、夫と二人の息子とそのお嫁さん二人と一緒になかよく幸せに暮らしていました。ところが夫が亡くなり、まだ若い二人の息子まで亡くなってしまったのです。家族を亡くすことほど、つらく悲しいことはありませんね。そのうえ働き手を失って生活にも困るようになったのです。
- ナオミは二人の嫁に何と言いましたか？
- 嫁の一人オルパはナオミの勧めのとおり去っていましたが、ルツはどうでしたか？ 聖書を開いてみましょう。
- 「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れ

などと、そんなひどいことを強いないでください。……あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神」（ルツ記1:16）。

ルツはナオミにとって息子の嫁で家族の一人でしたが、それ以上に同じ神様を信じる神の家族だったことがわかります。その後も、ナオミとルツは助け合いながら生きていきました。

- 皆さんにはどんな家族がいますか？
- お父さん、お母さん、兄弟姉妹、おじいさん、おばあさん……
- イエス様はもう一つの家族について教えておられます。聖書を開いてみましょう。
- マタイ12章46-50節。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である」（49,50節）。
- ルツは真の神様を知らない家で育ち、結婚してから神様を知り信じるようになりました。どんな家に生まれても、イエス様を信じるならば神の家族に迎えられます。わたしたちは神様を父とし、イエス様を一番上のお兄さんとする兄弟姉妹です。教会はもう一つの家族です。わたしたちが助け合い、励ましあいながら歩んでいくことを神様は望んでおられます。

## 〈祈り〉

神様、わたしたちもイエス様の家族の一人としてください。教会のおともだち、先生と励ましあいながら歩むことができますように。



## 〈ねらい〉

神さまの導きの中にこそ、神さまの慈しみがあることを知る。

## 〈子どもカテキズム〉

問13 神さまの摂理のお働きとは何ですか。

答 今、私たちに働く、神さまの善いお力のことです。

神さまのお許しがないければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、神さまは私たちの父として私たちを守ってくださいます。

ですから、健康も病気も、嬉しいことも悲しいことも、すべてのことが私たちの役に立つよう働くのです。

## 〈展開例〉

○ナオミとその家族に起こった出来事を確認し、ナオミの置かれた状況を考えてみよう。

→ナオミの夫が死に、後に息子たちも相次いで死んだ。ナオミと息子の嫁たち（オルバとルツ）だけが残った。

→ナオミにとって子が亡くなり、孫もいないことは、深い悲しみであると同時に、社会的にも問題であった。家を継ぐ者がいないことはその家が神さまから見捨てられたと世間から見られることを意味していた。

○ナオミはモアブを離れ、ユダに帰ることにしたが、その決断の背景に主なる神の導きがあることを確認しよう。

→1節ではナオミたちが飢饉を理由としてユダからモアブに移住したことが記されていたが、「主

がその民を顧み、食べ物をお与えになったということ」を彼女はモアブの野で聞いた」(6) ことで、ナオミはユダに帰ることを決断したのである。

○ナオミから離別を告げられた二人の嫁、オルバとルツがそれぞれどのように行動したかを確認し、特にルツの信仰に注目しよう。

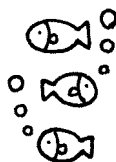
→オルバは「自分の民、自分の神のもとへ帰って」行った。一方、ルツは「あなたの民はわたしの民 あなたの神はわたしの神」と言い、ナオミと共にいることを選んだ。ルツの言葉は、異邦人であったルツが主なる神さまへの信仰に導かれている証しである。

○ユダのベツレヘムに帰ったナオミは町の人々に対して嘆きを口にした。ナオミの嘆きをどのように理解したらよいか一緒に考えてみよう。

→ナオミの嘆きには、「全能者がわたしをひどい目に遭わせた」、「わたしを不幸に落とされた」という言葉がある。一見すると不信仰と思われるような言葉であるが、そこにはすべては神さまの御手のうちにあるという信仰を表わしている。

○子どもカテキズム問13を参考にしつつ、悲しいことや苦しいことに遭った時、私たちはそれをどのように理解したらよいか一緒に考えてみよう。

→神さまは摂理の働きにおいて、私たちを守り支えておられる。だから、悲しいことや苦しいことの中にも、神さまの慈しみがあることを信じ、神さまに信頼することが大切なのである。



**〈落ち穂拾い〉**

弱い者が落ち穂を拾うことを認めることは、農主の自発的な憐れみから来るものではなく、憐れみ深い主の命令であり、レビ記19章に次のように規定されている。「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である」(レビ記19:9-10)。この規定は、レビ記23章22節、申命記24章19-21節でも繰り返し語られている。つまり、罪人の集まりである人間社会にあっては、権力や地位・財力のある者たちが、すべてを支配しようとする中にあって、主は取り残される貧しい者・寄留者・孤児・寡婦に目を向けてくださり、生きていくための必要を備えてくださる、深い憐れみをもっておられる神さまである。

**〈ルツの信仰〉**

一方、主によって規定されている律法といえども、その律法が守られるか否かは、その律法に従おうとする者の信仰によって左右されることとなる。従って、この憐れみを受けようとする者も、当然の権利として主張するのではなく、農主の側にも人間的な弱さがあることを理解しつつ、謙虚にこの憐れみにあずかることが必要とされた。

ルツは、異邦の民でありさらに夫を失った寡婦としての自分の立場をわきまえていた。そのことが、ルツがナオミに対して、「畑に行ってみます。だれか厚意を示してくださる方の後ろで、落ち穂を拾わせてもらいます」(2)と語る言葉に表れており、ルツの信仰者としてのへりくだりと謙そんを理解することができる。

**〈ボアズの信仰〉**

一方、農主としてのボアズはどうであったか。ボアズが農夫たちに対して「主があなたを祝福してくださいますように」と語ると、農夫たちは「主があなたを祝福してくださいますように」と返答する(4)。ここに、ボアズの主への敬虔な信仰と人々からの尊敬を見てとることができる。

**〈神の摂理〉**

ルツとボアズ、二人の信仰者が出会う。これは偶然ではない。3節の「たまたま」という訳語は、偶然と取られても仕方がないが、口語訳では「はらかずも」である。また、4節においても訳出されていないが、「その時」(口語訳)、「ちょうどその時」(新改訳)と語られている。

ルツがボアズの畑に行ったことは、人が意図してのことではなかった。しかし、主は、御自身の救いのご計画を成し遂げるにあたり、時と場所、人を備えてくださり、落ち穂を拾いに行った異邦の娘ルツが、ボアズと出会う時をお与えくださった。

この後、ボアズとルツは結婚し(4:11-12)、子どもが与えられる(4:13)。ボアズの子オベド、オベドの子エッサイ、エッサイの子ダビデであり(4:17)、ダビデの子として救い主イエス・キリストが与えられていく(マタイ1:1-6)。

ルツは、モアブ人の女として、最初の結婚において夫に先立たれ寡婦となった。しかし、主はルツを憐れみ、信仰者として救いに入れられるのみならず、ボアズとの結婚により、アブラハム、ダビデ、イエス・キリストに至る系図に名を残す祝福をお与えくださった。(辻 幸宏)

※第25号に掲載されたものを再掲載しました。

テキスト ルツ記 2章 (～4章)  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13

### 〔単元のねらい〕

「信仰者として生きる異邦の女ルツを、神は憐れまれた。神の憐れみに生きよう」という単元目標のどこに、ねらいを定めるべきか。落穂を拾うため畑に出かけた異邦人、収穫を見守るため町から下ってきた畑の主。二人を折りよく出会わせた神。モアブの女に破格の厚意を示したボアズ、イスラエルの有力者に感謝の真心を返したルツ。彼に憐れみの心を与えて、彼女にその真心を受け取らせた主。この神の慈しみこそ、ねらい目であろう。

## 「真心の伝わるとき」

紀元前11世紀、ダビデ王誕生前、イスラエルの地域一帯は飢饉に見舞われました。ベツレヘム(パンの家)と呼ばれた町から、みるみるパンが消えてゆきました。食糧調達のため人々は、遠くの町まで出かけてゆかなければなりませんでした。畑仕事を失った労働者の中には、先祖伝来の土地を売り払い、外国に移り住む家族もありました。しかし、何とか踏み留まって、土地と家屋を守ることができた人もいました。その中の一人にボアズという男がいたのです。ボアズとは「そこに力がある」。その名の通りの「有力者」。尊敬に値する人、富める人でした。

やがて飢饉は去り、彼の所有する畑に雇い人たちが戻り、大麦の穂が実ります。そんなある日のこと、ベツレヘムに一つのニュースが駆け巡ります。「ナオミさんが帰ってきた。ご主人と二人の息子、四人家族で外国に移り住んだ、あのナオミさんが、独りで戻ってきた。ご主人も息子たちも他界されたい。それと、モアブの女が一人、一緒だそう。噂ではナオミさんの家に嫁いできた娘らしい。未亡人になっても、嫁はずっと姑を離れず、一緒に暮らすために、母の家・父の国を捨てて、見ず知らずのイスラエルまで、やって来たそう」。

そのニュースを耳にするや否や、ボアズは居ても立ってもいられなくなります。「ナオミさん、ご主人と二人の息子」。そうです。その家族は彼

の親戚だったのです。「移り住んだ外国で、主人と息子に先立たれた」。そうなら、ほおってはおけない。何と気の毒なことか、何とかしなければ、どこに身を寄せておいでなのだろう。「ナオミさんと一緒にいてくれたモアブの娘」。そうだ、彼女はわたしの身内の恩人だ。「姑を離れなかった嫁、彼女もまた未亡人」。そうなら、身内同然ではないか。何と健気な人だろう。きっと立派な女性に違いない。

そんな思いを抱きながら、刈り入れの始まった自分の畑地へ、ボアズは出かけて行きます。畑に着き、雇い人たちに挨拶すると、見知らぬ女が落穂を拾っている姿を見かけます。落ち穂拾いは、貧しい人々やみなしご、未亡人や異邦人のための救済手段でした。畑の隅は刈り取らないで、落ち穂もそのまま残しておくこと。それがイスラエルの掟でした。畑の主ボアズは雇い人の頭に尋ねます。「その若い女は誰の娘か(どの男に属する女か、誰の妻か)」。すると頭は主人に答えます。「あの人は、ナオミさんと一緒に戻ったモアブの娘です」。そう聞いて、ボアズは驚いたに違いありません。とても偶然とは思えない出来事。それは、気にかかっていた身内の恩人との、不思議な出会いでした。

雇い人の話では、その娘は、思っていた通りの「立派な女性、健気な人」でした。姑との暮らし、未亡人ふたりの生活を始めるため、落ち穂拾いに

来たというのです。モアブの女がイスラエルの掟を頼りに、恭しくも毅然として願い出たそうです。願いを聞き入れた雇い人の頭は彼女の働きぶりに尊敬の念を抱いたようです。朝からずっと立ち通しで、腰を曲げたまま働き続けて、気がつけばもうお昼どき。雇い人たちはそれぞれ弁当を開く。しかし彼女には、飢えを満たす食糧も、渴きを癒す水もない。

そのときです。ポアズはどうしても抑えきれなくなって、思わず声をかけるのです。「わたしの娘よ（わたしの畑に来た身内の恩人よ）、よく聞きなさい。よその畑に落ち穂を拾いに行くことはない。（姑にすがり着いて離れなかったように、今は）ここから離れることなく、わたしの所の女たちと一緒にいなさい。刈り入れをする畑を確かめておいて、女たちに着いて行きなさい。若い者には邪魔しないように命じておこう。喉が渴いたら、水がめの所へ行って、若い者が汲んでおいた水を飲みなさい」。ポアズは、身内の恩人に、溢れんばかりの真心を伝えたのです。

畑の主から声をかけられた落ち穂拾い、ルツという名のモアブの娘は、顔を地につけ、ひれ伏しました。彼女の驚きと恐れは無理からぬことでした。見ず知らずの女にいきなり「わたしの娘よ」と、まるで身内のような言い方で声をかける男。行く当てのない異邦人、寄る辺のない未亡人と知りながら、情けをかける町の有力者ポアズ。その優しい言葉の背後には、恐ろしい下心があるやもしれない。彼女は用心深く、彼の真意を探るために、恐る恐る尋ねるのです。「よそ者のわたしにこれほど目をかけてくださるとは。厚意を示してくださるのは、なぜですか（あなたの瞳にわたしへの御厚意をお見受けますが、その理由は何ですか）」。

ルツの警戒ぶりを見て、ポアズは我に返り、冷静さを取り戻して、訳を話します。「主人が亡くなった後も、姑に尽くしたこと、両親と生まれ故郷を捨てて、まったく見も知らぬ国に来たことなど、何もかも伝え聞いていました。どうか主が、あなたの行いに（真心に、慈しみに）豊かに報い

てくださるように。イスラエルの神なる主が、その御翼のもとに逃れて来たあなたに、十分に報いてくださるように」。ポアズが示した真心は、ルツの真心（身内に尽くしてくれた慈しみ）への恩返しのもりだったのです。

そのときです。今度は、ルツの方が抑えきれなくなって、思わず声をかけるのです。「わたしの主よ（わたしの姑の神様が導いてくださった畑の主人よ）、どうぞこれからも、ご厚意を示していただきますように。あなたのはしための一人にも及ばないわたしですのに、心に触れる言葉をかけていただいて、本当に慰められました」。ルツは、ポアズの真心に、心からの感謝を返しました。畑の主人の真心が、落ち穂拾いの心に伝わったのです。

「真心」そして「慈しみ」と訳される言葉はヘセド。その意味内容は、抽象的な感情ではありません。むしろ具体的な行動です。ある人が誰かのためになす行動です。そうしなければ、相手の生存が危ぶまれる状況の中でなされる行動です。しかも、そうすることがもっともふさわしい者がとるべき行動なのです。

畑の主人が落ち穂拾いに伝えた真心には、正にそのような行動が伴いました。ポアズはルツを食事に誘って、パンと炒り麦を与え、腹いっぱい食べさせます。彼女が再び働き始めると、雇い人たちに命じて、麦束をわざと落とさせ、彼女に好きなだけ拾わせるのです。

畑の主人と落ち穂拾い、町の有力者と寄る辺なき人、イスラエルの男とモアブの女。さまざまな違いを乗り越えて、何としても身内の恩人に報いようとしたポアズ。彼との距離を見極めながら、どこまでも姑との暮らしを支えようとしたルツ。彼女にそのような慈しみを保たせて、彼にあのような真心を抱かせたのは、神です。二人を同じ日時に出かけさせ、同じ場所へと導いたのも、イスラエルの主です。このように、神の慈しみは、人と人との真心となって、この地上に実を結んでゆくのです。 (二宮 創)

---

〔今週の暗唱聖句〕 詩編17編 7節（一部）～8節

慈しみの御業を示してください。

瞳のようにわたしを守りあなたの翼の陰に隠してください。

---

## 〈ねらい〉

神様は、有名な人たちだけではなくて、ぼくたち私たちのような小さな者たちのことも覚えて、一番良いことをしてくださるお方であること学びたいと思います。

## 〈展開例〉

ルツとナオミは、ユダヤの地に帰りました。亡くなった御主人の親せきの、ボアズのもとに身を寄せました。

「モアブの女ルツがナオミに、『畑に行ってみます。だれか厚意を示してくださる方の後ろで、落ち穂を拾わせてもらいます』と言うと、ナオミは、『わたしの娘よ、行っておいで』と言った。ルツは出かけて行き、刈り入れをする農夫たちの後について畑で落ち穂を拾ったが、そこはたまたまエリメレク一族のボアズが所有する畑地であった」(2-3)。

そこに、ボアズがやってきます。「ボアズがベツレヘムからやって来て、農夫たちに、『主があなたたちと共におられますように』と言うと、彼らも、『主があなたを祝福してくださいますように』と言った」(4)とありますから、ボアズという人もたいへん信仰深い人であることが分かります。そんな彼の目に、落ち穂拾いに来ていたナオミが留まりました。「ボアズが農夫を監督している召し使いの一人に、その若い女は誰の娘かと聞いた。召し使いは答えた。『あの人は、モアブの野からナオミと一緒に戻ったモアブの娘です』」(5-6)。

ここで神様は、本当に不思議な出会いを与えて

くださいます。ナオミとボアズが出会うのです。

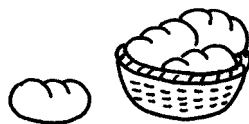
当時の世界は、収穫物を全部刈り取ってしまうのではなくて、貧しい人々のために一部を残しておかなければなりません。そしてそれを拾うことを「落ち穂拾い」と言いました。こうして神様は、強く豊かな人だけではなくて、弱く小さな者たちのことも覚えていてくださって、養ってくださる、そんな優しい心をもったお方であることを人々は知ることができたのでした。

ルツがその落ち穂拾いのために、ボアズの畑に行ったのは、ルツにとって「たまたま」(3)だったと聖書は言っています。ルツが何かを意識して行った訳ではありませんでした。ボアズもそこにルツが来ていることを知って行った訳ではありませんでした。しかし、神様は、すべてを知っておられます。その時も場所もすべてを備えて、神様はご自分の働きを進めておられるのです。

その後、ルツとボアズは結婚します(4:11-12)。そして、子どもが生まれます。そしてその子は、ダビデ王の先祖となり(4:13-17)、そこからずっと後にイエス・キリストがお生まれになられたのです。神様は、すべてのことを働かせて、実に不思議なことをしてくださるのです。一番良いことをしてくださる神様を信じていこうではありませんか。

## 〈お祈り〉

天の父なる神様、そのすべてを働かせて、一番良いことをしてくださるお方です。あなたを信じて歩めますように。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



## 〈ねらい〉

信仰者として生きる異邦人の女ルツは落穂を拾うため畑に出かけ、イスラエル人の畑の主のボアズは収穫を見守るために町から下ってきた。二人が出会ったのは主の御心であり、この二人が結婚し、子どもが与えられ、後のダビデに続き、救い主イエス・キリストへとつながっていくことを伝えたい。

## 〈ワーク〉

子どもたちと一緒にメッセージを思い出しながら聖書を開き、以下の問題に取り組んでください。

【Q1】モアブの女ルツは、ナオミに何と言いましたか (2節)。

「( ) に行ってみます」。「( ) を拾わせてもらいます」

【Q2】ルツは出かけて行き、畑で落ち穂を拾いました。それは誰の畑でしたか (3節)。

エリメレク一族の( )の畑

【Q3】ボアズはルツを見て、農夫を監督している召し使いの一人に誰の娘かと聞きました。誰の娘でしたか (5節)。

( ) の娘

【Q4】ボアズはルツに何と言いましたか (8節)。

「わたしの娘よ、よく聞きなさい。( ) の畑に( ) を拾いに行くことはない」

【Q5】ボアズがルツに目をかけたのは、なぜだったのでしょうか (10,11節)。

主人が亡くなった後も、( ) に尽くしたこと、両親と生まれ( ) を捨てて、まったく( ) 国に来たことなど、何もかも伝え聞いていたから。

【Q6】ボアズはルツに何と言いましたか (12節)。

「どうか、( ) があなたの行いに豊かに報いてくださるよう。イスラエルの神、主がその( ) のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるよう」

【Q7】ルツはボアズに何と答えましたか (13節)。

「わたしの主よ、どうぞこれからも( ) を示してくださいますように」

## 〈お祈り〉

神さま。ルツさんのように素直な気持ちで神まを信じることができるよう。そしてボアズさんのように、困っている人を助ける優しい心を与えてください。

## 〈答え〉

【Q1】畑、落ち穂

【Q2】ボアズ

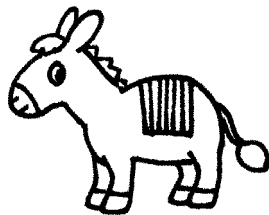
【Q3】ナオミ

【Q4】よそ、落ち穂

【Q5】しゅうとめ、故郷、見知らぬ

【Q6】主、御翼

【Q7】厚意



## 〈ねらい〉

ルツとボアズ、この二人の出会いを通して働かれる神様の救いのご計画を知り、今を生きる私たちもこの神様の救いのお約束の中に導かれていることを知る。憐れみ深い神様を信じて生きる。

## 〈展開例〉

1. 先週のお話（ルツ記1章）から、ナオミとルツの物語を復習。

○どんなことを覚えているかな？

先週お休みした子どもがいたらもう一度お話を簡単に繰り返す。

2. 今朝の礼拝メッセージのお話を確認しながら分級展開をする（ルツ2章）。

○ボアズの畑に、落ち穂を拾いに行ったルツ。二人の出会いのお話、どんなふうに思ったかな？それぞれ子どもたちの感想を聞いてみる。

①神様が二人を出会うように導いてくださった。

②ルツは、ナオミが話すことをちゃんと聴いて従った。

③ボアズもルツもお互いを好きだった？

④最初は悲しかったけど、みんな幸せになって良かったね。

○この後、ボアズとルツは結婚し（4章）子どもが与えられた。

○ボアズとルツのお話を通して神様が私たちに教えてくださっているのは、やがて救い主のお誕生へと繋がる神様のご計画があったこと。

ボアズの子 オベド

オベドの子 エッサイ

エッサイの子 ダビデ

そして、ダビデの子として救い主イエスさまが誕生する（マタイ1章）。

神様はルツを祝福して下さり、イエス・キリストの系図に名前を残す祝福を与えてくださった。

## 〈祈り〉

憐れみ深い神様 救い主イエスさまが、お約束どおりに誕生して下さったことを心から感謝します。





## 〈ねらい〉

神さまの慈しみは、人の心を導かれ、人の真心となって、私たちに注がれることを覚える。

## 〈子どもカテキズム〉

問13 神さまの摂理のお働きとは何ですか。

答 今、私たちに働く、神さまの善いお力のことです。

神さまのお許しがなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、神さまは私たちの父として私たちを守ってくださいます。

ですから、健康も病気も、嬉しいことも悲しいことも、すべてのことが私たちの役に立つよう働くのです。

## 〈展開例〉

○ルツ記の記述は、ルツが異邦人モアブの女であることを繰り返し強調している。そのことがどういう意味を持つか考えてみよう。

→異邦人の女性であっても、神さまはルツに信仰を与えられた。

ナオミの夫の親戚であるボアズは、ルツが異邦人の女性であることを知りながらも、ルツに対して厚意を示した。

これらすべてに神さまの導きがあることを聖書は教えている。神さまの慈しみは、人の心にも働き、すべてを導かれるのである。

○ルツとボアズが出会い、二人は結婚することになった。二人の出会いや結婚に至るまでの経緯の中にも神さまの導きがあることを確認しよう。

○ボアズと結婚したルツが男の子を産んだ時、人々がナオミに言った言葉(4:14-15)と、1章20-21節のナオミの嘆きと比べ、神さまの慈しみについて考えてみよう。

→ナオミの嘆きは、「全能者がわたしをひどい目に遭わせた」、「わたしを不幸に落とされた」というものであった。しかし、全能者である主なる神は、ナオミを見捨てることなく、魂を生き返らせてくださった。

○ルツ記の最後には、ルツの子ども以降の系図が記されている。それがどういうことを示しているか一緒に考えてみよう。

→系図はイスラエルの偉大な王となるダビデに至っている。マタイによる福音書1章には、この系図がイエス・キリストにまで至ることが記されている。ナオミとルツに与えられた神さまの不思議な導きには、すべて神さまのご計画があったことがわかる。

私たち人間の目から見て悲しいことや苦しいことがあったとしても、その中には神さまの慈しみがあり、神さまのご計画があることを覚えよう。



使徒言行録2章に記されたペトロの説教には、ヨエル書3章1～5節の預言が含まれる。「聖霊が注がれる」約束は、ヨエルばかりではなく、エゼキエルやゼカリヤなどの預言者からも告げられていた。ゼカリヤ書12章10節によれば、聖霊がくだるとき神の憐れみの心が人に宿り、父なる神の悲しみ、独り子を失う悲しみが人に生じる。これは悔い改めに通じる。こうして「霊が注がれる」ことは、旧約聖書では人間の救いに関わる重大な意味をもつ。

この「霊の注ぎ」が起こるのは神が定めた「主の日」である(3:4)。ヨエルは「イナゴの日」について語るが(1:4以下)、これは出エジプト記10章にあるエジプトに下された災いと結びつく。預言者はパレスチナの農民たちが経験した「いなご」の恐怖を語りながら、実際には「いなご」を喩えとして、さらに大きな災いである「戦争」の悲惨を語る(1:6)。「いなご」がすべての農作物を食べ尽くしてしまうように、先の戦争も、すべてのものを破壊し尽くして何も残さなかった。それは、血と火と煙の日々であった。そうした大きな悲惨の中でイスラエルの民衆は信仰を失う危機を経験した。

ヨエルを始めとする旧約の預言者たちが語り伝えたのは、そこにある神の裁きである。必ずしも罪人だから悲惨な出来事にあうのではないことはヨブ記が問題にしている。義人の苦しみがある。けれども、イスラエルの民にとって必要だったのは、彼らが神に背き、神の言葉をもっていても従い得なかったという自らの罪を知ることであった。預言者たちは、その背きを包み隠さず述べて、神の裁きを明らかにした。イナゴの恐怖や戦争による破壊という民の経験に訴えて真剣に立ち返りを求めて説教した。

そして、預言者は審きばかりではなく悔い改めを語った。「立ち返る」ことが預言者の告げた福音となる。その「悔い改め」を導くのが「霊の注

ぎ」である。人の心は石のように硬くて御言葉は外からは容易に入り込めない。契約の記念碑として立っているだけでは効力はなく、霊によって人の心に注ぎ込まれなくてはならない。そして、神がそれを果たすべく、預言者を通して語った。神の側から働かれなければ悔い改めは起こらない。

預言者たちの言葉の中でペトロがヨエル書を選んだのは、ヨエルの告げた聖霊の注ぎはことさら気前のよいものだったからであろう。「わたしはすべての人にわが霊を注ぐ」とある。老いも若きも、男も女も、奴隷も自由人も、すべての壁を取り払って神が霊を注がれる、という約束である。この「すべての人」という広がり、預言者にとっては選民イスラエルに限られていたであろうが、使徒の時代に至って文字通り「全国民」という広がりをもった。神の言葉を語り伝えるところ、異邦人もまた悔い改めて神に立ち返ったからである(コロサイ3:11のパウロの言葉を参照)。

ヨエルの預言は、神の力によって人々が神に立ち返ることを告げた。この力が及ぶときには、もはや預言者であるか、ただの人かの区別は無いらぬ。誰であろうと心に言葉を刻み込まれて神を見上げるようになる。その刻み込まれた言葉が口について出るとき、それは祈りとなり、賛美となる。教会の初めの頃は、まだ異言や預言という不思議な現象もあったようだが、重要なことは、神の言葉が人に理解できる言葉で証しされるようになったことである。

教会を生み出す力のもとはいつも上からやってくる。それは聖書の言葉を、書かれた文字に閉じ込めてしまう私たちを解放し、内側から御言葉を適用してくださる。「有効召命」という教理は、そうした神の働きを指す。信仰による救いは、恵みにほかならないことを教会にしっかり繋ぎとめている教理である。私たちはその「有効召命」によって救われる。(牧野信成)

テキスト ヨエル書 3章  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

### 〔単元のねらい〕

聖霊降臨祭、おめでとうございます。この日の礼拝式もまた、この祝福の挨拶が、礼拝者たちを満たしますように。使徒たちは、自分たちの体験を、聖霊降臨の預言の成就として理解し、証します。ここでは、教会が神の契約（約束）のもとにあり、旧約の教会と連綿と繋がるものであることが示されます。また、主イエス・キリストの救済のお働きによって、旧約の「域」を自由の聖霊が乗り越えさせ、イエス・キリストを信じるすべての者を神の民とすることが示されました。そのようにして、新約の教会が神のものであり、神の霊の実りであることが示されました。教会の礼拝式において、この霊が信じる者に注がれていることを証しし、共に喜びましょう。

## 「聖霊が注がれている！」

聖霊降臨祭、おめでとうございます。聖霊降臨祭とは、キリストの教会の誕生を祝うお祭りです。

この日、神さまの霊、イエスさまの霊である聖霊なる神さまが、旧約聖書の約束通り、イエスさまの約束通り、信じる人たちの上に注がれました。お弟子さんたちは、復活されたイエスさまから、「エルサレムから離れないで、わたしが語った父なる神さまの約束を待ちなさい」と言われていました。それは、聖霊によって洗礼が施されるというものでした。洗礼において、頭の上に水が注がれます。聖霊の洗礼とは、水が注がれることが目に見えて確かであるように、しかも、その水の洗礼があらわす「事柄そのもの、そのこと」が起こるということです。つまり、神さまの霊が注がれ、わたしたちを満たし、わたしたちを包み込むのです。それが、まさに弟子たちに実現したのです。

しかもその約束は、旧約聖書の中で、いくつも記されているものなのです。教会の誕生、聖霊の降臨は、突然のことではなく、神さまがちゃんとご計画してあったことなのです。そのときが、まさに来たのです。

それは、イエスさまが十字架について、復活して、天の父なる神の右につかれたからです。もう、準備は全部整ったのです。神さまは、聖霊を注い

で、イエスさまを信じさせてくださいます。イエスさまの救いの御業を、ほくたちわたしたちに当てはめてくださって、罪を赦し、神さまの子としてくださるのです。

さて、今朝、読んだのはヨエル書でした。これは、聖霊を受けて力を受けた使徒ペトロが、集まって来た人々に、イエスさまの福音を説教したとき、引用した箇所です。

ペトロは、集まって来た人たちに、「今は、終わりの日」だと言います。終わりの日とは、神さまの救いが全世界にもたらされた時代ということです。つまり、イエスさまが十字架にかかって復活されたことで、このイエスさまを信じれば、いつでも誰でもどこでも、救われることができる時代ということです。そして、地上に、イエスさまを信じる人たちが、一つに結ばれて教会をつくることのできる時代です。つまり、神の国がこの地上に現れた、この地上に到来したということです。それが終わりの日です。その時には、聖霊は、男の人でも女の人でも、老人でも子どもでも、神さまを信じる選びの民の誰にでも注がれるのです。

それなら、今朝、聖霊は、ほくたち私たちに注がれているのでしょうか。今朝、天から激しい風

が吹いてきたような音も、舌のようなものが分か  
れ分かれに現れ、ひとり一人の頭の上に留まっ  
てもいませんね。

確かに、このような不思議な現象が起こったの  
は、一度限りです。けれども、大切なことがあ  
ります。聖霊が注がれた人には、必ず、それがは  
っきりわかる時が来るということです。力を受け  
るのです。どんな力でしょうか。それは重いもの  
を持ちあげる体の力ではありません。

それは信仰の力。イエスさまを信じる信仰が強  
まるということです。

イエスさまを信じ、従う心が強まります。

イエスさまを愛し、隣人を愛する愛が強まりま  
す。

イエスさまを喜び、生きていく力が強まります。

イエスさまのことを、友だちに伝える力が与え  
られ、強まります。

お祈りしたいと思うようになります。お祈りが  
聴かれているという確信が強まります。

イエスさまを信じていることや、教会に行っ  
ていることを、たとえバカにされても、負けない力  
が湧いてきます。負けないというのは、そのお友  
だちに勝つこと、負かしてしまうことはありません。  
たとえバカにされても、教会に行くことが  
嬉しくて、お友だちを憎まない心が湧いてくるこ  
とです。

数えたらきりがありません。でも、結局は、聖  
霊の力とは、ぼくたち私たちの信仰の眼が開かれ、  
信仰の耳が開かれ、イエスさまのことがよくわ  
かってくるということです。聖書を読んで、説教  
を聴けば聴くほど、イエスさまのことが好きに  
なってくるのです。

あなたはイエスさまを信じていますか。大好き  
ですか。それなら、あなたも聖霊の力を受けてい  
ます。なぜなら、そのような思いは、ぜ～んぶ、

もともと自分の持っていた思いや力ではないから  
です。イエスさまを信じたおかげで、聖霊なる神  
さまのお働きのおかげで、与えられたのです。神  
さまからの贈り物です。天からの、上からの祝福  
なのです。

ぼくたち私たちのこの教会も、この聖霊が注が  
れたおかげで、教会として始まることができました。  
聖霊なる神さまが今朝、このときも、この礼  
拝式を通して天から注がれているので、ここに教  
会としてあるのです。今、礼拝をささげること  
もできるのです。聖霊の注ぎがなければ、教会は存  
在しません。教会は教会になれません。教会の生  
命は、この聖霊のお働きが豊かにあるということ  
です。そして、ぼくたち私たちは、この聖霊なる  
神さまの神殿で礼拝しているのです。だったら、  
ぼくたち私たちにも聖霊が注がれているはずで  
す。

それなら、もっと豊かに受けるためには、どう  
すればよいのでしょうか。

それはお祈りです。集まって、祈ることです。  
最初のお弟子さんたちのように、イエスさまの命  
じられた通り、一つ場所に集まって、心を一つに  
して、お祈りしましょう。もっとも大切なことは、  
日曜日、教会堂に来て、皆と心を一つにして礼拝  
をささげることです。そうすれば、少しずつ、あ  
るときには自分でもびっくりするくらい、イエス  
さまへの強い、熱い思いが、心に溢れて来ます。

今、先生の上に、目には見えませんが、聖霊が  
豊かに注がれています。だから、イエスさまをお  
伝えすることができるのです。そして、皆に、一  
人一人の上に、神さまのいのち、聖霊なる神さま  
が注がれています。イエスさまのこと、もっと好  
きになったでしょう？ 心から神さまに感謝いた  
します。 (相馬伸郎)

---

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 2章4節

すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

---

## 〈展開例〉

みなさんは、今までやったことのないことに挑戦したり、大勢の人の前で何かをしたりしたことがありますか？ 特に初めてのことを自分一人でやってみる時には勇気がいりますね。知らない場所に一人で出かけたり、発表会でピアノを弾いたり、運動会でかけっこをしたことがある子もいるでしょう。そんな時はどんな気持ちでしたか？ ドキドキして失敗したらどうしよう、なんて心配な気持ちになることもあるかもしれません。でもそんな時、お父さんやお母さんやお友だちなど、大切な誰かが近くで見えてくれたり、「がんばれ！」と応援してくれたりすると、勇気や力が湧いてきますね。実際に力を半分「はいどうぞ」と分けてもらったわけでもないのに、不思議ですね。でも目には見えないけれど、きっと見えない力が働いたのですね。

イエスさまのお弟子さんたちも同じでした。お弟子さんたちは、イエスさまが天に帰られていなくなってしまう後、「自分たちだけでどうしよう」と心配でたまりませんでした。それで、みんなで集まりお祈りをし、これからのことを相談していました。すると突然、強い風の吹くような音がして、お弟子さんたちの頭の上に、ゆらゆらと炎のようなものが現れたのです。すると急に力が湧いてきて、何だがとても元気になり、何でも出来そうな勇気が湧いてきたのです。ちょうど、みんなが誰かに応援してもらった時のようにです。そして、お弟子さんたちは外に出て、大きな声で

神さまのことを話し始めました。不思議な力が働いて、いろいろな国の言葉で神さまのこと、イエスさまのことを話すことが出来たのです。お弟子さんたちの心は何だか嬉しくて、元気で喜びでいっぱいでした。

なぜ急にそんな力が出来たのでしょうか？ 実はそれは、ひとりひとりに降った炎のようなものが神さまの霊だったからです。弟子のペトロさんが言いました。「ずっと昔から神さまは、見えない神さまが私たちみんなのところに来てくださる、と約束してくださっていたのです」と。

霊は目には見えませんが、確かに働いています。眠ることもなく休むこともなく何でもお出来るようになる素晴らしい神さまがいつも一緒にいてくださり、ずっと働いて力を与えてくださるのです。こうして、お弟子さんたちが神さまをたくさんの人に伝えて働いたおかげで、世界中に神さまのことが伝わっていきました。

今みなさんが聖書の話聞き、神さまにお祈りしている教会が出来たのも、この日のことがあったからなのです。この日のことをペンテコステといいますが、教会が生まれたお誕生日とおぼえましょう。イエス様を信じる私たち（おとなでも子どもでも、だれでも）が教会で集まる時、毎日お家や幼稚園で過ごしている時など、どんな時にも神さまが霊を与えられ、力を注いでくださっていることを覚えましょう。お弟子さんたちのように勇気と力が湧いてくるでしょう。

※次ページへ続く



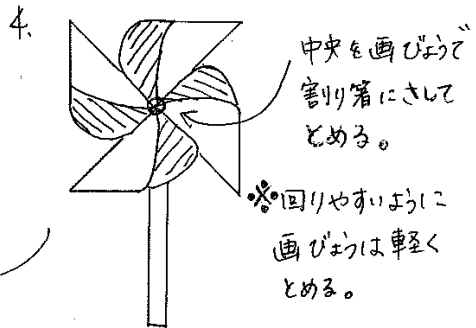
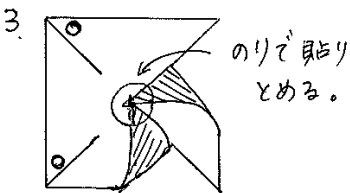
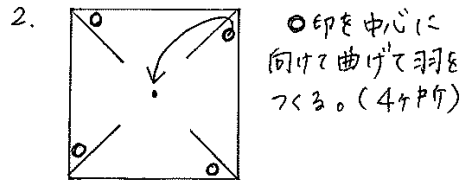
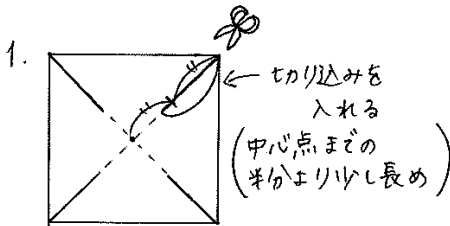
## 〈やってみよう・遊びのアイデア〉

### 風車をつくらう

聖霊降臨時の激しい風の吹いてくる音をイメージしながら、風で回る風車を作って遊ぼう。この日は花の日でもあるので、花を届けに行く場合には、その花と一緒に作った風車をプレゼントしてはどうだろう。

#### ○作り方

1. 正方形に切った色画用紙（折り紙でも良い）の四ツ角から中心に向けてハサミで切り込みを入れる。
2. 羽を一枚おきに中心に向けて曲げて、中央にのりでとめる。
3. 割り箸の先に風車の中心を画びょうで止めて固定する。



できあがったら  
みんなと回して遊ぼう!!

## 〈ねらい〉

キリストの教会では、今日は特別なお祝いの日ということをお礼拝で教えられました。それはあなたにとっても特別な日ということです。あなたのお誕生日をお祝いするように、この日はキリストチャンにとってとても嬉しい日です。このことをおぼえてあなたの喜びの日となるように祈りましょう。

## 〈ワーク〉

聞いたお話を思い出してワークをしましょう。( )の中の正しいものに○をしましょう。Q7には自分の名前を入れてください。そして、一緒にお祈りしましょう。

【Q1】聖霊降臨祭とは、(あなたの誕生・キリスト教会の誕生)を祝うお祭りです。

【Q2】復活されたイエスさまは、お弟子さんたちに(エルサレムから離れないで・エルサレムから逃げ出して)、神さまの約束を待ちなさいとおっしゃいました。

【Q3】イエスさまがお約束された(神さまの霊・井戸の水)が注がれました。

【Q4】聖霊を注がれた人は、(たくさんのお金・神さまの力)を受けました。

【Q5】聖霊を受けた人は、(重い物を持ち上げる力・イエスさまに従う心)が強くなります。

【Q6】イエスさまを信じるすべての人は、聖霊の力を受けることができます。聖霊の力を受けた人が持つことができるものを、下から選んで○でかこみましょう。

- ・イエスさまを信じ従う心
- ・けんかしたくなる心
- ・お祈りしたいと思う心
- ・イエスさまやお友だちを愛する心
- ・自分勝手なふるまい
- ・いじわるな気持ち
- ・イエスさまを友だちに伝えたい心
- ・悪い言葉を使いたくなる気持ち
- ・罪を憎む心

【Q7】イエスさま、( )がもっと豊かに聖霊を受けて、罪が赦され、神の子として成長するように助けてください。

## 〈お祈り〉

天のお父さま。イエスさまがお約束された聖霊を受けるために、熱心に祈ることができるようにしてください。お友だちや家族を愛する心を与えてください。

## 〈答え〉

【Q1】キリスト教会の誕生

【Q2】エルサレムから離れないで

【Q3】神さまの霊

【Q4】神さまの力

【Q5】イエスさまに従う心

【Q6】イエスさまを信じ従う心、お祈りしたいと思う心、イエスさまやお友だちを愛する心、イエスさまを友だちに伝えたい心、罪を憎む心



## 〈ねらい〉

わたしたちは今、聖霊の働きの中で、聖霊に守られて生きていること、聖霊が具体的にわたしたちと教会を助けてくださることを知る。

## 〈展開例〉

1. 旧約聖書の中で約束されていた聖霊旧約聖書の中で、神様は、聖霊を与えることを約束しておられます。旧約聖書を開いて確認してみましょう。

- ・イザヤ書32章15節
- ・エレミヤ書12章10節
- ・エゼキエル書39章29節
- ・ヨエル書3章1, 2節

神様は、わたしたちに聖霊を与えてくださることを、ずっと昔から約束しておられました。

## 2. 聖霊の働き

① 聖霊はイエス・キリストの霊です。

→イエス様は、復活した後天に昇りました。イエス様は今天におられます。それで、イエス様は、地上にいるわたしたちを助けるために、聖霊を与えてくださいました。

② 聖霊は、わたしたちのためにどんな働きをしてくださるのでしょうか？

→聖書の言葉を通して、私たちに神様のことを教えてください。

→イエス様を信じる心、神様を愛する心を与えてください。

→わたしたちの心を、自分中心の思いから、神様に従いたいという思いに変えてくださ

います。

→わたしたちが、神様と一緒に生きられるように守ってくださいます。

③ 聖霊は、教会のためにどんな働きをしてくださるのでしょうか？

→教会は今まで、たくさんの迫害を受けましたが、教会がなくなった時代はありません。聖霊は、いつの時代も教会を建て、守り、福音を伝える使命を果たせるように、助けてくださいます。

→特に、主の日の礼拝の場に聖霊が共にいてくださり、礼拝を祝福してくださることを覚えましょう。

## 〈暗証聖句〉

「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。」

使徒言行録2章4節

この暗証聖句は、教会を助けてくださる聖霊のお働きです。聖霊の働きに支えられて、これからも、福音が全世界の人々に力強く語られていくように、わたしたちも祈りましょう。

## 〈祈り〉

聖霊なる神様、あなたがわたしたちと共にいて、わたしたちを助けてくださっていることをありがとうございます。これからも、わたしたちがイエス様を信じて、イエス様と一緒に生きていけるように守ってください。イエス様の福音が全世界に語られるように、世界中の教会の働きと、そのために働く人を励まし力づけてください。





**〈ねらい〉**

聖霊の注ぎは、旧約の預言の成就であり、神の約束の実現であることを覚える。

**〈子どもカテキズム〉**

問24 主イエス・キリストは、私たちの救いのために、どのようなお働きをしてくださったのですか。

答 主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、三日目に永遠のいのちによみがえられました。

ですから、私たちは、罪赦されて神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

**〈展開例〉**

○聖霊降臨の出来事がどのようなものであったかを使徒言行録2章から確認しよう。

○使徒言行録2章14節からはペトロの説教が記さ

れているが、その中の17-21節がヨエル書3章1-5節の引用であることを確認しよう。

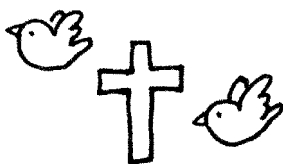
○ペトロが旧約聖書の御言葉あるヨエル書を引用したのはどうしてなのか考えてみよう。

→ペトロは、人々に自分たちに起きた聖霊降臨の出来事が、旧約聖書の時代から神さまが約束されていたことの実現であることを示そうとしたのである。

○聖霊降臨の出来事が、今の私たちにとってどのような意味があるかを考えてみよう。

→聖霊降臨の出来事は、キリスト教会の始まりをあらわしているが、それだけではないことを覚える必要がある。

聖霊の力は、今の私たちに対しても働いている。私たちは聖霊の働きによって信仰を与えられ、イエス・キリストに結ばれ、信仰者としての歩みを導かれているのである。



**〈序〉**

サムエルへの主の呼びかけは、子どもたちに対して神からの語りかけに耳を傾ける「心の姿勢」を教える上でも有益な個所である。また、神の語りかけは、厳かなものであって、それは聞く者の心を突き刺すこともあることを教えている。

**〈稀であった特別啓示〉**

祭司エリの息子たちは、主に逆らって主を怒らせた。その怒りは息子たちがほしのままに生きることを放任した父親であり祭司であるエリにも及んだ。そして、主なる神は一人の神の人をエリのもとに送り、エリとその息子たちの罪を糾弾し、裁きが下されることを宣告した(2:27-36)。

したがって、神からの言葉が全くなかったわけではなかったが、特別啓示として当時、「主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった」(3:1)。

**〈エリの子たちとサムエル〉**

上記のとおりエリの子たち、ホフニとピネハスは、父エリという言葉に耳を傾けようとせず、「主は彼らの命を絶とうとしておられた。」それとは対照的に、「少年サムエルはすくすくと育ち、主にも人々にも喜ばれるものとなった」(2:25-26)。この少年サムエルに当時稀であった主の言葉が臨んだのである。

**〈サムエルに対するエリの手ほどき〉**

3章1~9節までは、少年サムエルに対する老祭司エリの信仰の手ほどきが記されている。

神の箱が安置された主の神殿で寝ていた少年サムエルに主の呼びかけがあった。サムエルは、エリが自分と呼んでいるものと思い、エリのもとを訪ねた。しかし、エリはサムエルを呼んでいない事実を告げ、彼を寢床へ帰した。

再び同じことがサムエルとエリとの間でくりかえされ、エリは、それが神からの特別の語りかけであると悟り、サムエルに指示を与えた。「戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いな

さい」と(3:9)。

最初に主からの呼びかけを耳にしたサムエルは、「ここにおります」と答えた。これは預言者イザヤが主の召命を受けた時に答えた表現と似ている(イザヤ6:8)。主の御前に立つ心の姿勢として、「主よ、わたしはここにおります」という応答は大切な事柄である。エリもまた主の呼びかけに答える際の心の姿勢をサムエルに教えた。「……もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。しもべは聞いております』と言いなさい」(3:9)。これは、まさに主の御言葉を聞く時の信仰者の姿勢である。日曜学校であれ、大人と共にささげる礼拝であれ、主の御言葉が語られる時、この言葉を心の姿勢とすることを教えることは大事である。

**〈主から託宣が与えられる少年サムエル〉**

3章10~18節は、主からの託宣を受け取ったサムエルがエリにありのままを伝える辛い場面である。サムエルはエリから手ほどきを受けた通りに主からの御言葉を受け取った。しかし、その御告げは少年サムエルには耐え難い主からの託宣であった。エリとその家族に対する主からの厳しい裁きの託宣だったからである。

主からの託宣の一部始終を語ることを命じられたサムエルは、エリにすべてを伝えた。エリもまた厳しい託宣を主からのものとして厳粛に受け止めた。サムエルは主からの御告げを受けた通りに語ることの大事さをこの時、主とエリから学ばされた。

こうして主からの託宣が委ねられる人物としての訓練が与えられ、サムエルは主と共に居てくださり成長が与えられた。そして、すべての人々は「サムエルが主の預言者として信頼するに足る人であることを認めた」(3:19-21)。

主の御言葉に耳を傾け、主の預言者として成長して行くサムエルと、自分の息子たちの悪行を正しえなかった老祭司エリに対する厳しい宣告とが好対照に描かれている個所である。(芦田高之)

テキスト サムエル記上 3章  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問76

### 〔単元のねらい〕

神さまは、罪によって広がる世の闇の中にあっても、人に御心を示されることを望まれ、サムエルを呼びだしてくださった。しかも幼いサムエルが神さまの言葉を聞く姿勢をとるまで、忍耐して呼び続けてくださった。この神のご意志と忍耐と愛によってサムエルは神の言葉を聞く者となった。神さまは、私たちにも同様に呼びかけてくださっている。しかもイエスさまを闇の世にお送りくださるほど、神の救いのご意志ははっきりとわたしたちに向けられている。今、子どもたちとともに、サムエルの姿勢にならって、神の言葉を待ちつつ祈りましょう。

## 「主よ、お話しください。僕は聞いております」

今日も、大好きなみんなといっしょに聖書の言葉を聞くことができ、本当に嬉しく思います。

今日読んだところで、1節に、「そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった」とありますね。この時代、神さまは、「祭司」や「預言者」という人を立てられ、それらの特別な人を通して、言葉や幻によって、人にお考えやご意志を表しておられました。そして人々が神さまの言葉に従って歩むことを望んでおられました。しかし、サムエルさんが小さいころは、そのような交わりがほとんど無くなりかけていたと言われています。どうしてでしょうか。神さまが、人には語りたくない、知らないとおそばを向かれたのでしょうか。そうではありません。人のほうが神さまのことを知ろうとしなかったからです。前の章の12節には、祭司エリさんの息子たちが「ならず者で、主を知ろうとしなかった」と書かれています。つまり、形式的には神さまを礼拝をしていましたが、心からするのではなく、むしろ心は自分のこと、その日食べることや遊ぶこと、自分の関心事や自分の得になることでいっぱいになって礼拝をしていたのでした。そこには、神さまの言葉を聞きたいとか、神さまのことをもっと知りたいという心はまったくなかったのです。そのような人たちが間に立って、いくら礼拝をささげても、神さまの言葉が人々のところに届

くことはありませんでした。では、神さまは、人のそういう態度にあきれて、このような人々にはわたしの言葉は通じないから語るのはやめようとあきらめてしまわれるのでしょうか。

そうではありませんでした。神さまの言葉をなんとかしても人々に届けるために、小さな小さな子どもを選ばれました。それがサムエルさんです。神さまはサムエルさんにどのようにお語りになったのでしょうか。今日の箇所を一緒に見ていきましょう。

サムエルさんは10歳前後だったのでしょうか。みんなとおなじくらいかな。サムエルさんはエリさんのお手伝いをして、一緒に神殿に住んで、神様にお仕えしていました。

ある晩のことです。エリさんは自分の部屋で寝ていました。そして、サムエルさんは神さまの神殿の中で、そこにある火を消さないように番をしながら、そのそばで寝ていました。すると突然、「サムエル」という声が聞こえました。サムエルさんは飛び起きて、「ここにいます」と答えて、急いでエリさんのところに走って行きました。エリさんに呼ばれたと思ったからです。でも、エリさんはサムエルさんを選んでいませんでした。ですから、「戻っておやすみなさい」とサムエルに言いました。サムエルが寝ぼけていると思ったのかも知れません。サムエルさんは、おかしいなど思い

ましたが、エリさんが言うように戻って寝ました。ところが、また声がありました。「サムエル」。今度もサムエルさんはぱっと飛び起きてエリさんのところに行き、「呼ばれたので来ました」と言いました。けれども、やっぱりエリさんは呼んでいません。エリさんは、いったいどうしたことだろうと思いつきながら、「わが子よ、戻っておやすみ」と言いました。サムエルさんも「おかしいなあ、確かに呼ばれたんだけどなあ」と思いつきながら、また神殿に戻って寝ました。しかし、また声がありました、「サムエル」。サムエルさんはまた起きてエリさんのところに行きました。そして、とうとうエリさんは気がつきました。「ああ、これは神さまがサムエルさんをお呼びしているに違いない」。そして、サムエルさんにこう教えました。「もし、また呼びかけられたら、『主よ、お話をください、しもべは聞いております』と言いなさい」。サムエルさんはその言葉をちゃんと覚えて神殿に戻り、また寝ました。さて、サムエルさんが寝ていると、神さまがそこにきて、これまでと同じように呼びかけられました。「サムエル」。サムエルさんはぱっと飛び起きて、エリさんに教えられたとおりに、「どうぞお話しください。しもべは聞いております」と答えました。すると、神さまはご自分のお考えやご計画をサムエルさんに教えられました。

神さまは、何回サムエルさんをお呼びしてくださったのでしょうか。神さまはサムエルが気づくまで、四度も呼びかけてくださってたんだね。最初サムエルは、「まだ主を知らなかった」状態でした。ですから、神さまの声を聞いても、それが神さまだとは気づきませんでした。それだけ幼かったんだね。エリさんから、それは神さまがお話してくださっているのだということ、そして、そのときどういう態度で聞いたらいいかを教えられて、やっと神さまの言葉を受け取ることができました。このように、神さまはサムエルさんが成長するのを待っていてくださり、その気づかない幼い

ときにも、それでも呼び続けてくださっていたのですね。

神さまは、このようにご自身の言葉を人に伝えたいと望んで、人が聞く姿勢をとることができるまで待っていてくださいます。その間もずっと呼び続けてくださるほど、人を求めていてくださるお方なんですね。なぜならそこにこそ、人が救われる道があるからです。神さまのことなんて知らない、自分のことだけ考えてしまいます。そうして、自分勝手に歩いていく先にあるのは滅びですね。エリさんの息子たちはまさにその滅びの道を歩いていくことになりました。でも神さまの望みは、神の言葉を聞き、それに従って歩み、救われることです。そして、ついにはご自分の独り子イエスさまを地上に送られて神さまの言葉を人々に教え、十字架につけられて御心を示されるほど、はっきりと自分の言葉を聞くように、聞いて救われるようにと望んでくださったのです。これがわたしたちに与えられている、神さまの呼びかけです。

今日もまた、神さまはみなさんに呼びかけておられます。聖書という神さまの言葉を通して、呼びかけてくださっています。そしてイエスさまという私たちと神さまの間に立ってくださる方を通して呼びかけてくださっています。「○○くん、○○さん。わたしの言葉を聞き、そして救いの道を歩みなさい」と。

私たちもまたサムエルさんと同じように、神さまの言葉を聞きましょう。「主よお話しください。しもべは聞いております」。この祈りの姿勢こそが、神さまの言葉を聞く姿勢です。自分の心にある、あらゆる自分のことを神さまに委ねて、自分の言葉を沈黙させ、ただ神さまお話しください、そう願って祈りましょう。神さまはみんながそう祈ることができるまで、今日も待っていてくださっています。(草野 誠)

---

[今週の暗唱聖句]      サムエル記上 3章10節 (後半)

サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております」。

---

## 〈展開例〉

今日は、神さまからのお声を聞いた少年サムエルのお話をしたいと思います。その前に、みなさんに質問があります。みなさんは、自分が赤ちゃんだった時のことを覚えていますか？ 生まれたばかりの赤ちゃんだったころはどんなだったかな。お父さんやお母さんと、何でも上手にお話が出来ましたか。いいえ、そんなことはありませんね。赤ちゃんのうち、まだ上手に話すことは出来ません。お母さんが話しかけても、お返事も出来ませんね。でも、お父さんやお母さんは自分の赤ちゃんが可愛くてしかたがないですから、顔を見れば「〇〇ちゃん」と名前を読んだり、泣いていれば「どうしたの？ お腹がすいたの？ どこか痛いのかな？」と聞いてみたり、ご機嫌で笑っていれば「嬉しいね、気持ちいいね」と一緒に喜んだり、毎日何度も話しかけてくれたと思います。それは、みんなのことが大好きだからです。そんな赤ちゃんが少しずつ大きくなって、お話が出来るようになって、「〇〇ちゃん」と読んだときに「はい」なんて初めてお返事をしてくれた時には、とても嬉しくて大喜びしたことでしょう。そんなお父さんやお母さんの愛のように、またはそれよりもっと深くて大きな愛で、神さまはみなさんのことを愛してくださっているのです。

では、サムエルのお話をしましょう。サムエルはその時まだ10歳くらいの子どもでした。でも、エリさんという神さまのご用をする方のお手伝いをしながら、神殿（教会の様な所）に住み、神さまにお仕えて暮らしていました。

ある夜のことで。どこからか「サムエル」と呼ぶ声が出て目を覚ましました。そこでエリさんの寝ているところへ行き、「私を呼びましたか？」

と聞きました。でもエリさんは呼んでいないと言います。「戻っておやすみ」と言われたので戻って寝たのですが、またしばらくすると「サムエル」と呼ぶ声があります。起きてもう一度エリさんのところへ行き、「呼びましたか？」と聞きました。でも、やはり呼んでいないと言います。また同じことが続き、エリさんはとうとう、これは神さまからの呼びかけに違いない、と気付きました。そこでサムエルに、「もしまた呼ぶ声があったら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい」と言いました。サムエルが戻っていると、また「サムエル」と呼ぶ声がありました。そこで、サムエルは起きて、エリさんに教えられたとおりに答えました。すると神さまは、大切なお話をサムエルさんに伝えたのでした。

神さまは、この様に何度もサムエルに呼び掛けてくださいました。それは、サムエルが神さまの呼びかけに気付くまで、何度も繰り返されたのです。

さて、神さまはサムエルにだけ、このようにお話されたと思いますか？ いいえ、同じことを私たちにもしてくださっているのです。私たちが気付いていない時も、お返事できない時にもずっと、そして何度も呼びかけてくださっているのです。イエスさまや聖書を通して、神さまは私たちにいつも呼びかけ、私たちが気付いて、「神さまお話しください。聞いています」と答えるのを待っているのです。

天のお父様である神さまも、自分の子のように私たちを愛してくださっています。その私たちが、神さまの呼びかけに心を向けてお返事することを、心から喜んでくださるでしょう。

※次ページへ続く



〈やってみよう・遊びのアイデア〉

○6月19日分

手遊びをしよう

教師が手拍子をしながら、「○○ちゃん(くん)、○○ちゃんはどこでしょう」と子どもの名を一人ずつ呼びます。呼ばれた子は、「ここです、ここです、ここにいます」と両手をあげて、手のひらを動かし、キラキラさせながら応答して歌う。応答を繰り返しながら全員の名を呼ぶ。呼ばれていない子は手拍子で参加する。

どこでしょう

♩=92 作詩 作曲者不詳

○○ちゃん(くん) ○ ○ ちゃんはどこでしょう  
 ここです ここです ここにいます

○6月26日分

うた遊びをしよう

「子どもの王さま」

- ①王さまのかぶる冠を作り用意しておく。
- ②輪をつくる。(椅子を丸く並べて座っても良い)
- ③輪の中央に一つ椅子を置き、王さまの椅子とする。
- ④一人王さまを決めて、椅子に座る。
- ⑤王様の周りで輪になった子が歌う♪

♪きれいな 丸い 輪の中に 子どもの王さま いらっしやる

\*はじめに立って ☆お辞儀して ★それからぐるりと回らましよう

\*部分で王さまは立ち上がり、周りの輪の中から一人選び、歩いて行って前に立ち、

☆お辞儀し、

★両手を取って手をつなぎ、ぐるりと半分回転しながら場所を交代し冠を渡す。

- ⑥王さまに選ばれた人が、次に冠を付けて中央の王さまの椅子に座り、王さまになる。
- ⑦歌を繰り返しながら王様を交代する。

こどものおうさま

外園曲

きれいな まるい わのなかに こどもの  
 おおさま いらっしやる はじめに たって  
 おじぎして それから ぐるりと まわりましよう

## 〈ねらい〉

神さまはこの闇の世にあっても御心を示され、一人ひとりに呼びかけていらっしゃる。主の御言葉を聞く耳と心を求めて祈ることを伝える。

## 〈ワーク〉

今日のお話を思い出して、( ) の中の正しいほうに○をしましょう。6と7には自分の名前を入れてください。神さまの呼びかけにいつでも答えることができるように、一緒に祈りましょう。

【Q1】少年サムエルは、(神殿・学校) で、神さまにお仕えしていました。

【Q2】サムエルは、寝ているとき、(祭司エリ・神さま) に呼ばれました。

【Q3】サムエルはすぐに目をさまして、「ここにいます」と答えて、(サムエルのお父さん・祭司エリ・神さま) のところに行きました。

【Q4】祭司エリが、「サムエルをお呼びになったのは(サムエルのお父さん・神さま) ですよ」と、教えてくれました。

【Q5】サムエルは、(3回目・4回目) に、「主よ、お話しください。しもべは聞いております」

と答えました。

【Q6】神さまは、聖書、神さまの御言葉をとおして、( ) にも呼びかけてくださっています。

【Q7】神さまは、( ) の言葉を聞き、救いの道を歩みなさいと招いておられます。サムエルさんのように、「主よ、お話しください」とお答えできるように祈りましょう。

## 〈お祈り〉

天のお父さま。毎日、聖書を読んだり、お祈りをして、神さまの御心がかかるようにしてください。神さまの呼びかけにすぐに答えることができるよう、熱心な心をお与えください。

## 〈答え〉

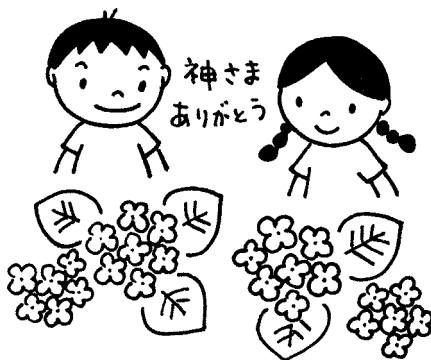
【Q1】神殿

【Q2】神さま

【Q3】祭司エリ

【Q4】神さま

【Q5】4回目



## 〈ねらい〉

神さまはいつも私たちに呼びかけておられます。心を開き、その呼びかけを聞いて受け入れる者になろう。神さまを信じないで滅びる者ではなく、信じて永遠の命を得る者となろう。

## 〈展開例〉

サムエル（神の言葉に聞き従い神の祝福を受ける者）とエリの息子（神の言葉を聞こうともせず神の裁きを受ける者）を対比して、神を信じて従って生きる者の恵みをわかりやすく話す。

○少年サムエルはお父さんお母さんと一緒に暮らすのではなく、神殿で祭司エリの手伝いをして神さまにお仕えするという暮らしをしていました。サムエルは10歳位の子どもだったので、むずかしいお手伝いは出来なかったかもしれません。でも、神さまを信じて純真な心で神さまとエリにお仕えしていました。

○そんなサムエルに主は呼びかけ語られました。主の呼びかけに対し、サムエルはしっかりと答え主のお言葉通りに従いました。サムエルは主から祝福を受け、愛されて、立派に成長しました。人々からは預言者（神さまの言葉を人々に語り伝えるという役目）にふさわしい人として信頼されました。

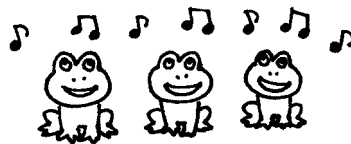
○祭司エリには二人の息子がいました。エリの息子たちもサムエルのようにエリの手伝いをして主に仕えていたでしょうか。エリの息子たちは神さまに仕えるどころか神さまが嫌うこと（悪いこと）ばかりして、自分勝手に生きていました。当然神さまからの恵みを受けることはできません。神さまの怒りを招き、神さまの裁きがくだされ、二人の息子は戦場で共に命を失いました。

○サムエルのように神さまの言葉を受け入れて信じる者は、神さまに愛され、祝福され、救いの恵みを受け、永遠の命をいただくことができます。しかし、エリの息子のように神さまの呼びかけにも、神さまの言葉にも耳を傾けない者は、神さまの恵みを受けられずに滅びの道を歩むこととなります。これは恐ろしいことです。

○私たちは、しっかりと心を開き、神さまの言葉を聞き、神さまと共に歩いていきましょう。そうすれば神さまから永遠の命が与えられます。これはすばらしい神さまの恵みです。私たちは、神さまを礼拝し、祈り、賛美して、神さまを信じる者として生きていきましょう。

## 〈祈り〉

神さま、いつも神さまの御声を聞いて、従うことのできる者となれるようにしてください。





## 〈ねらい〉

御言葉による神の語りかけを知り、御言葉に聴き従う姿勢へと導かれる。

## 〈子どもカテキズム〉

問76 お祈りとは何ですか。

答 神さまにお話しすることです。

そのためには、まず神さまからの御言葉に聴くことが必要です。

信じることは祈ることです。

## 〈展開例〉

○サムエル記に取り組む最初として、サムエル記の文脈を確認しつつ、サムエルの物語の背景を知ろう。

→士師の時代が終わり、新しい時代が始まる。

→サムエルは母ハンナによって神さまにささげられ、幼い時から祭司エリに仕えていた。

○神さまはサムエルに対してどのように語りかけられたかを確認し、その理由を考えてみよう。

→サムエルが神さまからの呼びかけとわかるまで繰り返し呼びかけられた。

神さまは、ご自身の言葉を人に伝えたいと望んで、人が聞く姿勢をとることができるまで待つてくださる。

○サムエルを呼ばれたのが主なる神さまであることを悟ったエリがサムエルに与えた助言は何だったか。またそれにはどのような意味があるか考えてみよう。

→「もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい」僕が主人の言葉に聞き従うように、神さまの言葉を僕として聞く姿勢をとるためのもの。

○エリの助言によって、主なる神さまの呼びかけと知ったサムエルに神さまは何を教えられたか考えてみよう。またそのことの意味を考えてみよう。

→エリの息子たちが神さまを汚す行為をしていると知っていながら、エリがそれをとがめなかったという罪のためにエリの家が裁かれること。神さまは新たにサムエルをご自身の御心を示す器として召し出されたのである。

○3章19節以下の記述から、その後のサムエルが神さまとどのような関係を持ち、どのように成長していったかを確認しよう。

→神さまはサムエルと共におられ、ご自身を示されるためにサムエルを通して御言葉を語られた。サムエルは主の預言者としてイスラエルのすべての人々に認められるようになった。



**〈序〉**

サムエルは年老いたとき、後継者として息子たちをたてた。しかし、二人の息子たちはサムエルのように歩まず、主が嫌われる歩みをした。若いころサムエルは、師であるエリが息子たちを正しく主の御前に歩ませることが出来なかったのを心痛めつつ見て来たはずである。しかし、今自分もまた同じ轍を踏むこととなった。

**〈王を求める民たち〉**

サムエルが後継者を正しくたてられなかったからか、民は王を求めるようになった。そのことは主の目にもサムエルの目にも悪く映ったが、主は民の声を容認された(8章)。

**〈ベニヤミン族のキシユの息子〉**

民のこの声が主に届き、主はこの民に王を与えることを容認された。それはベニヤミン族に属するキシユの子、サウルであり、彼は美しい若者で身長も他のイスラエル人たちより秀でていた。

**〈サムエルとサウルの出会い〉**

ある時、キシユのロバが行方不明になり、息子のサウルがこれを探しに出た。ロバが見つからないまま、サウルは家に帰ろうとしたが、従者が先見者の所に行って神託を求めるようにと勧めた。サウルはこの勧めに従って、先見者サムエルに会うために、その神の人のいる町へ向かった。

サウル一行が先見者、神の人、サムエルに会う前日、主はサムエルにベニヤミンから来る一人の男に油を注ぎ、その男を神の民イスラエルの指導者として立てるようにと告げ知らせておられた。

主の予告通り、サウルはサムエルを訪ねた。そして、サムエルはサウルに共に食事をすることを勧め、ロバの行方も心配するには及ばないことを伝え、更に、イスラエル全家の期待がキシユの子サウルにかかっていることを告げた(9:1-20)。

**〈わたしは小さなものです〉**

サムエルからイスラエルの指導者として自分が立てられると聞いたサウルは、自分は小さな者ゆえ、その任に就くことにためらいがあると伝えた(9:21)。主から召しを受けた者の多くは、自分の弱さ、足りなさ、小ささに二の足を踏むものである。モーセ、ギデオン、エレミヤも自らの弱さのゆえ主の召しにたじろいだ者たちである。

**〈油注ぎ〉**

サムエルは主の御告げに従って、油のつばを取り、サウルの頭に油を注ぎ、主がサウルを神の民の指導者としてたてられたことを宣言した。

「油注がれた者」とは新約時代に移ると「キリスト」という称号で呼ばれるようになる。旧約時代は王、預言者、祭司が、神から特別の任務が与えられ、神がそれぞれの任に耐えるようにと「油注ぎ」により賜物が付与されることを表した。

**〈サウルも預言者の一人か〉**

預言者の一団と出会ったサウルは、預言の霊が与えられ彼らのただ中で、サウルもまた預言する状態になった。しかし、その特別の状態は継続することなく、預言する状態は一時的なものであった。当時の預言する状態がどのようなものであったか分からないが、「主の霊が激しく降り」(10:6, 10)という表現から、主の霊の導きのもとになされる一定の預言的行為であった。

**〈まことの王であり預言者であるキリスト〉**

サウルは油注がれたが、その王職、預言者職はまことに一時的で、はかないものであった。やがてこの職務はダビデに移され、ダビデには、その子孫から永遠に神の民を治めるまことの王が生まれる約束が与えられた。この約束の御方こそ主イエス・キリストである。サウルもダビデもこの真の王が与えられるために、救いの歴史において神に用いられた器である。(芦田高之)

テキスト サムエル記上 9・10章  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13、21

### 〔単元のねらい〕

神さまは人の求めに応じて、王をたてることを認められた。しかし人の知恵や力にまかせて王を選ぶのではなく、不思議な神のご計画にもとづいて、サウルを選び、油を注いで王としてくださった。人々をペリシテ人から救うために。

しかし、サウルは不完全な人の王であり、やがてその座から追いやられる。けれども、神さまの救いのご計画は人の王の失脚によって頓挫することはない。やがて来られる完全な王、神の子である王イエス・キリストにおいて、完成する。歴史の中に流れる神の救いの御意思に信頼し、今その流れに自分たちがいることを共に覚えたい。

## 「すべては神さまのご計画のうちに」

今日も、大好きなみんなといっしょに聖書の言葉を聞くことができ、本当に嬉しく思います。

先週は幼かったサムエルさんも、今日の箇所ではすでに老人となっています。サムエルさんは神さまの言葉を生涯聞き続け、彼の時代にはイスラエルの民は敵から完全に守られていました。しかし、かつてエリさんの息子たちが神を知ろうとしなかったことからサムエルさんが選ばれていったのですが、サムエルさんの子どもたちもまた、神さまを知ろうとせず、自分の思いに任せて歩んでいました。その結果が意味するところは、敵によって再び虐げられることになるということです。

そこで、今度は不安になった民のほうからサムエルさんに提案します。「これからは、祭司や預言者ではなく、他の国のように人間の王を立ててください」。この提案に、サムエルさんは腹を立てますが、神さまは、意外にも、「民の言うままに従いなさい」と言われました。しかし、民の本心は見抜いておられました。それは、「彼らが退けたのはあなたではない。彼らの上にわたしが王として君臨することを退けているのだ」というものでした。この民らの背信行為すらも、神さまは受け入れられ、民の思いをお許しになります。非常に興味深いですね。しかも神さまは、人々は人間の王をいただくことで、搾取されることを覚悟

しなければならない、やがて泣き叫ぶことになるという警告をわざわざ伝えます。そのうえで、民らの意思を尊重されます。ここに、神さまのご計画の大きさということを知るのではないのでしょうか。人間の自分勝手な思いや神さまに対する背信行為すらも、神さまのご計画を超えることはないのです。

さて、イスラエルの民の中でももっとも小さな部族の、さらにその中でも最小の一族にサウルという若者がいました。彼はとても美しく背が高く、大変目を引く青年であったようです。ある日、彼の父親のロバが数頭迷い出てしまいました。そこで、サウルが従者と共に捜しに出かけたのですが、見つかりません。あきらめて帰ろうとすると、従者はこの近くに「神の人」がおられるので、その人に進むべき道を尋ねたらどうでしょうかと進言します。サウルは何も準備をできていないことに戸惑いながらも、彼の進言に従って「神の人」のところに行くことを決意します。そして、「神の人」がいるという町に着きました。しかし、その町はよく知らない町でしたから、どうしたら「神の人」に会えるのか分かりません。すると水汲みに出てきた娘たちから、「神の人」に出会うタイミングを聞くことができました。こうして、サウルにとっては思いがけない仕方でしたが、しかし

すべてが備えられて、サウルは「神の人」、それはサムエルさんのことでしたが、彼に会うことができました。

さて、サムエルさんもすでに神さまから油を注ぐべき人物について聞いていました。そしてサウルこそその人だと告げられます。サムエルは慎重にサウルに近づき、「主があなたに油を注ぎ、ご自分の民の指導者とされたのです」と告げました。サウルは非常に戸惑うのですが、神の言葉に従って、頭に油を受けました。

このようにすべてのことが、サウルの思いの外で、神さまのご計画と備えとして、すでにありました。そして、その通りになっていったのです。そこには、神さまがご自分の民をサウルという王によってペリシテ人から救うというご意思がありました。どこまでも、神の御旨は、民を救われようとされます。

それにも関わらず、民は神ではなく、人を求めます。サウルが公に王として選ばれる日、神さまは再び「エジプトから救い出したのはわたしである」とご自身をあらわされますが、人々の、神を退け、人の王を求める思いは変わりませんでした。サウルが人々の真ん中に立ったとき、サムエルは、「主が選ばれたこの人を」と言ってサウルを紹介しますが、民は神を賛美することなく、ただ「王様万歳」と叫んで喜びます。人々が見ているのは、背後にある神さまのご計画やご意思ではなく、自分たちが求めていたこと、人の王さまでした。ですから、サウルが気に入らない人々がいました。彼らは自分たちこそ王にふさわしいと思っていたのかもしれませんが。だから、自分以外の者が王となることを良しとしなかったのです。しかしそこ

でもまた、神さまが働かれ、神さまによって心動かされた勇者たちがサウルに従っていきます。こうして、サウルが王となる準備が神さまによって着々と進んでいったのでした。

このように、神さまを退けるといって、人々の悪い思いすら受け入れられて、救いのご計画を進展なさる神さまは、そのためのすべてを準備してくださる神さまなのですね。

この後、サウルはやがて神さまの御旨からそれていき、王座から転げ落ちていきます。彼はどこまでも不完全な人間の王ですから、人の王によって与えられる救いもまた完全ではないのです。しかし、神さまの人を救おうとなさるご意思は完全であり、神さまの救いの御業も完全です。

このときには人々の意思を取り上げてご計画なさいましたが、やがて神さまご自身の御旨が明らかになっていきます。それはイエスさまにおいてですね。そのために神さまは、独り子イエスさまを世に遣わされ、神の子として真の王とされました。イエスさまこそ完全な王であり、完全な救いをもたらす王です。また民から搾取する王ではなく、十字架によってすべてをささげ、民に与えられる王さまでした。このように神さまの救いのご計画は、人の王によってではなく、神の子の王によって完成しました。

わたしたちはイエスさまという王さまを与えられていることに、今日も感謝いたしましょう。そして、「王様万歳」と言って喜んだ民たちのようにではなく、「イエスさまこそ真の王」、「神の御子イエスさまこそわたしたちの救い主」と言って、神さまの素晴らしい御名を一緒に賛美しましょう。  
(草野 誠)

---

[今週の暗唱聖句] サムエル記上 9章16節 (前半)

明日の今ごろ、わたしは一人の男をベニヤミンの地からあなたのもとに遣わす。

あなたは彼に油を注ぎ、わたしの民イスラエルの指導者とせよ。

---



## 〈ねらい〉

今日は王様になったサウルさんのお話をしたいと思います。

みなさんは、サムエルさんのお話を覚えていますか？ 神さまのお声を聞き、神さまに従って生きたサムエルさんも、だいぶ歳をとりました。すると、それまで神さまに従い、サムエルさんのお話を聞いていた人たちも、だんだんとサムエルさんの言うことをきかなくなってきました。そして、「自分たちにも王様が欲しい」と言い出したのです。神さまに守ってもらうよりも強くて賢い王様に守ってほしいと思ったのです。これには、神さまもサムエルさんも、とても悲しい気持ちになりました。神さまより強くて優しく、賢い人なんていませんからね。それでも人々はみんな「王様が欲しい！」と言い張ったのです。目に見えない神さまでなく、人間の王様が欲しくなってしまったのですね。それでも神さまは、人々の願いを聞いて王様を選んでくださいました。そして、サムエルさんに王様になるのが誰かを教えてくださったのです。

はじめの王様に選ばれたのは、サウルという若者でした。サウルさんは背が高くとても素敵なお父さんでした。ある日、サウルさんのお父さんが飼っていたロバが何頭か迷子になり、いなくなりました。そこで、サウルさんはお父さんに頼まれてロバを捜しに出かけました。何日もかけて、

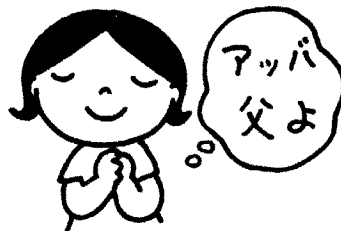
いろいろな所を捜したのですが見つかりません。そこであきらめて家に帰ることにした時、近くにサムエルさんがやってくることを聞きました。でも、どこに行ったら会えるのかは分かりません。すると、たまたま出会った人が、居場所を教えてくださいました。こうして、サウルさんは不思議な導きでサムエルさんに会うことが出来たのです。

実はその前の日、サムエルさんも神さまから、「明日ひとりの若者と会うでしょう。その人が王様になるひとです。王さまになるしるしに、頭に油を注ぎなさい」と言われていました。

神さまのご計画の通りに、サムエルさんとサウルさんは出会うことが出来ました。そしてサウルさんは頭に油を注がれて、神さまから王様になる約束を与えられたのです。人々は、自分たちの王様が決まったことをとても喜びました。そしてみんなで声を合わせて「王様万歳!!」と叫びました。

このようにして神さまは、サウル王様をたて、周りの国から人々を守ってくださいました。その後もたくさんのお王様が与えられていきますが、私たちの本当の王様であり、守ってくださるお方はただお一人、神さまの子イエスさまです。ですから私たちは、いつもイエスさまを賛美し、イエスさまの後につながって歩いていきましょう。

※102ページに〈やってみよう・遊びのアイデア〉を掲載。



## 〈ねらい〉

救いは神の御手のなかにあること、神は叫び求める御自身の民を救いだすために、人を召し出しそのつとめに当たらせられることを教える。そのためにイスラエルの歴史で、初めてサウルが王としてたてられた。しかしそれはイスラエルの人々が地上の王を求めて、まことの王であられる神を退けることでもあった。私たちのまことの王の王、主の主とはだれか。それは主イエス御自身であることを伝えたい。

## 〈展開例〉

時間があれば、今までの士師の時代を振り返り、これから統一王国時代を迎えようとしている、大きな歴史の流れを話してみる。

## 〈ワーク〉

【Q1】 いろいろな人が出てきましたが、中心人物は（A ）と（B ）です。

【Q2】 この二人はどんな働きをしましたか？  
Aさんは（ ）でした。また（ ）とか（ ）とも呼ばれています。サムエル上3章20節、同9章9、10節などを参照。

Bさんはイスラエルの（ ）、（ ）として召されようとしています。サムエル上9章16節、同10章19、24、25節などを参照。

【Q3】 その頃、イスラエルの人々は、（ ）人によって苦しめられていました。

【Q4】 神さまはイスラエルの人々をどのように

しようとお考えでしたか？

【Q5】 イスラエルの人々は、どのように考えていたのでしょうか。サムエル上10章17-19節にはどのように書いてありますか。みんなで話し合ってみましょう。

【Q6】 神さまに王として召されたサウルは、どのような人でしたか。サムエル上9章1、2節をもとに話し合ってみましょう。

【Q7】 サウルは、人々が王にしようとしたとき、どこにいましたか。サムエル上10章22節を参照。なぜ、そのようなことをしていたのでしょうか。話し合ってみましょう。サムエル上9章21、10章27節などを参照。

【Q8】 私たちのまことの王はどなたでしょうか。

## 〈お祈り〉

天のお父さま。私たちを愛して、私たちいつも一緒にいてくださるイエスさまが私たちのまことの王さまです。どうか私たちをお守りください。そして、私たちも、イエスさまの御声を聞いて、イエスさまに従うことができますように。

## 〈答え（参考）〉

【Q1】 A：サムエル  
B：サウル

【Q2】 A：預言者、先見者、神の人  
B：指導者、王さま

【Q3】 ペリシテ

【Q4】 彼らの手から救い出す

【Q6】 ベニヤミン族のキシユという人の子、美しい若者、背が高い、など

【Q7】 荷物の間に隠れていた



**〈ねらい〉**

サムエルは御告げにより、サウルに油を注ぎました。新約時代になると、「油注がれた者」とはイエスさまです。サウルが、イエス様が与えられるための救いの歴史において用いられた人であることを知りましょう。

**〈展開例〉**

今日は、神の民イスラエルの国に初めて王様が誕生した時のお話を聞きました。王様が出現することは、聖書の中で告げられていたことでした(創世記17:6、16、申命記17:14、20などを参照)。それでは、質問に答えながら、分かち合いましょう。

○新しく王様が欲しいと求めたのは誰ですか？

○王様は誰が決めましたか？

○王様に選ばれたしるしとして、誰がどんなことをしましたか？

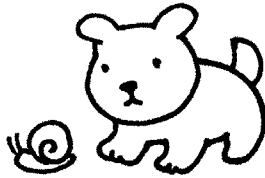
○サウルは自分が王様になる能力があると思っていましたでしょうか？

○サウルは王様になる前、何をしていましたか？

○神様はわたしたち一人ひとりを神様の働きのために選んでくださっています。私たちはどんな働きで神様のお手伝いができるのでしょうか？

**〈祈り〉**

天の父なる神様、わたしのような者でも、神様のお仕事のお役に立てることをありがとうございます。神様の御声に聞き従って、あなたにお仕える者とならせてください。



## 〈ねらい〉

歴史の流れの中に表わされる神さまの救いの御意思に信頼し、自分たちもその流れの中にあることを覚える。

## 〈子どもカテキズム〉

問13 神さまの摂理のお働きとは何ですか。

答 今、私たちに働く、神さまの善いお力のことです。

神さまのお許しがなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、神さまは私たちの父として私たちを守ってくださいます。

ですから、健康も病気も、嬉しいことも悲しいことも、すべてのことが私たちの役に立つよう働くのです。

問21 神さまは、あなたもほかの人も、罪人を滅びるままにお見捨てになりましたか。

答 いいえ、ちがいます。

神さまは、神の民となるように最初から私たちを選んでくださいました。

罪から救い出してくださるあがない主を与えてくださったのです。

## 〈展開例〉

○年老いたサムエルが自分の後継者として任命したのは誰だったか、また、その結果はどうであったかを確認しよう。

→自分の息子たちをイスラエルのために裁きを行う者として任命したが、彼らは誤った道を歩んだ。

○民がサムエルに求めたのはどのようなことであつたか、また、サムエルはその求めをどのように受け止めたかを確認しよう。

→民のために裁きを行う王を立てることを民は求めた。しかし、サムエルの目にはそれは悪と映った。

○サムエルの祈りに対して、神さまはどのように応えられたのだろうか。

→「今は彼らの声に従いなさい。ただし、彼らにはっきり警告し、彼らの上に君臨する王の権能を覚えておきなさい」

○サムエルはどのようにイスラエルの王を選んだのだろうか。またその際に何を行ったか。

→神さまがサムエルにサウルが王となることを告げられた。9章16～17節『明日の今ごろ、わたしは一人の男をベニヤミンの地からあなたのもとに遣わす。あなたは彼に油を注ぎ、わたしの民イスラエルの指導者とせよ。……』サムエルがサウルに会うと、主は彼に告げられた。『わたしがあなたに言ったのはこの男のことだ。この男がわたしの民を支配する』。

→サムエルは、サウルの頭に油を注ぎ、主がサウルを神の民の指導者としてたてられたことを宣言した。油を注ぐのは神さまから特別な務めが与えられたことのあるしである。「油注がれた者」は、旧約では「メシア」、新約では「キリスト」という称号となる。





# 2011年度カリキュラム (2011年7～9月分)

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
7月3日	ダビデの召命	サムエル上16章	サムエル上16:7
	主は目に映ることをご覧になるのではない。見えないものに目を注ごう		
7月10日	ダビデとゴリアト	サムエル上17章	サムエル上17:47
	ダビデはただ主なる神に依り頼んで勝利した。主に依り頼む心をはぐくもう		
7月17日	ダビデとヨナタン	サムエル上20章	サムエル上20:42
	友情、信仰のきずなに結ばれた友だちが与えられることを求めよう		
7月24日	ダビデへの契約	サムエル下7章	サムエル下7:11, 12
	主は神殿建築を願うダビデを祝福し、契約を結ばれた。契約の真実を喜ぼう		
7月31日 (平和主日)	平和があるように	詩編122編	詩編122:8
	平和の土台はキリストにある。与えられた神の平和を人々と分かちあおう		
8月7日	逃げ出したヨナ	ヨナ1章	詩編139:7
	神の御心である救いの恵みは世界に及ぶ。主なる神の御心に喜んで従おう		
8月14日	魚の腹の中のヨナ	ヨナ2章	ヨナ2:10後半
	ヨナの祈り。不従順な者を赦し、立ち上がらせてくださる神をほめたたえよう		
8月21日	ニネベで宣べ伝えるヨナ	ヨナ3章	ローマ9:15
	主なる神は悔い改めを喜ばれる。罪人を赦してくださる神をほめたたえよう		
8月28日	とうごまの木とヨナ	ヨナ4章	マタイ18:14
	すべての人を愛して惜しむ神の愛を知って、悔い改めの愛に生きよう		
9月4日	ソロモンの知恵	列王上3:4-15	箴言9:10
	真実の知恵は神のもの。善と悪を判断する知恵、聞き分ける心を祈り求めよう		
9月11日	ソロモンの偶像礼拝	列王上11:1-13	列王上11:6
	神からの知恵を捨て、偶像礼拝を行ったソロモン。神の怒りを心に刻もう		
9月18日	バアルと対決するエリヤ	列王上18:16-45	列王上17:1後半
	バアルとたたかうエリヤ。主こそまことの神であることを知るう		
9月25日	バビロン捕囚	歴代下36:11-23	ローマ11:22前半
	愛する民をうたねばならない神の痛み。歴史を支配しておられる神を畏れよう		

## 2011年度 年間カリキュラム

(2011年4月～2012年3月)

二年サイクル聖書物語の第二年

	月 日	教会暦・行事	主題	
2011年 第41号	4月3日	レント・進級式	悪霊を追い出すメシア	マタイ8:28-34
	4月10日	レント	罪を赦すメシア	マタイ9:1-8
	4月17日	受難週主日	十字架のキリスト	マタイ27:45-56
	4月24日	復活祭	キリストの復活	マタイ28:1-10
	5月1日		ギデオンの召命	士師6章
	5月8日	母の日	ギデオンの精鋭	士師7章
	5月15日		ささげられるサムソン	士師13章
	5月22日		サムソンの祈り	士師16章
	5月29日		ナオミとルツ	ルツ1章
	6月5日		ルツとボアズ	ルツ2章(～3章)
	6月12日	聖霊降臨・花の日	聖霊の降臨	ヨエル3章
	6月19日	父の日	サムエルの召命	サムエル上3章
	6月26日		サウルの召命	サムエル上9・10章
第42号	7月3日		ダビデの召命	サムエル上16章
	7月10日		ダビデとゴリアト	サムエル上17章
	7月17日		ダビデとヨナタン	サムエル上20章
	7月24日		ダビデへの契約	サムエル下7章
	7月31日	(平和)	平和があるように	詩編122編
	8月7日		逃げ出したヨナ	ヨナ1章
	8月14日		魚の腹の中のヨナ	ヨナ2章
	8月21日		ニネベで宣べ伝えるヨナ	ヨナ3章
	8月28日		とうごまの木とヨナ	ヨナ4章
	9月4日		ソロモンの知恵	列王上3:4-15
	9月11日		ソロモンの偶像礼拝	列王上11:1-13
	9月18日	(19敬老の日)	バアルと対決するエリヤ	列王上18:16-45
	9月25日		バビロン捕囚	歴代下36:11-23

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	
第43号	10月2日		回復の約束	イザヤ35章
	10月9日		解放の告知	イザヤ61:1-4
	10月16日		新しい契約	エレミヤ31:31-34
	10月23日		主の日が来る	マラキ3:19-24
	10月30日	宗教改革記念日	旧約の歴史を振り返る	詩編106編
	11月6日		弟子の派遣	マタイ9:35-10:4
	11月13日		主イエスによる平安	マタイ11:25-30
	11月20日		「天の国」のたとえ	マタイ13:44-52
	11月27日	アドベント	五千人の給食	マタイ14:13-21
	12月4日	アドベント	カナンの女の信仰	マタイ15:21-28
	12月11日	アドベント	わたしたちの間に宿られた神	ヨハネ1:14-18
	12月18日	アドベント	ヨセフへの告知	マタイ1:18-25
	12月25日	クリスマス	東方の学者たち	マタイ2:1-12
2012年	1月1日	新年	ベト口の信仰告白	マタイ16:13-20
第44号	1月8日		死と復活の予告	マタイ16:21-28
	1月15日		天の国でいちばん偉い者	マタイ18:1-5
	1月22日		「ぶどう園の労働者」のたとえ	マタイ20:1-16
	1月29日		エルサレムのために嘆く	マタイ23:29-39
	2月5日	(11信教の自由)	神殿の崩壊の予告	マタイ24:1-14
	2月12日		目を覚ましていなさい	マタイ24:36-44
	2月19日	(22-レント)	「十人のおとめ」のたとえ	マタイ25:1-13
	2月26日	レント	タラントンのたとえ	マタイ25:14-30
	3月4日	レント	過ぎ越しの食事・主の晩餐	マタイ26:17-30
	3月11日	レント	ゲツセマネの祈り	マタイ26:36-46
	3月18日	レント	ベト口の裏切り	マタイ26:69-75
	3月25日	レント	死刑判決	マタイ27:15-26

### 〈執筆よりひとこと〉

- 教会学校に子どもたちが少なくなったと言われている今、神様が多くの子どもたちを教会に送ってくださることを願いながら、執筆しました。(いずみ教会教会学校)
- 今回の担当が小学科下級ということで、言葉遣いやQ&Aを用いて、わかりやすい内容となるよう注意して書きました。聖書の御言葉が子どもたちに伝わり、理解することに役立つものとなるよう祈り願います。(那加教会教会学校、中根義也)
- 教会学校教師および信徒説教者で分担執筆いたしました。(上福岡教会教会学校)
- 子どもたちが御言葉によって成長していくようにと祈っています。(松田基教)
- 編集部会議の楽しさは、カリキュラム編成にあると思います。日程と主題という大枠が決まっていて、そこに聖書箇所・単元目標・暗唱聖句を埋めてゆく作業です。デッサンされたキャンバスに、色々な絵の具を乗せてゆくような営みです。一つひとつの絵の具は、メンバー一人ひとりの黙想で、それが混ざり合ってゆくところに、聖霊の導きを感じるのです。(二宮 創)
- 発行11年目を迎えました。小さな営みですが、多くの教会が用いてくださるようになりました。志を継承し、この営みを広げていくことができるよう祈っています。(望月 信)

### 〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円)をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第36号までは一部500円で販売します(品切れの号もあり)。
- 申し込みの受け付けと送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼』のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

### 〈あとがき〉

- この第41号により、弊誌は発行11年目を迎えました。これまでの歩みが守られたことを主なる神に心から感謝いたします。また、多くの執筆者の方々のご協力に心からのお礼を申し上げます。主なる神は、わたしたちに志を与えるだけでなく、多くの支援を加えて与えてくださり、このわざを導いてくださいました。これからも志高く、祈りをもって取り組んで参りますので、引き続きご支援を賜りますよう、心からお願い申し上げます。
- 今号で満10年の特集を予定していましたが、弊誌誌上ではなく、別の形で行うことになりました。これまでの歩みを振り返り、また、バックナンバーを資料としてまとめることなどを計画しています。弊誌がいよいよ教会教育のために用いられるよう願っています。皆様のご意見ご感想をお待ちしていますので、ぜひお寄せください。
- 「信仰の証」を掲載します。受洗・信仰告白の証を分かち合うことにより、互いに励まし合うことを目指しています。教会で受洗者・信仰告白者がおられましたら、ぜひご連絡ください。
- 日本キリスト改革派教会の聖書日課『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。教案誌編集部より提供させていただいています。それぞれの家庭で、また教会で、祈りの場が祝福されるよう願っています。
- 様々なご意見、情報をお気軽に編集部までお寄せください。弊誌は、皆さまのものです。皆さまに奉仕することこそ、その使命、目標です。今後とも宜しくお願い致します。
- Soli Deo Gloria!

---

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	説教展開例	木下裕也 (名古屋教会牧師)
巻頭説教	芦田高之 (新浦安教会牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)
教会学校・日曜学校訪問	漆崎英之 (金沢伝道所宣教教師)	長谷川潤 (四日市教会牧師)	二宮 創 (太田伝道所宣教教師)
	漆崎春美 (金沢伝道所教会学校教師)	草野 誠 (恵那教会牧師)	
本誌の基本方針	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	分級展開例	
聖書研究	後藤公子 (元インドネシア派遣女性宣教教師)	幼稚科	いずみ教会教会学校
	山下朋彦 (平和の君伝道所宣教教師)	小学科下級	那加教会教会学校
	辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	小学科上級	上福岡教会教会学校
	坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)	中学科	松田基教 (高松教会牧師)
	牧野信成 (西部中会教師)	イラスト作画	
	芦田高之 (新浦安教会牧師)	表紙	田口裕美 (尾張旭教会)
		本文	岡野美佳 (青葉台教会)

---

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
長谷川潤	四日市教会牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師

---

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』  
2011年4・5・6月号 (季刊)  
第41号  
2011年2月27日発行

---

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)

---